る。詳言すれば、吾々は元來天性として、孤立獨存を嫌ひ、共同生活を好む所からして、相近づきて仲間にならうと、互に引き合ふやうになつて居るのを指して言ふのである。て愛情を廣義に解釋すれば、天然に對し、動物に對する愛情もあり、又朋友間の愛情、親子間の愛など、凡てのものを抱含する譯であるが、之を狹義に解する時は、單に男女間の愛情、卽ち戀愛を意味することになるのである。併し同じく戀愛にしても、リボーの說く所に依れば、之を三段に分けることが出來る。其第一は、本能的戀愛と言ふもので、之は一般に動物間にも見受けらるゝもので、男女は生理的に自ら相引き合ひ、さうして性慾を滿足せしめんとし、それ以上には何等高尙なる感情なり、思想を有たないものである。而して其第二は、情緒的戀愛と言ふものである。之は本能的戀愛より、更に一歩を進めたもので、性慾的愛情に加ふるに、種々なる感情を以てするものである。スペンサーは、此種の戀愛を分解して、肉慾的愛情の外に、親愛の情、尊敬の心、同情の念など種々なる感情を包含するものとして居る。更に第三は、合理的戀愛と言ふものである。之は吾々の知能が、特殊の觀念より、抽象的なる概念を構成するやうに、吾々の戀愛も更に向上して、特殊の人を戀愛すると言ふのではなくして、其理想を求めんとするものである。詳言すれば、具體的なる個人の裡に、抽象的理想的なる戀愛を構成せんとするものである。つまり世の所謂「プラトーニック、ラブ」と稱ふるもので、全然肉慾的愛情より脫出したる、純潔なる友人間の愛情を指して言ふのである。

斯樣に愛情は區別せらるゝものであるが、一體に愛情の起る時は、何人も莞爾として笑を含み、又なるべく愛するものに接近して、或は接吻し、或は愛撫し、或は互に抱擁して、いつ迄も共存同居しやうと希ふものである。斯くの如く愉快な情であるからして、動作は自然に活潑になり、血行なり、呼吸は旺盛になり、爲に內臟器官にも影響し、其作用を敏活ならしむるもので、母親にありては乳の分泌を增進せしむる程である。

それから同情と言ふは、他人の心中に起る喜悅なり、悲哀の情をば、自分にも分配し、他人と同じやうに感じやうとするものである。之を愛情と比較して見るに、愛情は時に幾分か利己的の分子を含んで居ることもあるが、同情は全

然自己の利害を顧みないで感ずるものであるから、純然たる愛他的社會的の感情と言はれるのである。尤も他人に對して愛情の存する場合には、無論同情も容易く起り得るものであるから、判然兩者を區別し難いこともあるけれども、吾々は全く見ず知らずの他人で、毫も愛着の念を有たないものに對しても、否更に進んでは、自己の敵手と認め、憎惡の念をさへ抱けるものに對しても、時に如何にも氣の毒だ、哀はれなことだと、同情に堪へないこともあり得るので、同情は愛情なくとも感ずることが出來、隨て同情は愛情より一層廣い範圍のもので、更に進歩したものであると言はれることである。

然るに、リボーに據れば、同情の進化に三段階を認めることが出來る。其第一は、生理的同情である。之は同情の原始的狀態にあるもので、他人の笑つたり、泣いたりするのが、自然に傳染するもので、全く反射的に、自發的に、無意識的に起る一種の模擬運動である。第二のものは、心理的同情である、之は純粹に自他情緒の一致であつて、他人の示す感情の表出に基き、自己の心中に同じやうな感情を惹起するものである。又第三のものは、知識的同情である。

之は他人の思想を了解し、之に依りて他人と同じやうなる感情なり、行動を現はすに至るものを言ふのである。そこで最も進歩したる同情に於ては、(一)他人の抱いて居る感情の外的表出を目擊し幾分か感動すること、(二)依て此の如き表出の意味を考へ、其原因を採ること、(三)斯くて他人の心中に抱て居る觀念なり、思想を了解して、之を我が心中に想ひ起すこと、(四)其の上で他人と同一の感情なり、行動を惹起することゝなるので、仲々複雜なるものである。斯樣にして、一たび眞正なる同情の念を起すに至らんか、我々は爲に進んで、他人の悲を慰め、歡びを祝ふと言ふやうな行爲となり、同情をして更に倫理的價値あらしむるに至るものである。

さて女性の愛情なり、同情の特色と言ふものは、どんなものであらうか。女子は一體に性質優さしく、且つ涕もろいものであるから、概して男子よりは、より多く愛情なり、同情に富んで居るものであると言ふてよろしい。併し多くの場合に、之等女子の感情は、狹隘であるか又は淺薄であるか、兎に角甚だ幼稚で充分に發達してゐないものもあるやうである。

第一、種々なる事物に對する愛情の多少を檢するに、(一)自然に對する女子の愛情は、どうであらうかと言ふに、尤より山に遊び流れを樂しみ、自然を友として塵界を忘れると言ふやうな、所謂美的情操は餘り發達してゐないやうであるけれども、春の日に野原に出でゝ、蝶々と戯れ、草花を摘んで樂しむと言ふやうな、優さしい情緒は、たしかに男子以上にあることゝ思ふ。(二)又小鳥を飼つたり、兎を養つたり、又は犬猫の如き家畜を愛撫する態を見るも、動物特に小動物に對する愛情の女子に於て一層濃かなるものあるを認めざるを得ないことである。野蠻人間でも、男子が生け捕つた野獸の子を飼ひ慣らし、之を撫育して遂に家畜たらしむるに至るのは、實に女子の任務であると言ふことである。(三)其外、同胞の關係に就て言ふも、親に對する場合に就て見るも、夫婦の間柄に於て見るも、概して女性は溫い感情を抱いて居るやうであるが、(四)特に女性をして愛情の權化たる如くに思惟せしむるものは、實に其子供に對する情緒である。母として其子に對する愛情ほど、私心なく、犧牲の念に富み、純乎たる利他的愛情は殆ど他に見受けられない程である。然らば何故母として子に對する愛情は、斯くも熱烈、濃厚なものとなつたのであらうか、之に就て、フキンクは、四ヶの理由を擧げて居る。第一、子供は母の部分であり分派である。實に其の肉、其の血、其の魂を分けたものである。其故子供を愛するは、即ち自己より派生せるものを愛するので、つまる所、自愛と他愛と一致結合したものである。第二に、子供に依りて其の父なる夫、特に其の約婚當時の追想を深ふするからである。何れの部分が、夫なり自己に酷似せるやを見比べることは、母たるものに堪きざる興味を起すものであり、又若し母たるものにして、自己なり夫を愛するならば、兩人に酷似せる子供に對しては、二重の愛情を發することゝなるものである。第三、子供は母たるものゝ、結婚當時より死に至る迄、常に其喜悅なり、悲哀と分離すべからざる關係を有するからであり、第四に、子供の得たる社會上の位置なり、名譽は轟て母たるものに反響するからである。之等四原因の外に、私は母は子供に依屬する精神が強い。父は左迄其の子にたよらうとは思はぬが、母は夫にたより、又其の死後子にたよらうと言ふ考へが深いので、之が意識的又は無意識的に、母をして其の子に一層深く愛着せしむ

るものである。又最も大なる原因となるものは、母は父よりも、より多く子供に接すること、又直接に之を養育し、哺乳は尤より、大小便の取扱ひに至る迄、全然其勞苦を取り、專心其成長を祈ること、一言にして云はゞ、生みの苦痛と育ての苦勞に存することゝ思ふのである。如何に女性は天性愛情に富むとするも、若し子を生み特に之を育つる經驗のない場合には、子供に對する愛情の左迄起らぬことは、屢々吾々の見受けることである。(五)斯くも女子は凡ての方面に於て、優さしい、而かも溫かな愛情を有つて居るに拘らず、高尚なる友情、卽ち「プラトーニック、ラブ」と言ふやうなものに至ては、之を實現することの少いものである。之れは女子に於て、男子程概念的抽象作用の發達してゐないことや、嫉妬心の深いことに原因するであらう。

一九〇、一九一、一九二

一九三、一九四、一九五

之を要するに、女性間の同性愛に於て、よし極端なものは少いとしても、幼稚なものは却て多いと言ふことである。併し幼稚なものだと言ふて油斷は出來ぬ、如何なる場合に、如何に發達するか豫知することは出來ないから、教育の任にあるものは、常に注心して之を未全に防ぎ、さうして其弊害からして免れるやうにしなければならぬ。私は玆に其弊害なり、矯正策に就て詳論する遑を有たぬが、一體に青年期に當り色慾忙進の場合には、之を美術なり、宗教の方

に轉せしめ、以て高尚なる純潔なる感情を養成せしめたいものと思ふ。

第二に、女子愛情の特色は、其盲目的なるにあり、隨て姑息の愛に陷り易いものである。之れつまり女子に於ては、理性の發達充分ならず、理性の尊嚴を感ずることが少いからである。

第三、女子の愛情は、具體的であり、對個人的である。甲とか、乙とか言ふ人を愛することは深いが、團體を愛すると云ふことになると、甚だ薄いものである。それ故博愛心などゝ云ふものは、深く經驗され難いものであると言ふことは、一般の承認する所である。之れもつまり抽象的概念作用の發達しない爲である。又啻に具體的對個人的であるのみならず、多少排他的の傾向もある。と言ふのは、汎く一般の人をば、一視同仁的に愛することが出來ないので、兎角一方に偏するものであるが、其の一方に偏する余り、他方に對しては、啻に冷淡と言ふに止らずして、之を嫌惡し排斥して止まないと云ふことすら敢てするものである。甲を愛する爲に乙を惡み、乙を惡むことが甲を愛することの條件のやうになり、又それが甲に對する愛情を增すと言ふや

うなことも屢々見受けられるので、どうもそこに排他的の分子が含まつて居るやうに思はれるのである。

第四、女子の愛情、特に異性に對する愛情は、從來一般に所動的で、能動的でないと言はれて居るが、之れは事實であらうか、エリスの說に據れば、女子の所動的と言ふのは、斯く見ゆると云ふばかりで、其實純然たる所動的の者でない。女子の羞恥心に富み、さうして內氣に見ゆるは、却て男子の心を引き付ける力を有つて居るものであつて、一見所動的のやうではあるが、實は男子の心を動かし、之を刺戟する力のあるものである。マルローは、之を磁氣に譬へて居る。磁氣は外觀上無力、不活動のやうに見へるけれども、其の實自分の方に鐵を引き付ける力を有つて居るのである。又ハートレーは、之を蛇に譬へて居る。蛇は身動きもしないで、獲物の來るのを待て居るが、一たび其近かづき來るや、直に之を呑み込むやうに、女子も表面無力のやうに見へて、其裏面に男を引き付ける大なる力を有つて居るものである。さすれば世人の女子に對する觀察は誤ては居るが、併し兎に角外觀上なりとも、所動的の態度を採て居るものであることは、爭はれない事實である。

第五、一般に女子の愛情は變動し易いやうである。勿論其の何人かを愛するに當ては、萬事を忘れて愛着する程に、一心になり、熱烈にもなるが、些細のことで以て俄に其の冷却を來たし、遂には見向きもしない場合に依ては之を敵視すると言ふやうに、感情の變化する婦人も度々見受けられるやうである。特に老孃の女教師で、「ヒステリー」的の人に多いやうである。要するに、概して女子の感情は其浮沈甚だしく、平均して之を持續すると云ふやうには出來ぬらしい。マリオンの擧げて居る、佛國の諺に、「女子の性質中には、不易(コンスタント)のものがない」とか、又は「風に飜る羽毛の如く、女は屢々變化す」と言ふのがあり、又獨逸の諺にも、「女の心と五月の空」と言ふのがあつたやうに覺へて居るが、何れにするもつまり、女性の愛情が變はり易くて、稍々輕佻浮薄なる性質を帶ぶることを暗示するものであると思ふ。然るにマリオンは、之が辯護を試みて、女子の心が變はり易いと云ふのは事實であるけれども、それはつまり嗜好(グロ)であり、移り氣(ブリス)である、虛飾(ヴェイン)であつて、何も愛情とか、戀愛とか言はるゝものに就てはな

いと云てゐるが、私は啻に嗜好とか、移り氣の變化し易いのみならず、夫婦間などの場合を除いては、愛情に於ても女子は變動し易いものであると信じて居る。併し一旦夫婦の契りを結ぶと云ふことになると、女子の夫に對する愛情は容易に變更しない、決して他心を起すものでない。此の點では男子の方が明かに變動し易くて、所謂「男の心と秋の空」をして事實たらしめるものである。要するに、夫婦とか、親子とか云ふ特別なる關係に於ける愛情は例外として、日常不斷に起ることで、確乎たる理性も伴はず、眞實なる判斷に基かない感情は、女子にありては常に動搖し、變化し易いものゝやうである。

第六、尙ほ他人より愛情を受くる場合に、女子の特色として二つのことが擧げられるやうである。其の一として、女子は其の受くる愛情をば、自分一人で占有せんとする傾向を有つて居るやうに見へる。それであるから他人も亦自分と同じやうに愛せられんことを希望し、さうして之を樂しむと云ふやうな寛大なる態度は余り見へないやうである。之れ蓋し其の嫉妬心に富むからであらう。

又其二として、女子は他人に對し愛情の表出又は直接なる證明を要求するものである。誰れしも他人より尊敬せられたり、又は愛撫せられることを好まぬものはないが、女子は單に其事實のみを以て滿足しないで、態度なり、言辭を以て明かに之を表示せられざれば得心しないものである。甚だしきに至ては、他人に於て眞の愛情はなくても、虛僞でもよし愛情の表出さへあれば、換言すれば單に表面上外觀上の世辭や、愛相で以て愛情のあるらしく、ちやほや持囃さるゝならば、それで滿足するものである。「男と女及び情緒」と言ふ書物の著者なる、女流文學者のウキルコックスは、次のやうなことを云つて居る。曰く「人生に於て求めらるゝ凡ての愉快と安樂を婦人に與へよ、而かも婦人は愛情の表示を背景とせざれば、之をすら幸福と感せざるべし」と。又曰く「男子は、自分の嗜好品を用意したり、其意見に一致するやうに努めたり、又は其助言を求め來るやうな、隱れたる方法で、自分を愛するやうな婦人を好むものであつて、さう云ふ風に取扱はれたら、決して婦人に愛情の存することを疑はないものである。然るに婦人は之に反して、どんなに男子が仕向けやうとも、如何に彼は自己を愛するかを言葉で以て告げ知らさなければ承知せぬものである」と。要するに女子

は愛情が直接に證明せられることを希望するものである。

第七、女子は元より同情に富んで居るけれども、同情としては最も初歩なる、生理的同情の多いものである。つまり女子は暗示され易く、模擬し易ひもので あるから、他人の感情表出を目擊しては、其理由其原因を明にする遑なくして、直に反射的に同じやうな表出をなすものである。又進んで心理的なり、知識的同情を抱くに至るも、更に一歩を進めて、積極的に他人を慰めたり、惠んだりする、慈善的行爲に出づる能はざるものである。私の觀察する所をして誤りなからしめば、女子の意志は薄弱にして、勇氣に缺くる所ある故に、善と知りつゝ躊躇してなさないことの多いものである。其故多くの場合に於ては、尤より他人に對する同情心は盛んに起るとするも、之をして積極的行爲たる迄に發展せしめ難いものである。さう云ふ譯であるから、女子の同情はどうも一時的の、淺薄なものたるに止り、充分に徹底したものたらしめ難いやうである。

第九章　情操

吾々の知能は具體的なる知覺作用から、進んで抽象的なる思考作用に至るものであるが、主として此の思考作用卽ち事物の間に關係を付ける働きに基いて惹起さるゝ感情を特に情操と名付けるのである。其故若し思考作用の發達しない場合には、情操の幼稚なるを免れないのである。今情操の性質を明かにする爲に、之を情緒と比較して見るなら、第一、情緒は何時でも具體的・現實的の事物に就て起るものであるけれども、情操は進んで抽象的・理想的の觀念に基きて起り來るものである。例令ば犬を見て恐れ、花を見て喜ぶと言ふやうな情は、現在其處に實存して居る所の事物に就て起るものであるけれども、天然の美を味つたり、眞理を探つて樂しむと云ふやうな情は、全く事物相互の間に存する關係を認める所からして起るものであり、特に眞・善・美などゝ云ふ理想的の目的を造り、之に依て惹起さるゝやうになつて居るものである。第二、斯く情操は事物の間に存する關係を認め、且つ種々なる思想の加はつて始めて起るものであ

るから、思想に滿ち觀念に溢れて居るけれども、情緒は之に比べると、斯樣なる思想なり觀念の內容に乏しいものである。例令ば犬を見て恐怖の情を惹起した場合に、吾々は犬の吠へる聲や、嚙み付く擧動からして、將に來らんとする危害を豫想するに止るけれども、山野の景色を眺めて、其の美を賞するやうな場合には、吾々は啻に山水の配合や、自然の風致を認むるのみならず、爲に或はエデンの樂園を想像し、或は古人の詩歌などを想ひ出し、さうして種々なる思想を連關せしめるので、一層の興趣を催さしむるものである。第三、更に情緒では其の特性として、種々なる身體的表出を惹起し、爲に其反響として再び情緒を激烈ならしむるものであるが、情操では斯樣なる外的表出を惹起さないで、至て靜かなものとなり、爲に心靈的の感情とも言はれるやうになつて居るものである。斯く情緒と情操とは區別せられるけれども、其の區別たるや全く比較的のもので、絕對的のものでない。又此區別は單に說明上のものに止り、其實際に於ては、兩者相混淆し、何れとも判然區別し難いこともあるものである。

所て女性は元來感情的であると云はれるものであるから、情操に於ても大に秀でゝ居るかと言ふに、斷じてさうでない。なんとなれば、女性は思考作用に於て甚だ劣つて居るものであり、靜かに事物の關係を思索する知力に乏しいものであるから、隨て情操に於ても甚だ幼稚なものである。其故女性が感情的であると言ふのは、主として情緒に就て云はれることで、決して情操に就て言はれることではない。尤も倫理的や、宗敎的情操に於ては、よし大に發達してゐると云へなくとも、仲々强固なものであり、旺盛なものであると言はれるやうである。そは兎に角情操は普通に、知識的・審美的・倫理的・宗敎的の四種類に分けてあるから、玆にも之等の情操に就て、其性質を略述し、さうして女性の有する特質に論及しやうと思ふ。

第一、知識的情操

之れは吾々が知識を求め、眞理を探らうとする知的活動に伴つて起るものである。一體吾々は自分の未だ知らないこと、又は理解することの出來ない事柄に逢遇すると、どうしても其理を究め、其譯を探らざるを得ないと云ふ、所謂知識欲を惹起するものであるから、之に依て自ら知的活動を惹起し、さうして

一種の感情を起すやうになつて居るので、之を知識的情操と稱える次第である。それであるから、斯樣なる情操をば、心の推究的態度に存するものと云つてもよいのである。斯くて此種の情操は、二種類に細別することが出來る。即ち一は知的作用を興奮して、之を惹起さしめんとするもので、一は單に知的作用に伴つて居るものである。

第一、知的作用を惹起さしめやうとするものは、眞の意味に於ける情操ではなく、寧ろ情緒と稱すべきものであるけれども、併し又知的情操の端緒となり、基礎となるものであるから、情操の一種として說くのである。扨て通例此種の感情をば驚愕の情、驚異の情及び好奇心の三種に區別して居る。第一驚愕の情と云ふは、兼て吾々の知て居るものであつても、又は知つてゐないものであつても、知ると知らざるとに關係なく、或る豫期してゐない事物の不意に出現する所からして起るものである。斯樣な場合には、豫め注意を差向けるやうな準備が出來てゐないので、爲に吾々の精神は動搖し攪亂せられ、自ら不安の狀態に陷らざるを得ないやうになるものである。之れに由て吾々は明かに不快を感じ、全く何物をも意識する能はざる、所謂「ビックリ」したと云ふやうな狀態に陷るものである。で其甚しき場合には、眼や口を開き、眉は上り、心臟の鼓動や、呼吸作用は激しくなるが、身體の運動は全然止まると云ふやうな、外的表出を惹起するものである。然るに吾々若し心を落付けて靜かに注意を向け、そは果して如何なるものであるかと穿鑿するやうになると、漸次想像なり思考なり種々なる知的作用が活動するやうになり、遂には其何物なるものなるやを明かにし得るに至るものである。さうなると一時攪亂せられ、動搖して不安の狀態にあつた所の精神は、自ら整頓せられて靜穩なる狀態に回復するやうになり、爲にヤレ〳〵と休息を感じ、自ら快感を起すに至るものである。第三不意に現出すると、せざるとを問はず、若し奇異にして平素見慣れざる、聞き慣れざる事物に遭遇するやうな場合には、所謂「ビックリ」すると云ふのでなくして、之れは不思議だ、如何にも奇妙だ、どうも合點がゆかぬ、さて怪しいものだと云ふやうな情を惹起すので、之を驚愕の情から區別して、驚異の情と稱えるのである。それで非常な場合には、爲に何か危害の及ぶやうなことはないかと恐怖の心を

惹起し、さうして明かに不快を感ずるものであるが、普通の場合では、所謂珍らしいものは見たいと云ふやうに、自ら注意の度を高め進んで其物を見究める樣に知的活動を振起せしむるものであり、爲に快情を感ずるに至るものである。

第三そこで單に不思議に思ふとか、奇妙に感ずとか云ふのでなくして、進んで其何物なるやを攻究し其眞相を觀破しやうと志すことになると、吾々は明かに知識欲を現はし立派に推究的態度を執るやうになつたものであり、やがて科學的研究の因て起る土臺となるものであるから、特に之を好奇心と稱えるのである。斯樣にして程度の差こそあれ、驚愕も驚異も好奇心も共に知的作用を催進せしめる情である。

尙ほ知的活動其物に伴つて起る感情は、之を大別して動的と靜的の二種類とすることが出來る。第一動的の知的情操と云ふは、科學的の研究卽ち知識の獲得を以て目的とする知的活動に伴つて起るものである。そこで斯樣なる場合に其研究を遂げ、目的を果した時には誰れでも愉快を覺えるが、之に反して失敗し徒勞に終らんとするやうな時には、不愉快を感ずるものである。それで若し成功が容易で勞力を費すこと少ければ、其爲に感ずる快情は純粹なもので不快を交ゆること少しと雖も、若し了解に苦しみ疑惑に陷り、研究に多大の困難を覺ゆる場合には、愉快所か非常なる苦痛を覺ゆるものである。けれども若し一たび解答の曙光を認め、研究の手掛りを見出し、進んでは其目的を達すると云ふやうな場合に至らば、其爲に起る愉快の情なり滿足の念と云ふものは實に非常なものである。斯くて段々に科學的研究の歩を進むるならば、種々なる方面に於て統一的の知識を求め、凡ての現象を統括する所の確乎たる法則を發見せずんば止まないと云ふやうになり、若し少しでも疑惑を挾むやうな點があつたり、聊にても矛盾したり衝突して居るやうな所を見出すならば、毫も安心することが出來なくなり、たゞ益々精勵して初志を貫かんとするに至るものであるから、其得る所の快感も尋常ならざるものである。其故に若し不統一なる知識を以て滿足したり、思想上の矛盾なり衝突を以て敢て意に介せないやうな人は、明かに科學的の研究心に缺乏せる人であり、隨て高尙なる知的情操を味ふ資格のないものである。更に研究心が進んで其極致に達する時には、研究其物が面

白くなつて來て、敢て其結果を問はないやうになり、實利的の目的を離れたものになるものである。さうなると研究に志して何等かの結果を得ると云ふよりも、寧ろ之に達する努力勉勵其の物が大なる愉快を與へる源泉となるものである。レッシングの有名なる句に、「既定の眞理を取るか、又は之を發見するの愉快を求むるかと、選擇せなければならぬ場合に逢遇せば、自分は後者を選ぶべし」とあるは、這般の消息を述べた者である。第二、靜的の知的情操と云ふは、實際に活動して居る知的作用ではなくして、其活動し得る知的作用又は既に蘊蓄せられたる知識に伴つて起るものである。即ち誰れでも他人に優りたる記憶力若しくは推理力を有つて居るとか、或は或る種の學科に精通して深遠なる知識を有する時は、それ丈自己の價値を感じ自尊自重の念あらしめ、さうして何となく快情の禁ずる能はざるものがあるが、若し知力も劣り知識も淺薄で、何等他人に勝れたる所なき場合には、自ら不安の念に滿ち恥辱の感起り不愉快極まるものである。尤も自ら價値を感ずる餘り、妄りに高慢とか自慢の念を起し、爲に他人に對し敢て尊大に構へ傲慢なる態度を現はしたり、又自ら無價値を感ずる餘り、卑屈卑怯の情を起し、爲に他人に對しても臆病で戰々競々たる態度を示めすやうな場合には、之を自我の情緒と稱え情緒の一種類と見做すものである。斯樣な場合に情操と情緒とを區別する境界を定めることは容易ではないが、要するに知力に勝れ知識に富む爲に、自ら安心あり確信あり餘裕綽々として物に動せぬやうであり、又其の反對に常に不足不滿不快を感ずるやうな場合は、之を情操の部類に入れてよいと思ふ。

知識的情操の說明は之れ位に止め、さて女性に於て何等か其特色を認めることが出來るであらうか。先づ知的活動を誘發する所の感情に就て吟味して見やうと思ふ。

第一、驚愕の情に就て云ふなら、之れは明かに女子の方が著しいやうである。男子として不意の出來事に接しては驚かぬではないが、女子は一體に感動性に富んで居るし、又恐怖心なり羞恥心を起し易いものであるから、自然些細なことに對しても驚愕の禁ずる能はざるものあり、且つ烈げしき表出を現はすものである。或は驚愕の情其物に於ては、男女間に差別なく其異る所は單に表出の多少

に存するものであるかのやうに思はれる場合もないではないが、併し感情の表出は直に反動的に感情を刺戟し、一層之を強烈ならしむるものであるから、つまり女子の方が男子よりも、驚愕の情は強い者であると斷言してよからうと思ふ。併し一般に女子に於て驚愕の心を起すやうな事物は、主として感覺的なり直觀的のことで、左迄意味のあることではない。つまり不意に人が現はれたとか、雷鳴を耳にしたと云ふやうな簡單な場合のことで、豫期せなかつた慧星が出現したとか、患者の容態が急變したと云ふので、天文學者や醫學者が驚愕するやうな場合とは、大に其の性質を異にして居るのである。尤も斯樣な科學的驚愕心とでも稱すべきものは、平素科學の研究に從事し、何等か專門の知識に通曉せる人に於て、初めて起り得べきものであるから、何も女子のみに起らぬと云ふのではない、男子とて無學の輩無智の徒には當然起り得べくもない。つまり知識の程度如何によることであるから、女子に於て科學的驚愕心を缺くと云つたとて、凡ての男子が之に富むと云ふことにならないのは注意する迄もないことである。

第二、驚異の情はどうであるかと言ふに、私は女子に於て其乏しいことを認めるものである。一體女子は從來の境遇教育の如何に依りて、知的探究心と云ふか又は知的本能と云ふものが、充分に發達してゐないやうであるから、概して新奇なことに接しても餘り驚かず、合點のゆかぬ道理に適はないことが起ても、餘り不思議に思はないやうである。凡て學問は驚異の心に基くとさへ云はれて居るが、女子には男子程科學者も哲學者も出てゐない所を以て見ると、尤より先天的の特質と云ふ譯ではないが、境遇上自然に女子は驚異の情に乏しいものとなつて居ることが分かる。時に驚異の心を惹起すとしても、其の範圍は狹く又進んで其解決を求め其理由を探らんとする、所謂好奇心なり又は研究心を起す迄には到らないものである。よしや或る機會に好奇心なり研究心は起るとしても、一般の女子は專心知的探究に從事する遑のないものであるから、其儘之を等閑に附し遂に何等の結果をも見るに至らずして、之を消失せしめることの多いものである。それであるから切角驚異の心は起るとしても、之を培養して立派なる知的研究と云ふ活動に迄發達せしむることの少いものである。

第三、然らば女子は全然好奇心を缺いて居るかと云ふに、場合によりては仲々强烈で男子以上に之を現はすこともあるやうである。それは知識篇で述べて置た通り、女子は一般に利口である、其の日常生活なり特に人事上の出來事に對する注意と云ふものは、仲々男子の及ぶ所でない。さうして其見聞する所に就て、根堀り葉堀り穿鑿して眞相を極め且つ批評を加へんとするものである。近所の娘が結婚した時の服裝なり化粧はどんなものであつたか、出入の車夫が夫婦喧嘩をした其原因は如何、やれ隣家に新しく來た女中は何所のものだらうなどゝ、男子なれば全然問題にならぬ、見向きもしないやうな事項に就て、非常なる好奇心を起し之を穿鑿せざれば止まぬと云ふやうな熱心を現はすものである。それ故女子とて好奇心のない譯ではないが、女子は概して家内に籠居し往々外出だにあまりしない、家事より外には關係しないと云ふやうなことであるから、自然其見聞する所隨て其興味を惹くことが、小區域に限られるやうになつたものである。尤より容貌なり衣服なり諸般の風習なり、日常の出來事に對して注意するも必要なことではあるが、今少し女子の好奇心をば科學的方面に差向け、同じ家事に關することでも、例令ば臺所の「マッチ」に就き、其の點火力强弱の理由を穿鑿するとか、食物腐敗の遲速に關し、其理化學的の原因に就て攻究すると云ふやうに教育したいものである。

第四、更に知的活動其の物に伴ふ高尚なる情操は如何にと言ふに、之れは全く教育なり知識の有無に據ることとて、男女に就て區別さるべきものではない。女子とても專心數學なり物理學なり化學なり、さては哲學等の研究に從事する場合には、自ら此の種の感情を惹起さゞるを得ないし、又男子とても若し無教育無智識の輩にして、何等科學的研究に從事しないものであるならば、如何て高尚なる知識的情操を味ひ得べき。併し女性間には從來教育も低いし、學者的生活を營んだものも少くないことであるから、自然這般の感情を味ひ得るものも少い譯である。然るに既に知識篇に於て詳述したやうに、女子には一般に知的淘冶と云ふものが少い、推理力の練磨、思想の修養と云ふものが不充分であつた爲に、矛盾律や同一律を無視する傾向あり、隨て眞僞を區別するの念、統一的知識を求むるの心は甚だ薄弱である。其爲に女子は前後矛盾したことを公

言して憚らず、虚僞の言行卽ち虚言とか、詐僞とか、瞞着を敢てして異としないものである。之を以て女子に虚言の多いと云ふことは、一般に承認せられて居ることで、マリオンも、眞の本能又は眞實を語る要求と云ふものは、女子に於て微弱であることを公言して居る位だから、ショップンハウエルや、ワイニンゲルが、頭から女子を虚言者のやうに云つて居るのも無理からぬことである。マリオンの云ふ所に據ると、中世の頃に女子は一般に虚言者と見做されたので、遺言などの證人としては採用されなかつたので、今に其の風が佛國の法律上に傳はり、女子は民法上證人としての資格なきものと見做されて居る程である。

然らば何故女子には虚言多く、虚僞の行に富めるやと云ふに、そは尤より教育の不充分なること、隨て論理的頭腦の缺げて居ること、眞實に對する興味と云ふか、又は尊敬心の少いことに基くものであるけれども、又長い間の境遇なり特質にも據ることである。ロンブローゾとフエレローの調査に據ると、之れに就て七ケの原因を擧げることが出來る。

第一、女子の柔弱なること、一體狡猾とか詐僞とか云ふやうな行爲は柔弱なもの、壓制せられたものゝ執る手段で、決して強者のする所でない。強者は何をするにも誰に憚る所もなく公明正大なる所業に出づるものである。ルッソーも此點に就て同樣の觀察を遂げて居る。曰く「僞計は女子固有の天才であり、其の力の微弱なることの補償である」と。又ショッペンハウエルも、之に類することを說て居る。曰く「女性は力を當てにしないで、詭計を賴りとするものである。其故に狡猾は本能的の能力となり、虚言は治すべからざる傾向となつて居る。獅子は爪と齒を以て、象と野猪は牙を以て、牡牛は角を以て、烏賊は黑汁を以て備付けられて居るやうに、天然は女子に自分を防禦し保護する爲に虚僞の術計を附與し、男子には體力と理性の力とを以てした」。

第二、月經のあること、之れは時と所の如何を問はず、多少の差こそあれ、等しく嫌忌の情を以て目せらるゝものである。其故に婦人は皆之を隱匿しやうと努むるものであるが、之れは毎月起ることであり、又少くとも三四日間は繼續することであるから、虚僞隱蔽の手段を講ずるや頻繁なるものである。若し到底隱蔽し能はざる時は他に病氣にでも罹つたやうに詐るものである。斯樣な

習慣があるので、婦人は自然虚僞を弄し敢て意としないやうになるものである。

第三、羞恥心強きこと、婦人の特性として内氣であり、臆病であり、何事にも恥かしがるものである。特に異性に對して戀愛の情を抱くやうな場合に、明らさまに之を打明けることは勿論、之れを外貌に表出することすら敢てしないものである。そこで自然情を詐り思を矯むる習慣を生じ虚僞の行爲を重ぬることゝなるものである。又婦人は男子に比して禮儀正しく作法を守るものであるから、自ら虚僞の言行に出づることの多いものである。例令ば他人の前で便通でも催ふすとせんか、そは如何に必然的のことなりとて、之を他人に告知したり又は他人に氣付かれることすら無禮であると思ふ所からして、なるべく之を仰へ辛棒して之を隱蔽し、萬止むを得ざる場合には何とか他事に託けて之を果さうとするものである。其外多くの場合に於て、詐て事實を隱蔽する方却て作法に適つたことのやうに思ふ所からして、遂に虚僞の習慣を養成するに至るものである。

第四、性的淘汰、女子は年頃になると何れも都合よく結婚したいと言ふので一般になるべく容貌を修飾し化粧三昧に日を送るやうになるものであるが、まして若し生來色が黑いとか髮が少いとか、何かの點で容貌の醜い所があつたり、缺點と思はれる點があつた場合には、其爲に緣が遠くなり婚期が後れはすまいかと案じる所からして、特更注意して之を隱蔭し出來得る限り修飾して、少しでもより美しく見へるやうに努め、以て男子の心を迎へやうとするものである。さなくば性的競爭に脆くも敗を取り空しく家居せねばならぬ運命に陷るのである。其故化粧や裝飾は女子の運命を決定する大切なる鍵鑰となるものであるから、自然虚僞の行ひを敢てして當然と思ふやうになつたのである。

第五、男子の心を惹くこと、男子をして特更女子は力弱いものである、可憐なものであると思はしむるやう、なるべく溫順に柔和に且つ優美にして、しとやかな風に裝ひ以て男子の心を惹き付け、さうして其の愛情と保護を求めんとするものである。

第六、暗示性、女子は暗示され易い性質のものであるから、他人の云ふことを直に眞と信じ易い傾向を有つて居るものである。其故確乎たる定見なく爲に

眞も僞も混淆して區別する所なく、而して毫も意に留めないものである。

第七、母の職分、女子は子を育つる場合に、方便として巧に虚言を用ゆる必要がある。例令ば子供の知つてならぬことや、知り難いことは何とか詐り置く必要あり。其故母たるものゝ職務上自然に虚僞を弄することゝなるのである。

以上七ヶの理由の中で、第一や第四の如きは其の主要なるものであらうと思ふが、尙ほ此外に、エリスは、慈悲の心、思ひやりの情を附加して居る。卽ち女子は他人に對して情け深い所からして、若し明らさまに事實を有りの儘に告げたならば、さぞ驚くであらう失望するかも知れぬと掛念の餘り、事實を曲げ特更虚言を用ゆるものである。私も斯樣な實例をいくらも承知して居るので、尤より其人の性質にも依るが、一般に特に感情に訴へた女子の言行に對しては、餘り信用を置かぬことにして居る。

斯樣にして女子は概して眞實を尊ぶと云ふ念慮に乏しいものであるから、眞理を追求する精神も薄弱であり、隨て一般に深遠なる知識を貯へたり、又は鋭利なる知能を具ふるに至らないものである。爲に女子は知識なり知能を以て、自己の價値を感じさうして自任自重するなどゝ云ふことの少いものである。彼等の多くは容貌や衣裳で以て人に誇り名譽と心得て居るに止まるものであるからして、到底高尙なる靜的の知識的情操をも樂しむことの出來ないものである。

第二、審美的情操

之れは天然の景色にしても、又は人工的なる繪畫彫刻なり、或は詩歌音樂にしても、所謂美なるものに就て感ずる一種の快情を指して云ふのであるが、どうして左樣な特殊の感情を惹起すやうになつたかと云ふに、それは全く生活の餘裕に起因するものである。一體野蠻時代では生存競爭に忙はしく、衣食住の生活問題に迫はれて居るので、美を樂しむなどゝ云ふ遑のないものであるが、文明の進歩するやうになると、自然に生活に餘裕を生じ日々の業務にも閑が出來、資產も幾分か貯蓄せられ隨て左迄生活の爲に苦しめられないやうになるので、今迄生存競爭とか自己保存の爲のみに働いてゐた精神活動に幾分か餘裕を生ずることゝなり、爲に實際の生活問題と關係の深い美的感情を惹起すやうになつたものである。其故吾々の有つて居る審美心はつまり精神上の遊戲である

と言はれる次第である。それで今美的感情の特性を擧げて見るなら、(一)此種の情操では、事物の眞僞を究めたり、又は其實用如何を問ふものでなく、單に美の爲に美を感ずるに止り他に何等目的とする所なく、而して其美を感ずるや、全く其美に打たれて了つて、嗚呼美はしいと其方に心を奪はれ我を忘れるやうな狀態に陷るものであるから、之を知識的情操の推究的態度に對して、恍惚的態度にあるものと言ふのである、(二)さう云ふ譯であるからして、審美的情操にありては、之に依りて何か利益する所あらんとか、又は其樂を獨占して私利をたくなむものでなく、隨て衆人と其樂しみを共にし其愉快を同じうせんとするものであるから、大に社交的のものとなつて居る、(三)又吾々の美を感ずるは知識的情操の場合のやうに、大に努力し奮發して勉めねばならぬと云ふ必要はなく、單に其事物に接し美の題現にさへ觸れなば、全く受動的に惹起し得るものであるから、之れは種々なる快感中にて特に純粹なるものである。尤も種々なる美術品に對する美的趣味と云ふか、美的鑑賞と云ふものは自然の儘では發達するものではない、どうしても其意味なり各部の關係を會得する知識を養成せねばならぬ。而して其爲には美術品に就て、分析なり比較なり種々なる知的作用を働かさねばならぬし、又豐富なる想像作用を以て之れに向はねばならぬし、更に又美的原理に通じたる批評眼を以て之れに接しなければならなぬ。其故本當に美術を味ふとするには、どうしても美の鑑賞力又は判斷力を養はねばならぬ。所が之れは敎育なり修養を待て出來ることで、自然の儘に放任して置て發達するものではない。併し一たび這般の美的判斷力を養ひ得たらんには、美術を味ふ樂しみも一層の深きを加ふることである。

更に吾々は如何なる事物に就て美を感ずるのであるか、換言すれば美の要素となるものは何であるかと尋ぬるに、吾々は(一)實質的、(二)形式的、(三)觀念的の三要素を擧げることが出來る。其の實質的要素と云ふは、美の實質となるもので卽ち眼と耳に依る感覺である。吾々は天然の景色を眺むるも、又は美術なり音樂に對するも、若し之に依て生ずる色彩や形狀や音響などの感覺を意識しないならば、毫も美を感ずることの出來ないものであるから、之等の感覺を美の一要素と認めるのである。併し更に必要なるは美の形式的要素である。卽ち美

要素をなす感覺相互の關係や配合の如何を云ふので、建築や彫刻に於ける均齊又は音樂詩歌に於ける律動などは其主要なるものである。然るに之等の要素よりも一層有力なるものは、卽ち觀念的要素である。之れは美術品に依て現はさるゝ暗示や、其爲に惹起さるゝ種々なる觀念の聯合や、又は想像の活動に依りて、實質的や形式的要素以上に美感を生ぜしむるものである。

斯くて吾々は、吾々自身の容貌なり身體に就て美を求め、又は種々なる實用品に就て裝飾を試むることゝなり、進んでは純然たる美術品の製作に從事し、以て美を現はし之を樂しむやうになるものであるが、吾々は普通に云ふ優美又は快美の外に、更に崇高美と滑稽美を感ずるやうになるものである。崇高美と云ふは、物質的にもせよ、精神的にもせよ、偉大なる力の顯現に對して、何だか壓迫せらるゝやうな不快の感と共に、之に向つて昂上せんとし嚴肅なる態度を以て仰ぎ見ると云ふやうな一種の快感を混じたものである。又滑稽美と云ふは、事物の矛盾又は不相應なことに對して起る、所謂可笑の情と共に時としては幾分か輕蔑の情をすら混じた所のものである。

所で吾々は女性の審美心に就て、何等かの特色を見出し得るや否やと云ふに、之れも性の問題でなく、教育なり知識の如何に關することであると思ふけれども、二三の心付た點を擧げるならば、

第一、女性の審美心は低級である。女子の心中には恐らく男子よりも餘計に美の觀念を以て、滿たされて居るであらう。彼等の多くは美を以て、權勢よりも富貴よりも、否凡てのものよりも、尊ぶべきものと思つて居るらしい。併し其の有する美の觀念たるや、單に自己の容貌や衣服や裝飾品に止り、而かも如何にして其美を誇らんか、如何にして他人より稱讃せられんかと、之れを實利實益の方面よりのみ見て苦心するものなれば、其有する審美心は甚だ野卑なるものである。尤より婦人の美しいのは喜ぶべきことであり、衣服なり態度の優美なるは、如何にも女性にふさわしいことであらうけれども、其審美心が些々たる容貌や衣服以上に及ばぬと云ふは嘆はしいことである。

第二、女性の審美心は幼稚である。よし美的趣味を有すとするも、そは到底男子に及ぶべくもない。彼等とて山河の風色に接しては其美を賞し、繪畫なり

彫刻なり特に音樂に對しては、時として男子以上に趣味を抱いて居るやうに見受けるけれども、悲しい哉男子よりも慨して教育の程度は低く、多方面に亘つた知識の素養と云ふものが少いので、其美觀と云ふものが實質的や形的のものに止り、未だ觀念的の所に達してゐない。其故其美感たるや甚だ淺薄であり幼稚なものである。併し之れは女子として無理からぬことである。何故となれば女子には元來藝術上の充分なる教育はないし、且つ日々主婦として家事に逐はれて居るので、ゆる〳〵美などを樂しむ餘裕がないからである。男子とても日々生活の爲に齷齪として奔走し、美などを省る遑のない場合には、殺風景なものて決して美的趣味など養ひ得るものでないから、況んや家内にのみ蟄居して居る女子に於てをやだ。兎に角女子には充分に審美心が發達してゐないから、多少の美感を抱くとするも常に實利の念を伴ひ、爲に純然たる美的情操を味ふことの出來ないものである。

第三、女子の審美心は崇高美を缺ぐ。女子の抱く美感は主として優美又は快美と稱する部類のもので、特に俗語を以て云はゞ、奇麗とか、愛らしいとか、優さしいと云ふやうな、規模の小さくて靜かな美を好むやうである。さらばとて淡泊て而かも意味深いと云ふやうなものを好まないで、艶美と云ふか、嬌艶と云ふか、俗語て云ふなら、こつてりしたものを喜ぶやうてある。それであるから崇高美など、云ふものは餘り感じないものてある。彼等は崇高とか壯大とかを感ずるには餘りに纖弱てある。彼等は之れを感ずる前に既に恐怖の念に滿たされ、若しくば悲哀の情に驅られて、之れを樂しむ所か互に避け逃れんとするものてある。然らば滑稽美に就てはどうてあるかと云ふに、婦人特に妙齡の女子は、箸の倒れたにも、豆のころんだにも直に可笑味を感じ能く笑ふものてあるから、男子よりも一層多く之を經驗するやうてあるけれども、吾々複雜なる人生の出來事に於て隱れたる所の矛盾を認め、さうして凡ての關係や係累から離れて、私かに高尚なる意味の滑稽を感ずると云ふやうなことは出來ないやうに見へる。

第四、更に人類の開化史上に於て、工藝なり美術に對して女子の貢献した所を瞥見するに、尤より其功績の見るべきものがない譯てはないが、女子に特有

なる境遇の爲に充分に其技能を發達せしむることの出來なかつたのは、實に遺憾の極みである。

抑も原始時代に於ける工藝は、殆んど凡て女子の手にあつたものである。蓋し當時に在りて、男子の職分は全然戰爭と狩獵とに存し、爲に工藝などに從事する遑のなかつたものであるから、自然女子の手に歸した次第である。試にマソンの著はした、「原始的開化に於ける女子の職分」と題する書物を披いて見ると、女子は工藝の開祖であり、美術の創造者となつたものであることが分かる。多くの工藝品中でも特に陶器の製造は、世界の何れの部分に於ても、最初女子の手になつたものである。さうして種々と裝飾的の紋樣を描き以て美術の起原を開いた。マソンは次のやうに言て居る。曰く「織物に於て見らるゝ裝飾の全體と云ふものは、女子の腦髓から考へ出されたと云ふことは確かなことである。そこで美術品と認めらるゝ織物に就て、三樣の仕事を包含して居る。(一)纖維性の材料を準備し、且つ染色を施し又色合を選擇すること、(二)糸、紐、撚糸、打紐等を造り以て織物に用ゐらるゝ幾多の準備せられたる材料の目錄を用意すること、(三)草蓑、造藍、造筵、綱細工、「レース」を造ること、機織、裁縫並に縫箔に關する技術」。又マ氏は塑造的技術に於ける裝飾と婦人に依て始められたことを說き、其原始的なる陶器製作に於て、如何に美術的技巧が加へられたかを次のやうに云て居る。即ち「最も著しき技術は、(一)果物や動物などの自然形を模造すること、(二)織物に於ける美術的意匠を陶器に刻み付けるか、又は繪具を以て描くかの二つてある」と。尙ほ原始時代の婦人も種々なる衣裳を以て身を飾り、白き粘土を水に溶かして之を顏に塗り、椰子の外殼に水を盛りて天然の鏡となし、之を以て化粧の用具に供し、或は花圈を造りて頭髮を飾り、其香りを以て身邊を滿たすやうな工風も試みたものである。其外今日の野蠻人間にも種々奇態なる裝飾法も行はれて居るが、黥の風習は其著しいものである。之れ亦女子に依りて實行さるゝもので、ノゴア人やアイヌ人の婦人間に、今尙ほ其風習の墨守されて居ることは、誰れしも熟知して居ることてある。又女性は曾て樂器を造つたことはないさうてあるけれども、夙に樂器を弄し唱歌に長したことは、野蠻人間にも屢々見受けらるゝことてある。其故女性も元來審美心に富み、工藝

美術に於て多少貢獻する所のあつたことは、疑ふべからざる事實であるけれども、何時迄も專心斯道に從事することの出來なかつた爲に、遂に男子に壓倒せられ、建築なり彫刻は勿論のこと、繪畫音樂の如きものに於ても、獨り男子をして其名をなさしむるに至つたのである。遂にショッペルハウエルをして、女子は非美術的の者であると迄絶叫せしむるに至つたが之は尤より曲論である。女子として適當なる境遇と敎育を與へさへしたならば、大に其審美心を發達せしめ得ることであると、私は確信するものである。尤もフェレローは、女子に於て純粹なる審美心を缺ぐ所以、又女子の美術に貢獻せる所少き理由をば、其性的慾情の少きことに基くと明言して居る。蓋し女性の情慾に關する部分は比較的に廣大であるから、其の發現も余り猛烈でないが、男子は之に反して其情慾的本能旺盛なる爲に、其の勢力は四方に溢れて活動の源泉となり、自ら文學なり美術に卓越なる位置を占むることとなつたものとも考へられることが出來る次第である。又エリスは、男子は女子よりも一層變化性に富める故、多くの天才的美術家を出したのであるとも云つて居る。

之を要するに、假りに女子は天性男子よりも審美心に於て劣る所ありとするも、不充分なる敎育、不適當なる境遇の爲に其の發達を妨害せられたことも亦明かなる事實であるから、吾々は敎育と境遇の革新に依りて、女子固有の審美心を充分に發達せしめ、以て一層女性の優美性を發揮せしめ、而していよいよ美の權化たらしめ眞髓たらしめ、さうして人類社會を美化するの本分を完ふせしめたいものである。

第三、倫理的情操

之れは吾々の行爲に關する普惡正邪の判斷から起るものである。然らば如何にして善惡・正邪の心卽ち道德心なるものは起つたのであるかと云ふに、之れは全く人類生活の狀態と云ふか境遇と云ふか、其特別なる事情から起つたものである。蓋し人類の生活詳はしく云はゞ其社會的生活を營むに當てや、互に勝手氣儘なことを敢行し得るものでなく、或る行爲はなすべく又或る行爲は避くべきものがあるので、そこで自ら其中に一定の規律を生じ、朧げながら互に守るべき義務を認むことゝなるので、玆に道德心の端緒は存在するのである。然る

に其の規律たるや最初は全く本能的・自發的・無意識的・無思慮的であつて、單に自然と風俗裡に現はれ、習慣として存在するに止るものであるが、後に至るとそれが意識的・思慮的で且つ複雜なものとなり、さうして或は制度なり成文律なり、又は宗教的法典として現はれ、進んでは哲學者の抽象的思索の問題ともなるに至るものである。そこで吾々の道德心と云ふものは自然に二要素から成立して居る。(一)は本能的の要素であり、主として感情であるが、一は思慮的のもので、知的判斷に基くものである。其本能的要素に富める人は、餓饑の食を求めしむる如く必然的に義務の實行に努むるものであるが、思慮的要素に富める人は知的判斷を待て實行するものなれば、修養なり努力を要するものである。斯くて吾々個人の道德心發達の順序を見るに、最初は本能的道德であるが、次には一定の規律法則又は外部の命令・權威に依て餘儀なくせらるゝ他律的道德となり、最後には自己の判斷に基き、理性の指示する所に依て行動する所の自律的道德となるやうになるものである。

更に倫理的情操の特性を考ふるに、(一)其の因て起る所は、知識的情操や審美的情操の場合と異り、專ら吾々自身又は他人の意識的・有意的なる行爲にあるので、若し一たび自他の行爲に就て善惡の批判を下すやうになると、必ずや善をなし惡を避けねばならぬやうに、實行に影響し之を左右するやうになるものであるから、之を心の實踐的態度に在るものと云ふのである。(一)斯樣に實踐的のものであるが、其の善惡を區別した場合に、善と認めた所はなさねばならず、惡と知た所はしてはならぬと云ふやうに何だが權威ある司配者の命令であるかのやうに感ぜられ、要求であるかのやうに思はれるからして、特に規整的の感情であると言てもよい。(二)更に其特色と認むべき點は其著しく社會的なることである。尤より吾々の知識を求めたり美感を味ふ場合にも、既に吾々は社會の一員たり互に共同的生活を營んで居るものであることを示めして居るけれども、之等の場合では未だ眞に吾々個人は社會と離るべからざる關係を有つて居るものであると云ふ、所謂社會的意識の存在を認めないけれども、倫理的情操になると之れが明了に現はれて居る。蓋し吾々の行爲に關する善惡の觀念は何れも他人に對して起たものであり、且つ其善惡の判斷なるものは元來他人が吾々の

行爲に對する讃否の批評に基て起たものであるから、道德心なるものは到底社會を離れては起り得べからざるものである。隨て倫理的情操は特に社會的のものであると云はれて居る。

尙ほ倫理的情操は如何なる種類に分けることが出來るかと云ふに、普通に行爲の實行せらるゝ前後に依りて之を區別して居る。卽ち(一)行爲の實行前に在りては、今爲さんとする行爲に就て其の善惡を判斷し、さうして若し善なれば之をなさねばならず、惡なれば之れを止めねばならぬと云ふ、所謂義務心として現はるゝものである。そこで人に依りて此の義務心に强弱の差を呈じ、或は死を以て義務を遂行せんとするものあり、或は何かの慾情に制せられたり、又は精神動搖して確立しない爲に無責任の態度を取り、爲に義務の遂行を意としないものもある。(二)又行爲の實行後に至りて、若し義務心の指示する通りに實行せし場合には自ら心中に善いことをしたと云ふ賞讃の念を生じ、隨て滿足を覺へ一種云ふべからざる快感を催ふすものである。然るに之に反して若し義務心の命令に背いた行爲を敢てした場合には、自ら心中に譴責を受け爲に不安の念ひをなし、遂には惡いことをした濟まぬことをしたと云ふ後悔の情を惹起し、さうして非常なる不快の感を抱くやうになるものである。

倫理的情操の說明は此の位に止め、進んで女性の特質を擧げやうと思ふ。

第一、女性の義務心は概して薄弱であるかのやうに思はれる。詳言すれば女子の自ら省みて眞に其義務と信ずるものは、僅に節操を完ふする位のことに止りはすまいか、又よし他に多く義務と感ずる所ありとするも、或は死を以て爭ふと云ふか、さなくとも、少くとも自分の面目を全ふすると云ふ意氣込て、其の義務と信ずる所を尊重し何所迄も之を遂行せんとする熱心があるかどうかと云ふに、それは甚だ缺乏して居るやうである。然らば何故女子の義務心は斯くも薄弱なものであるかと云ふに、(一)女子は一體感情的のものであるから、事物に對する好惡愛憎の情を以て善惡正邪の念と混同し、正しいからでなく好きだから實行し、惡いからでなく嫌いだから實行しないと云ふやうになるので、自然義務心は薄弱なものとなるのである。(二)又其感情的なる所からして、其思想は常に動搖して一定しない、確定する所がない。そこで矛盾もあり統一を缺い

て居るけれども、平氣なもので敢て意に介する所もないから、自然義務心を輕視するやうになるのである。又(三)兼て知力に乏しい所からして、善惡の判斷に暗く是非の判別を明かにする能はざるものであり、而かも又之れを以て餘り苦痛とも恥辱とも思はないものであるから、隨て其義務を感ずることも薄弱にならざるを得ないことと思ふ。(四)一體義務は自分自ら責任を感ずるものに存することであるが、婦人は從來依屬的の生活に慣れ自ら進んで責任の位置に立つが如きことは甚だ少いものであるから、自然多くの場合に無責任となり他人任せとなり、爲に義務を感ずること薄弱となるのである。(六)女子の道德心特に同情心や慈悲の心に至ては、實に美はしいもので、男子に於ては到底及ぶべくもないが、併しその多くは本能的衝動的の發現であり、隨て自己の判斷に基き自己の努力に依て實行せらるゝものでないから、どうしても義務などゝ云ふ意識は伴はない譯である。又よしや婦人の道德心は意識的思慮的に起るとするも、尙ほ其大部分は外部の權力や命令に依て、壓制的に餘儀なくせられて起るので、未だ他律的の道德たるを免れないものである。其故自己の理性より割り出し、自分で自分を律し外部の狀態如何に拘らず、自ら進んで自己の行爲を左右せんとする、所謂自律的道德心を有つて居るものゝやうに、義務心の强固でないのも亦怪むに足らぬことである。

(第二)、道德律の發達に於ける男女兩性の關係。道德心は前にも述べた通り、吾々の社會的生活を營むに當り、其妨害となるやうな所業を抑へ之を規整する所からして起るものであるか、原始的社會に於て斯樣な所業と云へば、主として腕力なり暴力に依りてなさるゝとて、之れを離れては何も道德と稱すべきものはなかつたのである。例令ば汝殺す勿れ、盜む勿れ、姦淫する勿れなどゝ云ふ古い誡律は、凡て他人の幸福を傷け社會の安寧を害する所の暴力を抑制したものであるが、斯樣な道德律の起るに當り、比較的に一層動的なる男性と、一層靜的なる女性とは自ら異りたる關係を有つてゐたと云ふことは容易く想像せられ得ることである。

元來營養と生殖とは原始的人類の生存に關する二大要件であるが、其中でも營養卽ち食物の收得と云ふことは、人類の生存競爭に於て最も重要なる事件で

あつた。爲に道德も最初は生殖に關することよりも、食物に關することが大部分を占めて居たやうである。そは兎に角男性は之等二樣の活動に於て女性よりも一層旺盛であつた爲に、原始的の道德に對しては、男性の活動が一層深き關係を有つてゐたものである。そこて充分なる食物の供給を得、さうして自己及び其一種族の保存なり安全を確實にしやうが爲には、勢ひ領土の擴張を圖らねばならぬこととなり、隨て他種族と戰爭しなければならないので、當時戰爭に勇敢であると云ふことは最も名譽なことであり最も稱讃を博したことであり、爲に獨り男性をして其名を成さしめたものである。依て幼い男兒を敎育するにも、斯樣な動的道德の養成に努め、戰爭なり狩獵は大に奬勵せられたものである。南亞弗利加のツールー人の間では、若し母親が之れを折檻するやうなことでもあれば、若い者は彼等の母親を打殺しても差支ないと云ふ法規もあると云ふ程である。それで多くの野蠻人間で男兒が一人前の若者と見做されたり、又は結婚を承認されるやうな場合には、幾許かの動物を狩したとか、戰利品を有つて居るとか、又は人頭を貯へて居ると云ふやうなことが、其の資格を認定する條件となつて居る。之を要するに原始時代に於て稱讃せられる行爲は、亂暴な併し其種族に取て有利なる行動であつた。隨て戰爭の名譽程他に名譽となるものはなく、又戰爭の光榮程他に光榮とすべきものはなかつたのであり、軍事上の才能程他に尊重せられたものはなかつたのである。其故男子は此の如き名譽なり稱讃の代表者であり、隨て當時の道德は主として男子に關係したものであつた。

所で斯く稱讃せられる行爲と云ふものは、如何にして表彰せられたかと云ふに、或は賞牌を受けるとか、或は昇進するとか云ふやうな一般的の性質を及びたものであるが、之に反して他人の妨害となり、其感情を損ふが如き行爲は禁止せられ、若し其禁を犯す場合に之に對する罰則は種々と規程せられてゐたものである。卽ち原始的生活に於ても、不德の行爲を禁制する爲には比較的細かに規定する所のあつたものである。例令ば亞弗利加のカフイア人種の間では、盜賊には賠償と罰金、家畜の傷害者には死又は罰金、放火は罰金、僞證は重き罰金、他人を傷けたものには罰金、姦淫、强姦は罰金又は死、毒殺・謀反・脫走に

は死及び沒收、虐殺には死又は罰金を課するやうに規定してあるとのことである。つまり男子の勇敢にして攻擊的なる行爲は、若し種族の利益の爲になさるる時は、如何にも尊重せらるべきものとなるが、之に反して種族の幸福に反する所業となる場合には、特に有害なるものとなるので酷しく之れを禁制して置く必要があるのである。さう云ふ譯であるからして、民法とか刑法とか契約と云ふものは、凡て男子の活動に關係して起つたものであり、要するに男子は英雄ともなり犯罪者ともなつた次第である。

更に生殖の方面に就て考察するに、之れは主として女子の任務であるから、此方面の道德は女性の特質に基いて發達すべき筈のものであるやうに思はれるが、事實は之に反しやはり男子の特質に基て起り、其立場から規定せられて居る。一體母權時代でこそ女子は權力を有ち、自己の身體に就て自由を有つてゐたけれども、一たび父權時代に移り凡て男子の司配を受けることになるに至りては、女子の身體は男子の所有物となり、財產として取扱はるゝやうになつたので、全く自由の權利を失ひ男子の意の儘に服從するやうになつて了つた。そこで女子は幼時より否生前より約婚して、早くから男子の意志に服從し其自由を束縛せらるゝ風習も屢々野蠻人間に見受けらるゝことであり、其離婚後と雖も依然として其自由を束縛する所もあり、或は亞弗利加や印度にある風習で誰でも熟知して居るやうに、夫の死後妻たるものは之れに殉死せなければならぬやうになつて居ることもある位である。斯くして女子特有の貞操の德は發達したものであるが、つまり男子の意志換言すれば其暴力に依て出來たものである。併し女子は自ら之を受納し忠實なる服從者となつた。蓋し男子の立場から出來た道德ではあるが、之を守れば自然に種族の幸福を來たし隨て當に男子のみならず、又女子の爲にも利益となつたからである。尤も女子の存在したことが男子の行爲にも影響し、さうして其の道德に多少の變更を來たしたこともないではないが、女子の特性として女子自身に獨立した道德律を作るには至らなかつたものである。

之を要するに、道德の發達上にも亦男女の性的差異は明かに現はれて居ることを認めることが出來る。卽ち男子にありては、著しく契約の性質を有し各自

の行動をば社會的幸福の爲に適合せしめるやうになつて居るが、女子にありては契約と云ふよりも寧ろ束縛で、自己の身體を男子の意志に適合せしめるやうになつてゐるものである。

第三、男女の道德心、更に長い間に養はれて來つた所の道德心に就て、男女間に性的特色はないかと云ふに、茲にも著しい差異を見受けられることである。

第一、仁愛の德に就て見るに、之れは明かに女子に於て一層多く發達して居るやうである。親切とか慈悲とか云ふものは婦德の主要なるものとなつて居る程である。第二、眞實を尊ぶ心は男子の方大に優れて居る。女子には虛僞多く、虛言を弄すること常習性のやうになつて居ることは、既に述べた通りである。

第三、勇氣は云ふ迄もなく男性的の德であつて、女子には著しく缺損して居る所のものである。併し女子は從來抑壓的生活に慣れた結果として、忍耐心には强く困難辛苦に耐へる消極的の勇氣には大に富んで居るやうである。隨て從順とか服從とか云ふ德想は、女子の方遙に强いやうである。ミルが道德心は女子に於て優ると論じて居るのは、つまり此點から云つたものである。ミル思へらく、束縛とか壓制と云ふものは、元より女子の品性を傷けたること夥しと雖も、此の如き暴力を敢行せし男子をして不道德に陷らしめたるの甚だしきものあるに比べたなら、寧ろ嘉みすべきものがある。蓋し暴力を弄するものより、暴力を加へらるゝものに於て、道德は健全なるものがあるからであると。第四、女子の貞操心に富めることは今更多言を要しない。第五、正義の觀念は女子に於て著しく貧弱である。ショッペンハウエルは、女子に正義觀念の缺損せるは、其性格に於ける根本的瑕瑾であると迄極論して居るが、如何に公平に觀察するも、正義の觀念は女子に於て充分發達してゐないやうである。つまり之れは道德の發達上男子の德として起つたもので、女子は之れを發展せしめるやうな境遇に置かれなかつたからである。

第四、最後に行爲決行後に於ける、良心の稱讃及び譴責に就て、男女間に何等かの差異があるであらうかと云ふに、私は之れに就て明確なる判斷を有たないことを遺憾とするものである。併し男子は良心の稱讃を感ずること强く、女子は譴責を感ずること大なるものではないかと考へて居る。若し、此の觀察に

4 終

して誤りなしとせば、何故斯樣な差別を呈するに至つたかを說明しなければならぬ。一體女子の道德は前にも述べた通り、一面には本能的衝動的の性質を帶び、奮鬪努力の結果として起るものでなく、又一面には他律的で他の束縛壓制に依て生じたものであるから、其の實行する所如何に尊重すべきことであつても、自分自身には左迄快感なり滿足を覺へない、隨て良心の稱讃を感ずることも少いのである。之に反して男子の道德は多くは克己の結果であり、努力と云ふものが伴はつて居るので、之れを實行した後に於て大に滿足を覺へる次第である。又女子は一體に臆病で恐怖心に富んで居るから、何か道に背いたことでも實行すると、其後で大に不安に思ひ、良心の苛責を感ずること甚だしいものであるが、之に反して男子は大膽で犯罪などを左迄意に介しないやうな所もあるので、後悔するとか良心の苛責に堪へられないなど、云ふことは比較的に少いかのやうに思はれる。

第四、宗教的情操

之れは通例神佛と稱ふる人間以上の存在者、萬物を主宰し宇宙を統御して居る所の不可思議なる勢力の觀念に基て起る情であるが、其起原に就ては宗教學上種々の意見も出て居るが、先づ人間以上の勢力又は實在に對する恐怖や依賴の念に據て起つたものであると云てよろしい。然るに人智の進歩につれて、人々の崇拜する神佛の觀念なり、又之れに對する感情も漸次變遷し以て所謂宗教の進化を來たして居るから、等しく宗教的感情と云ふも文化の度に依て大なる差異の存することを忘れてはならぬ。今茲に雜とそが變遷の次第を述べるなら、大略之れを三期に別れることが出來る。卽ち第一期に於ける宗教は、所謂拜物教とか生靈教とか言はれるもので、そが崇拜の對象となるものは、耳目に依りて知覺せらるゝ天然物其物か、若しくは之れを生物視したるものに止り、さうして之れに對する感情は、主として恐怖や依賴の念である。而して第二期の宗教となると、普通に多神教と言はれるものである。それは第一期に於ける種々雜多なる神々に就て幾分か概括をなし、數限りなき神の中から山の神・水の神・火の神などゝ云ふやうな特別な神、又は或る村落とか部落とか又は種族に固有なる特別なる神となし、さうして之れを崇拜するやうになつて居るものである。

斯くて之れに對する感情も、單に恐怖するとか依賴するとか云ふのでなくして、之れを畏敬し之れに信賴すると云ふやうになり、又單に自らばかりのことを祈願する利己的のものでなくして、同時に他人の安寧幸福を祈り、共同生活の利益を求むるやうに、大に社會的のものとなり、爲に宗教心も著しく倫理的のものとなつて居る。又第三期に於ける宗教は所謂一神教とか又は凡神教と云はれるもので、第二期に於ける多神教や民族教の神々を更に概括して一層統一的のものとなし、世界共通の神否宇宙の大實在者として之れを崇拜するやうになるものである。而して玆に至ると、單に恐怖心や依賴心に依れる迷信から造つた神でなく、深遠なる哲學思想や、高尚なる倫理的要求に基いたものとなり、隨て著しく合理的のものとなつて居る。斯くて之に對する一層高尚なものとなり、畏敬とか信賴の念は勿論其外に親愛の情も加はり、欽仰の念なり憧憬の情も生じ、所謂向上的信念と云ふか又は敬虔の情となるものである。

さて宗教心に就ても、男女間に何等かの性的差異を見受けらるゝやと云ふに、之を實際に徵するも亦宗教學者の研究に據て見るも、容易に其差異を認めることが出來る。

第一、宗教心は女性に旺盛である。今之を原始時代の野蠻人に就て見るも、死人を取扱つたり葬式に關することや、又神靈に祈願するやうなことは、主として女子の司る所であつた。彼の「ウイッチ」と稱するものも多くは女子であつた。古いことは分からぬが、十五世紀から十七世紀に亘る約三百年間に歐羅巴で、基督教徒から異端として迫害せられ、さうして死刑に處せられた所の「ウイッチ」の數は實に莫大なものである。ゲージの「婦人、教會及び國家」と題する書物中に記して居る所を見ると、驚く勿れ九百萬人に達して居るが、其大部分は女子であつたと云ふことであるのを見ても、如何に多くの女子が迷信に捕はれて居たかと云ふことが分かる。マソンも其著「原始的開化に於ける婦人の職分」中に、婦人を以て原始社會に於ける宗教の恩人となし、之に就て次のやうに言つて居る。曰く「男女何れが、より多く神靈に浴し靈氣を感じてゐたかどうか、それを今日計算するの途はないが、婦人は常に確乎たる信念を有し、より多く忠實に儀式を守つてゐたと云ふことは明かなことである」と。然らば女子が宗教心に富んて

居ると云ふことは、單に野蠻人間原始社會にのみ限ることとてあるかと云ふに、仲々さうてない。現在の歐米文明國に於ても、亦同じやうな事實の存することを認めることが出來る。マッカーピーの著はした、「婦人と宗教」と云ふ書物を讀んで見るに、其中に數字を以て之を證明して居る。卽ち今から十年程前の統計ではあるが、英國で倫敦の人口四百五十萬人中、教會に出席するものは約一百萬人で、其中男は約三十七萬二千人で、女は約六十萬七千人であるから、殆ど倍數に垂んとして居る。又佛國の巴里では、千八百九十年の統計に據ると、二百萬の人口中復活祭に出席せしもの約十萬人あつたが、其中で女は男の約四倍あつた。又米國では千八百九十年の調査に依ると、米國諸教會の會員中女は全體の三分の二から四分の三に及んで居る。尙ほホール先生は、其著「青年期」中に、「政治の男子に於ける如く、宗教は女子の生活に於て常に顯著なる位地を占むべし」と云つて居られるが、要するに婦人の宗教心に厚いことは、時處の如何を問はず、等しく見受けらるゝことである。

然らば何故に女子は宗教心に富んで居るかと云ふに、(一)女子の感情的なることは其大なる原因となつて居るやうに思はれる。なぜかと云ふに、宗教上の「ドグマ」こそ知力の產物であるけれども、實際の信念中には感情の分子多く、特に幼稚なる宗教は恐怖心に基くと云ふ程であるから、感情的なる女子に於て宗教心の旺盛なるは當然なることである。(二)又女子は想像心に富む故に、吾々の實際に見たり觸れたりすることの出來ない、神佛の實在をば容易に信仰し得るのである。(三)女子は概して思考力推理力に缺けて居るから、研究心や懷疑心は男子程に強くない、加ふるに被暗示性に富んで居るものであるから、一寸した動機からして直に信仰心を惹起し、理屈などは措て問はず深く推究する所なくして、容易に神佛を信仰するやうになり、さうして一向疑惑の念も起らないものである。(四)女子には獨立心少く、依賴心の强いものであるから、夫なり子なり進んでは神佛に賴らんとの念盛んなものである。宗教は依賴心に依て起たと云はれる程であるから、女子には特に必要なものとなつて居るのである。(五)又女子は一體に保守的であり、隨て何事にも變化とか變更とか改革などを加ふることを好まない所からして、自然男子では大分信仰が薄らぎ、若しくは變つてゐ

るにも拘らず、女子は依然として舊信仰を保持し容易に之を放棄しないものである。(六)又從來家庭で宗教は家事の一として、主婦の司る所となつてゐたから、慣習上自然に女子がより多く宗教心に厚いものとなつて居るのである。(七)更に最も大なる原因と思はるゝもので、而かも餘り世人の未だ注意しないことは、性慾に關することである。一體宗教心の盛んに起る時期、所謂發心の時期と云ふものは、男女を通じて普通に十二三歳から二十歳前後であるが、此時期と云ふものは、卽ち少年期から青年期に這入る時で、所謂春機發動期である。そこで宗教心の發生と春機發動と云ふことは、偶然時を同ふして起るのが、將又何か、關係のあるのであるかと云ふに、ホール先生が其著「青年期」の中で、發心の心理と云ふ章の所で詳はしく說明して居られるやうに、宗教心と性慾又は戀愛の情とは多くの點に於て共通の性質を有つて居るので、爲に互に相關聯し雙方の間に平行なり共變の存することは明白なる事實である。そこで若し肉慾を抑制し、合理的生活を送らうとすると、爲に宗教心の發生を助長することとなり、又宗教心の發生によりて、肉情も淸められ、荒淫を免るゝことゝなるのである。

それで眞正なる敬虔の念は超越的の愛情であり、聖者などゝ云はるゝものは聖化せられたる淸き完き愛情を有するものであると迄、ホール先生は說いて居られる。又戀愛に失貶し失戀の悲境に遭遇した場合に、心機一轉して宗教に歸依せるものも少くないし、又全然性慾を絕ち肉情を禁止して僧尼的の生活を實行する場合に、熱心の餘り宗教狂に陷るものも往々見受けられる次第であつて、要するに肉慾を禁止し劣情を抑制せんとする努力は、やがて宗教的感情を發生せしめる原因となるのである。所で今女子の性慾はよし男子程に强烈でないとするも、而かも靑年期は尤より場合によりては生涯其節操を固守し、隨て其肉情を抑制することの多いのは男子の比でない。加ふるにエリスも指摘して居るやうに、局部構造上の差異からして、女性の性慾は一層擴散せられ、一局部にのみ限定されてゐないから、容易に他の情緖を誘發し易いものとなつて居るので、自ら女子の宗教心は男子に比して熱烈であり旺盛である次第である。之に就て「婦人に關する眞理」の著者なる、ハートレー氏は自分の經驗を有りの儘に述べて居られるから、それを玆に擧げやう。「私は娘時代に仲々宗教に熱心にあつ

た。それは一部分自分の受けた訓練や、示された實例にも依ることであるが、それ以上に私は自分の強き女性的感動性に依つたものと思つて居る。私の宗教心は非常に熱烈で、罪より救はれんか爲に神を求め之を慕ふの切なる、恰も戀に狂せる女子が其愛人を求むるが如くであつた。當時自分は丁度青年期に入らんとする時であつたが、始終古への聖者の如くに、神と昇天する基督を見んことを熱望し絶へず祈願したものである。此祈願は長い間効驗を見なかつたが、私は小しも失望せず尙ほそれ程の價値なきものと心得、一層罪を悔い行を清ふして更に祈願を續けしが、遂に或る夏の夕に窓より美はしい空を眺めて居た時に、確かに神を見ることが出來、長い間の祈禱が成就したので、非常にうれしくそれからと云ふものは實に幸福なる念に滿たされた。今から考へて見ると「ヒステリカル」であつたらうと思はれるが、見神の實驗を得て以來、新しい宗派を開かうと思ふ位であつた。併し日々の俗務の爲に妨げられて、之を實行するには至らなかつた、　兼て健康體であつたので其以上何も病的と云ふには至らなかつた。そこで今日から之を考へて見ると、當時の宗教心と云ふものは、自分の性慾と密接なる關係のあつたことを認めざるを得ない。尤も自分の性慾は普通人より大分遲く發達し、又曾て情人を有つたこともなかつたけれども、年頃にもなつたことであり自然に性慾も起りつゝあつたので、其爲に宗教心が刺戟されたものであつたことを否定する譯にはゆかぬ。それで私に於ては宗教的衝動と性慾的衝動とは同一であつたやうに思はれる次第であるが、要するに性慾的本能を抑制すると、それが宗教心に轉化するので、爲に一般に婦人は在らゆる宗教の主要なる保護者となるものであることは疑ふべからざる事實である」。

第二　更に宗教心を惹起す勢力、換言すれば人をして發心せしむるに至る動機に就て、男女間に何等かの差別はないかと云ふに、此種の問題に就て詳細なる研究の結果を公にした、スタールバックの著宗教の心理學に據て見ると、次のやうな表に概括することが出來る。

發心の動機	百分比例 女	百分比例 男
死又は地獄に就ての恐怖心	一四	一四

自己の幸福名譽等に關する希望	五	七
利他心	(六)	四
義務心又は克己心	一五	二〇
罪惡の悔改	一五	一八
教訓	(一一)	八
實例の模倣	(一四)	一二
社會的壓迫又は强請	(二〇)	一七

之に據りて見ると、女子は利他心に富んで居ること、又男子よりも一層他人に依屬し、他人の意志によりて司配さるゝことの多いことを認めることが出來る。又義務心や悔改心に乏しいことを確むることが出來る。尤も發心者の年齢なり、知識の程度なり、境遇の如何に依りて各其動機を異にするに違ひないけれども、右の表に據りて大體男女間の差別を見ることが出來るし、こゝにも亦男女の特性は明かに現はれて居ることを知るに足ると思ふ。

第三 尙ほ發心後の信仰生活特に其理想とする所に就て、男女間に如何なる差別があるかと云ふに、之もス氏の調査した所に據ると、次のやうな表を以て示めすことが出來る。

理想	百分比例 女	百分比例 全	百分比例 男	上
他人を救助すること	(六五)	二〇	一九	五二
神と調和すること	(一八)	九	一八	一四
神を愛し奉仕すること	一四	三二	四二	三二
基督	一〇	一一	一一	一〇
自己を完全にすること	(六)	一六	一六	(六)
自己を發表すること	(三)	一四	一四	(三)
眞理を攻究すること	(二〇)	一三	一三	(二〇)
自利				
自己滅却又は犧牲				

種々なる克己的道德

此表に據るも、女子の理想は愛人愛神にあり、自己を犧牲にしても他人の爲社會の爲に盡さんとする、利他的愛他的のものが多數を占めて居るが、同時に眞理を研究するが如き純知的のものは甚だ少いことを認めることが出來る。之に反して男子の理想は自己を中心とするもの、又は知識的のものが著しく多いことを示めして居る。之れ亦男女の特性を明かに表示して居るものと言つべきである。

第四、更に宗教の成立に就て男女間に差別はないかと尋ぬるに、一般に宗教は男子に依りて建設せられ、女子に依りて維持せらるやうてある。卽ち宗教の開祖と云ふやうな人は多く男子で、女子は男子に依て開かれた宗教に信賴し之を保護するに止るやうてある。エリスの調査した所に依れば、六百の教派中僅に七教派のみ女子に依て開かれ、其餘は悉く皆男子の建設したものてある。て其七教派と云ふも、何れも近世に於て起たもので、其教理も多少の差こそあれ

皆基督教に類似したものてあるから、全然新宗教を開いたとは云へないものらしい。我國でも婦人が新に一宗派を開いたと云ふのは、近くは天理教位なことてあるが、之とて最初は頗る原始的のもので、之を公然一宗派に發達せしめたのは男子の力てある。要するに茲にも男子は創作的て、女子は守成的てあり、男子は組織的てあり、知識的てあるが、女子は之に反して實行的てあり、感情的てあることを認めることが出來、著しく其が特性の異れることを知るに足るものてある。

第五、同じく宗教を信仰するにしても、男子の宗教は概して世界的のものてあり、女子の宗教は地方的のものてあり、又其崇拜する神佛に就て云ふも、男子の信仰する所のものは、餘程抽象的概括的のものてあるが、女子の信仰する所のものは、大分具體的てあり多種的てあるやうてある。又男子の信仰は合理的て、女子のは迷信に富んて居るやうてある。尤も之は單に教育の程度、知識の有無に依て起る差別て、何も男女を區別する性的差別とは認定し難いかも知れぬが、兎に角現在の所ては實際の事實てあるやうに思はれるので、暫く這般

の事實を掲げて男女間の差別とする次第である。

以上四種の情操に就て私は男女を比較し、さうして女性の有する特性の一班を説明したつもりであるが、前にも述べて置た通り、情操は概して男子に於てより多く發達し、女子に於ては未だ男子程に至らぬことを認めるので、女性が一般に感情的であると言はれるのは、つまり情緒に就てのことで、情操に關したことではない。之は如何に女子の味方となり、女子を辯護しやうとしても、爭ふべからざる事實であるから致方がない。私は公平なる觀察者の立場から、斯樣なる女子の缺點を指摘して憚らないものである。併し女子は既に其感情的なるを以て特色とし、情緒に富み且つ益々之を精練して優美なものとなさうとする以上は、私は更に一歩を進めて情操を涵養し、以て高尚・純潔・典雅・崇高なる感情の發達を圖り、女子と云へば優美なり仁愛の權化たると共に、純潔なり崇高の表徵たらしめ、以て此殺伐なる社會を美化し、醜惡なる社會を敎化し、腐敗せる社會を德化するの一大天職を有するものと致したいのである。

第三篇　意志篇

第十章　意志の發達

意志作用に就て女性の特色を説く前に、雜と意志作用の發達を瞥見する必要があらうと思ふ。

元來知識は客觀的と稱えられ、感情は主觀的と云はれて居るが、何れも外來の刺戟に依て起るものであるから、等しく所動的の作用であると云はれるのである。之に反して意志の活動は、吾々自身より出て來るものであるから、能動的の作用と云はれて居る。卽ち吾々に於て自ら進んで何か爲さう、自ら努力し奮發して活動しやうとする作用であるから、意志は卽ち活動の意識であると云ふても差支がないのである。併し活動の意識も精神發達の程度如何に依りて、或は至て簡單な場合もあり、或は大に複雜なものともなつて居るので、意志の作用を説くに當りては、そが發達の順序を明かにする必要があるのである。

吾々の營む活動の最も簡單なものは、所謂無意的運動として現はれる所の自發運動、反射運動、本能運動である。之等の運動は何等外物に關する知識なくして起るものであるが、知覺作用に依りて外物を認識し、且つ其の吾々に對する利害の關係を悟ることになると、吾々は自ら其の利あり快樂の源となるやうなものを欲求し、其の害あり苦痛の基となるやうなものを嫌忌するやうになるものである。さうなると無意的運動の場合と異り、何の爲に活動するかと云ふ目的の觀念が明瞭に意識されて居るし、又經驗上如何にせば其の目的物を獲得することが出來るかと云ふ、方法なり手段も確實に了解せられるやうになるので、之れに依て有意的に特更活動を惹起すことになるが、吾々は斯の如き目的と方法とを意識してなす所の有意的活動をば、特に動作と名付け以て無意的活動と區別する次第である。其故に動作と云へば、何か追求する所の目的物がなければならぬ。そこで何かを追求し之れを獲得せんとする願望をば、普通に欲求又は欲望と稱えるので、動作は何等かの欲望に基いて起るものであると云てよいのである。

今此の欲望を分析して見るに、三つの要素から成立て居ることが分かる。第一、欲望には知的要素がある。即ち吾々は欲望すと云へば、必ず何か其の目的となるものを意識して居らねばならぬ。目的物なしに欲望することは出來ない。特に其の目的物に就て何等かの知識がなければならぬ、吾々に對して如何なる關係の存するものなるやを知らないては之れを欲望する譯にゆかぬ。第二、欲望には情的要素がある。吾々の經驗したもの、認識した所のもの悉く皆欲望の目的物となるのではなく、其の中單に如何樣にか吾々の感情を誘發し、さうして快樂なり苦痛なり或は滿足なり不滿足の念ひあらしむるやうなものに就てのみ、吾々は或は之を欲求し或は之れを嫌忌せんとする、所謂欲望を惹起するに至るのである。斯く吾々の欲望は苦樂とか利害の感想を離れては起り得ないものであるから、之を情的要素と稱える次第である。第三、尙ほ欲望には意的要素がある。即ち吾々は何かを欲求すと云へば、必ず其物の方に心を差向け其物に注意を集注して、之を取りたい之を獲たいと切望せしめるものである。斯樣な場合に於て、吾々は其事物に就て缺乏を感ずれば感ずる程、之を獲取せんと

の欲求を強からしむるものである。斯の如き欲求的狀態は吾々を驅りて、有意的活動を惹起さしむるものである。

然るに吾々の動作は最初は至て簡單なる活動に止るものであるが、知識や感情の發達につれて段々に複雜なるものになり、且つ思慮を伴ふやうになると之を行爲と名付け、さうして簡單なる動作から區別する。然らば如何にして簡單なる動作が複雜なる行爲に發達するかと云ふに、一體吾々は何時迄も單一なる事物のみを欲求するものではなく、段々と知識の增し經驗の加はるにつれて、種々なる事物をば同じく目的物として欲求するやうになり、又啻に目前の事物のみならず、遙に離れたる遠方の事物をも欲求するやうになり、又單に物質的のものゝみならず、精神的のものをも欲求するやうになり、又現に存在せる事物に止らずして、將來發現し得る事物をも欲望の目的物となし得るやうになり、隨て其目的物を獲取し追求する方法手段も到底一樣なる譯にはゆかなくなるものである。それで若し單一なる欲望を滿足せしめやうとするのであれば、格別骨も折れず至て容易なことであるけれども、若し種々と性質や種類の異りたる欲望を滿足せしめやうとすることになれば、從來自然に經驗した所の方法ばかりでは不充分であるから、更に色々と工風を凝らし思慮を運らして、既に經驗したる多くの動作中より彼是取捨する所あり、さうして恰も都合よき適切なる方法を案出せなければならない必要が起つて來るので、つまり欲望の目的物と云ふ點から見るも、又之を獲得する方法と云ふ點から見るも、共に動作をして一層複雜なるものたるに至らしむる次第である。尙ほ吾々は何時迄も單純なる快不快の情又は利害の念にのみ驅られて行動するものでなく、やがて感情の發達して高尙なる倫理的情操の現はれるやうになると云ふと、更に善惡正邪などゝ云ふ觀念に基いて吾々の欲望を判別し、さうして善はなし惡は避けねばならぬと云ふやうになり、且つ之を實行する手段に就ても、なるべく道德に適つたものを選ぶやうになるので、爲に吾々の動作は一層複雜なものにならざるを得ない譯のものである。要するに行爲は通例複雜なる動作と云はれるけれども、單に複雜と云ふことが其特色でなくして、之に伴ふ思慮卽ち分別工風と云ふことが其特色となつて居るものである。

尙ほ行爲に就ては、如何にして思慮の伴ふやうになるものであるかを少しく說明しやうと思ふが、先づ第一に、其の最も簡單なる場合に就て云ふと、吾々は其の種々なる欲望を滿足させやうとするに當り、其果して滿足せられ得るものであるかどうかと云ふ點に就て疑惑を惹起すものである。一體吾々の幼稚なる時に在りては、何事も自力にてなし得られるやうに信じて居るので、如何なる場合にも其の成効を疑はず、隨て其の爲さんとする行動に於ても毫も躊躇する所なく無鐵砲なやり方をするものであるが、段々と成長するにつれて種々なる事物に接し色々な場合を經驗するやうになるので、漸次世の中には我が意の如くにならないもの、到底自己の力量では如何ともする能はざるものが少くないと云ふことを認めるやうになるものである。さうなると或る欲望の起つた時に、若し之は確かに自分の力で滿足せしめらるゝものであり、成遂げらるゝものであるとの確信を起すことが出來ないならば、又は最初苦もなく出來ると思つたことも、實際に着手して見ると存外困難であつて、容易に思ふやうにゆかないと感ぜらるゝやうなことも往々起り來るので、左樣な場合に吾々はそは遂に滿足せしめ得るものであるかどうか、成功し得ることであるかどうかと尋ね、隨て自己の力量に就て疑惑を生ずるやうになり、爲に暫く動作を中止せざるべからざるに至るものである。斯樣な場合に一體に活動力の弱い人か又は欲望の左迄强くない場合には、欲望は全く消滅して遂に何等の動作ともならないで了るかも知れぬけれども、元來身體も健康であり氣力も盛んな人で、而かも制すべからざる程の欲望を有つて居る場合には、どんなにかして之を滿足せしめやう、苟も一たび志したことは何所迄もやり遂げやうと、一層奮發し努力して種々と其方法手段に就て思慮を運らすやうになるものである。で若し適當なる方法が見出されたならば、初て動作となつて現はれ、爲に欲望は滿足せしめらるゝに至るものであるが、要するに實行に就ての疑惑は思慮の一條件となるものである。

第二、又或る欲望の動機として起つた場合に、之を滿足せしめるに就て何等か苦痛の伴ふ所からして、欲望は滿足させたいけれども苦痛は避けたいと云ふので、直に之を動作として實行に現はさないで暫く躊躇し、さうして何とか都合よき方法はない

ものかと考へ爲に思慮を運らすやうになるものである。然るに其の苦痛を感ずるに就ても、二つの場合が區別せられる。(一)苦痛が動作其自身にあり、手段其物に存する場合と(二)動作の結果に存する場合である。例令ば虎子を獲るは大に希望する所であるけれども、虎穴に入るの危險を犯さなければならず、名譽ある賞與を得やうと思へば、大に勉勵努力する所がなければならぬやうに、其の欲求する所は如何にも望ましいものであるけれども、之を獲得するに要する方法は容易なものでない、仲々困難の伴ふものであるから、いざといふ場合には誰でも一思案せざるを得ざることゝなるものである。それで非常に無氣力なる人か又は怠惰なる人にありては到底其苦痛に耐へられないので、爲にそが結果の如何に拘らず全く之を放擲して顧みないやうになることもあるが、併し普通の人であれば誰でも暫く動作を中止して靜に思慮を運らし、さうしてなるべく苦痛を少くし容易に出來るやうな便利な方法を考へ、以て目的を貫かんとするものである。さればとて到底苦痛なり困難の避くべからざるものであれば、働作に伴ふ苦痛なり困難をば、其結果として生じ來る快樂なり成効と比較し、さうして若し果して勞苦に酬ゆるに足る効果の得られるものであることを確かめた場合には、一時の勞苦は忍耐しても初志を貫き最後の美果を收めんと努力するものである。又吾々は何でも吾々の嗜好品に對しては大に其欲望を滿足させやうとするものであるけれども、後に至て或は腸胃を害する恐ある故に、其の手段の至て平易なるに拘らず、躊躇して實行を敢てしないと云ふやうなこともあるものである。さう云ふ場合に、吾々は目前の快樂と將來の苦痛とを比較して、或は將來の苦痛を慮る所からして、目前の快樂を棄てゝ顧みないこともあり、或は幾分か制欲して適度に其の欲求する所を滿足せしめやうとすることもあり、或は又豫めなるべく將來の苦痛を少くするやうな方法を講ずるやうなこともあり、兎に角種々と思慮を運らすものである。

第三、尙ほ吾々は同時に幾多の事物を欲求し、それが一々動機となつて吾々の動作を促がすので、吾々は其の取捨に苦しみ何れに從ひ何れに背くべきやと、思案せざるを得ざることゝなり、爲に其解決を得る迄暫く動作を中止するやうになるとも、吾々の屢々經驗する所である。尤も斯樣な場合にあつても、(一)若

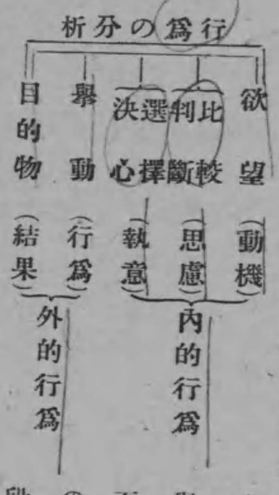
し多くの動機がつまり同一の目的に向つて吾々を導かうとするものである時には、例令は食事を取らうとするのと、散歩を試みやうとするのは、つまり生命の保存とか身體の健康と云ふやうな、共通の目的を有つて居るものであるから、決して根本的に相反すると云ふやうなものではなく、隨てよしや一時之等の欲望が互に競爭せんとするやうなことがあつても、時機を待てば雙方共に滿足せしめることも出來る所からして、爲に深く思慮を運らすには及ばないかも知れぬが、(二)若し幾多の動機が互に衝突して到底兩立することの出來ないやうな場合には、例令ば利己の心と正義の念とは全く反對に吾々を導くものであるから、若し利己の心に從へば是非共正義の念に背かねばならず、孝ならんとすれば忠ならず、忠ならんとすれば孝ならずと、嘆息したやうに、到底調和の出來ない幾多の動機の起つた時には、必ずや之等の動機は互に其の優劣を爭ふやうになり、勝負を決しやうとするに至るものである。さうなると吾々は其の取捨に就て迷はざるを得ないことゝなり、爲に大に思慮を要することゝなるが、往々苦心焦慮の極耐へ難い煩悶を感ずるやうにもなるものである。斯くて吾々の動作は一時中止せられ、彼是其の取捨に惱み躊躇逡巡して何れにとも容易に決心し難いやうな狀態に陷ることあるが、斯樣な場合に、或は吾々自身の自然的傾向からして、特別に何等か理由のあると云ふにあらずして、自然に一方が勝を占めて他を壓倒し、爲に禁止狀態を破りて動作を促がすやうになることもあり、或は又彼是互に衝突し未だ勝負を決するには到らないけれども、禁止の狀態衝突の狀態其自身が嫌やになり、遂に吾々は如何になるとも敢て意としない所謂無頓着の有樣となり、爲に無意味に何れか一方に勝を讓り、さうして之を滿足せしめやうとするに至ることもあるが、若し幾多の動機に就て何所迄も其の是非善惡を判別し、さうして其取るべきを取り拾つべきを捨てやうとする、思慮の周密なる人、若しくは道德心の强固なる人にありては、決して事を有耶無耶の間に判決しやうとしないで、深く沈思熟考する所ありて如何なる煩悶にも打克ち、如何なる昏惑にも正確なる解答を與へやうと努力して止まないものである。斯くて其正確なる解答判斷を得るに至らんか。其正且つ善と信ずる方を選んで之を決行せんとするものである。斯樣な場合に於て、行爲の特質は最も明

瞭に現はれ、爲に思慮的動作とか撰擇的行動とか云はれる次第である。

最後に前述の如き復雜なる行爲を分析して其の要素を擧げて置かうと思ふ。

第一、行爲には之を惹起さしむる動機卽ち欲望の存することは云ふ迄もないことである。第二、更に其の欲望に就て利害得失なり是非善惡を考慮し、且つ又之を獲得するに要する手段方法に就て、其の適・不適・便・不便等をば比較判斷する所の思考作用が含つて居る。若し何等か欲望の起るに際し毫も思慮を運らさず直に之を滿足せしめんとするが如きは、所謂衝動的意志と稱せられ大に卑しむべきものである。第三、既に何等かの判斷を得たならば、進んで現在自己の營まんとする動作に於ては、其の何れを取り何れを捨つべきものであるかと選擇する所がなければならぬ。若し單に何等かの判斷を得たと云ふに止らば、全く自己の動作活動には關係なく、つまり純粹なる知的作用たるに止るものである。併し單に彼を取り是を捨てると云ふ選擇を行つたのみでは、やつと實行の端緒に就たと云ふばかりであつて、未だ行爲は成立してゐないのである。そこで或る動機に基いて行爲を成立せしめると云ふに就ては、愈々其選擇した所に據て活動の方向を定め、斷然之に向つて活動しやうとする所謂決心が起らねばならぬ。其故一たび決心したと云ふならば、最早單に判斷したとか、選擇を了したと云ふのとは大に異り、必ずや實行の伴ふことを示めしてゐるものである。それで一たび實行を決心したと云ふならば、卽ち余は斯くなさん、否なすべしと思惟するやうになり、善にあれ惡にあれ、之は自分自身の所作である、動作であると云ふ意識を有し、隨て立派に自己の意志を現はす者である。依て之を執意と稱し意志の頂點と見做すのである。而して茲に到ると自ら之を外的擧動に現はすべき運動の觀念を心中に召び起し、之に依りて實際の行動たらしむるに至るものである。それで果斷決行の人と云ふは、決心が早く且つ之を實行するに至る過程も短くて、毫も躊躇逡巡する所なく直に其決心を貫かんとする人である。之に反して徒に思案にくれて容易に實行の出來ない人は、所謂遲疑する意志を有するものである。又强固なる意志と云ふのは、尤より果斷決行をも意味するけれども、寧ろ其決心を持續せしめ、一たび決心したとは之を貫徹せしめなければ止まない、如何なる困難に遭遇するも決して中途で挫折しないと云ふ

持續力或は意氣込みを云ふのである。第四、そこで決心を實行する爲に外部に現はれ來る外的擧動がある。斯くて既に一旦實行ぜんと心中に決したならば、最早意志は立派に成立して居るので、之を內的意志と稱するが、若し進んで如何樣にか之を外部に現はして外的擧動たらしめた時には、之を外的意志と稱えて兩者を區別することが出來る。第五、外的擧動の結果目的物を獲得するに至らば、卽ち吾々の行爲は其終はりを告げ所謂成効したものである。併し目的を遂ぐるの難易あり、手段の巧拙ありて必ず成効を期すべきではないから、時に失敗に終はり努力の水泡に歸する場合もある譯である。



斯樣にして行爲は以上五個の要素から成立するものであるが、併し其中最も大切なるものは、動機と思慮と執意であつて特に執意は意志の中堅である。依て吾々若し何事かをなさんと決心する所あらば、よしや其の決心は外的擧動として手足の運動に現はれずとも、又隨て未だ何等の結果を見るに至らなくとも、既に心中立派に意志は成立し以て其の責任を問はれる譯のものである。其故に吾々は尤より思慮の綿密判斷の確實なるを要するけれども、其の上では選擇決心所謂執意に就て深き注意を拂ひ、事毎に苟もせざる習慣を養ふの必要あるを認むるものである。要するに如何なる場合にも正確なる判斷に基きて正當なる選擇をなし、而して其の爲すべしと決心したる場合には、是非とも之を斷行するの勇氣を鼓舞し、爲すべからずと決心したる場合には、斷然之を抑制禁止するの克己心を振起せしめねばならぬ。茲に所謂意志の修養なるものを見る譯で、之に依りて吾々は能く吾々の意向を司配し言行を統御し得る次第である。

第十一章　女性の意志

一般に女性の意志は薄弱である、強固なるものでないと云はれて居るが、之は果して事實であらうか。此の問題を解釋するに就ても、何等正確なる實驗的研究の根據とすべきものがないから、單に各自の觀察に基いて立說するより外仕方のないことを憾とすることである。然るに私の觀察に據るも、女性は知識に於て其の發達の充分でないやうに、意志に於ても同樣なる事實の現はれて居るやうに思はれる。然らば如何なる點に於て女性の意志は薄弱であるか、又どう云ふ理由で以てさう云ふ風に云はれるのであらうか。

第一、元來女性の體質は緒論にも述べて置た通り、男性の消費的活動的なるに反し、貯蓄的靜止的のものであるから、自ら骨格も靜座するに適し、運動するには不適當に出來てゐるので、精神に就て云ふも、其の活動的方面なる意志の發達には不適當なことになつて居るやうに思はれる。

第二、意力の基礎は筋力にありと云はれる程、筋力の强弱なり、筋肉活動の巧拙は意力の發達に大なる關係を有するものと見做されて居るが、女子の筋力は餘り之を使用しない所からして甚だ脆弱で、到底之を男子に比すべくもないのみならず、之を使用するに就ても敏捷でない拙劣なるものがあるので、自ら意志の發達にも影響し、男子のやうに强固でない一つの理由になつて居るやうに思はれる。

タムソン女史の試みた所の反應時間の實驗に依て見るに、女史は一定の裝置を以て被驗者の耳と眼に刺戟を通じ、刺戟の來るや否や右手食指を以て測時器の一端を壓し以て反動を現はさしめ、同時に反應時間を檢査したのであるが、男性の方女性よりも一層短い反應時間を有つて居ることを示めした。聽覺視覺何れに於ても、男生の方では何れの女生よりも、短い反應時間を呈するもの數名あり、之と同時に女生中には、何れの男生よりも長い反應時間を呈したるもの數名あつて、つまる所大體に於て男子の方反應時間短いことを證據立てた。又刺戟に對して反動する時に、其注意は何れに向いたかと云ふことを調査し、以て反應の型に就て取調べたが、聽覺視覺何れに於ても、感覺型は女子に多く、

運動型は男子に多數なることを確めた。夕氏は之を以て男生の運動好きなることと、兼て活潑なる生活をなしつゝあることに歸するやうに說いて居るが、そは兎に角男子は筋肉使用に熟練して居る、隨て敏捷であることを示めす次第である。

更に夕氏は指尖運動の速度及び疲勞の割合に就ても比較研究を試みて居る。之にも特別な裝置を設けたのであるが、要するに一つの圓盤があつて、其上に右手を横へさうして食指の指尖にて圓盤の中心にある打標を輕く打つのである。さうすると圓盤の下に附設してある測度器で以て何回打標を打つたかと云ふ度數が分かるやうにしてあるのである。それで合圖が與へられると直に被驗者は上述の如き指尖運動を始め、さうして如何に速かに、又如何程長く繼續し得るかを檢査したのである。所で此の實驗に依るも、男生は女生より著しく迅速に指尖を動かし過ることを發見した。男生は二十四秒間に於て平均十度多く打標を打ち得た。一體ピアノなどの樂器練習は、女生に於てより多く試みられて居る譯であるけれども、指尖運動の男生に劣る所を以て見ると、どうしても其の活動的でないと云ふことが分かる。又此の運動は一分間もすると皆痛みを覺へ、それ以上繼續することは困難であるから、二分間で中止したのであるが、それ迄繼續したものは男生に多數であつた。女生は四十秒にして既に疲勞したものもあつた位である。

性＼秒					
男生數		四〇	六〇	八〇	一〇〇	一二〇
女生數	一	二	三	二	二三	一七

要するに、之等の實驗は單に指尖運動の比較研究に過ぎないものであるけれども、何れの部分の筋肉に就て云ふても同樣であらうと思はれるので、女子は男子に比して、筋肉の活動に於て著しく劣るものであることを確め得る次第である。

第三、更に吾々の行爲の動機となる所の欲望に就て比較して見るに、女子は既して欲求する所少く且つ其の强度も强くないやうに思はれる。

二、生命の欲望はどうか。全體生きてゐる以上は何人も生命を保護持續せんと

の欲望を有たないものはあるまい。之は人間にありても一つの本能的欲望てある。其故男女に於て強弱の差異はなささうなものだが、私の見る所ては、女子の方割合に淡泊て、男子程に執着する所がないやうに思はれるが、如何なものてあらう。些々たる原因て以て生命を絶ち、自殺を試みるやうなことはないか。尤も自殺者の統計に依ると、女子の方少數てあるが、併しそれには理由のあることてあるから、後に至て說明しやうが、兎に角自殺てもしやう、いつそのことと死んだならと云ふ心は、女子に於てより多く起るやうに思ふ。それて若しさう云ふ場合に自殺を敎唆し勸誘するものがあつたなら、容易に之を實行しさうして女子の自殺數を增すことてあらう。要するに私の見る所ては女子には親心を除いては義務心が薄弱てあつたり、被暗示性に富んて居るから他人の誘惑に應じ易かつたり、又感情的てあつたり。ヒステリーに罹り易いので、一時精神錯亂して前後を忘れるやうなこも多からうし、且つ犧牲の精神に富んて居るので、他人の爲に己が生命を拋つことも少くないので、何所迄も生存し飽く迄活動しやうと云ふ欲望は、比較的に少いやうに思はれる。

(二)生命の持續に必要な飲食に對する欲望は、どうてあるかと云ふに、之れ亦女子に寡少なるは明かな事實てある。

(三)衣服裝飾品に對する欲望は明かに女子に於て旺んてある。四五歲の幼女より二十歲前後の所謂年頃の娘は尤より、年增になつても老婆となつても、衣服や裝飾のことになると、何を差置ても一番に欲求すると云ふ風て、殆ど女性の本能なるかのやうになつて居る。

(四)知識に對する欲望も、從來の敎育なり境遇の然らしめたものとは云へ、一般に甚だ薄弱てある。尤も米國や英國の女子は近來敎育の進步につれて、大に好學心も進み研究心も增して來たから、我邦現時の女子などゝは同一に論せられないけれども、概してまだ〳〵男子に及ばざること遠しと云はざるを得ないやうに思はれる。

(五)名譽の欲望は女子に在りて必ずしも薄弱てはない、人に褒められやうと思ひ、他人の批評に掛念するは、女子の方著しいやうてあるが、其の名譽と心得る事柄が概して卑近てある。一般に容貌の美を以て人に誇るとか、衣服の立派

なのを名譽と思ふか、左なくとも夫の位置が高いとか、子女の成績が良いとか云ふ位のことに止り、自分自身何かの發明をしたとか、事業に成功したとか云ふやうな、社會的貢献を以て名譽とするやうなことは殆どない。之れは尤より女子の社會的位置が然らしむることで止むを得ないこともあらうが、兎に角名譽心の範圍の狹少であるのは明かな事實である。

(六)權力の欲望はどうであらうか。女子は幼時より嫉妬心強く競爭心も旺んであるから。仲間なり他人より優りたい卓越したいと云ふ希望は、存外強いやうであるけれども、名譽心の場合と同じく其活動する範圍は甚だ狹いものである。

第四、更に思慮に就て、女子は如何なる特質を現はして居るかと云ふに、私は女子の行爲に於て、思慮の分子は甚だ少いやうに思ふ。何故と云ふに、前にも述べた通り、元來女性の欲望は少く且つ餘り強くないので、特更そが比較研究を必要とする場合が多くない、隨て左迄思慮を運らすには及ばぬものゝやうに思はれる。男子は之に反して、其關係する所大きく隨て活動の舞臺も廣いので、自然欲求も多くなり、願望も少くない所からして、其間に取捨の必要も起り、熟慮を要することゝなるのであるけれども、女子には其のやうな必要は餘

り感ぜられないものである。尤も概して女子は氣兼ね多く心配性のものであるから、屢〻些々たることに就て心勞ひなり憂慮することの多いものであり、特に「ヒステリ」的の女子に於て其の甚だしきを見ることではあるが、之等はたゞ徒に心勞憂慮するに止り、深い意味のあるものではない。特に女子には正義とか義務の觀念と云ふものが缺損して居るから、之等の觀念に訴へて己が行爲の是非善惡を熟慮すると云ふやうなことの少いものである。其故女子は餘り煩悶とか苦心焦慮とでも云ふやうな、痛烈な深酷な不安を感じないもので、存外樂天的の所があるやうである。又概して女子は思慮に必要なる知識なり能力を缺いて居るから、沈思熟慮以て徐に判斷を期するやうなことは不可能である。尙ほ知識篇に於て述べた通り、女子の判斷は感情的であつたり、直覺的であつたり又は依他的であるからして、自分自身に冷靜なる態度を以て、靜に考へ深く慮ると云ふやうなことは出來ないものである。其故女子の行爲は慾望の起ると共に直に執意に移り、所謂衝動的意志に依て成立する場合の多いことであり、隨て輕舉妄動の少からぬものである。

第五　執意に就て

觀察するに、普通の場合に於て女子の決心は迅速である。前にも述べた通り、女子は其欲求する所に就て深く思慮を費さないものであるから、直に之を決行せんとし、爲に欲望より容易に執意に移り、其經過は實に單純なものである。然るに何か面倒なことか、重大なことでも起り、到底自分の力に及ばないと云ふやうな事件に遭遇すると、多くは躊躇逡巡して容易に選擇決心の出來ない、隨て果斷決行を缺くことの著しいものでいる。所で之はどう云ふ譯であらうかと云ふに、私の考へては、(一)女子の體力は比較的軟弱である筋力にも乏しい所からして、元氣なり勇氣を缺いて居るのも其一原因である。(二)女子は一體に知識に乏しく經驗の少いものであるから、何か志を遂げ事を爲さんするに當り、其爲に要する手段なり方法の知識に於ても甚だ貧弱であり、又實行的技能に於ても甚だ拙劣であり熟練してゐる所がないので、自信力を有つてゐないから、自然臆病になり、思ひ切つたことが出來なくなるからである。又(三)女子は依他心と云ふか、依屬心と云ふが、他人に依賴し從屬する精神の強いものであるから、少しでも困難なこと、聊かでも面倒なことが起ると、直に其親に賴るとか、其夫にすがると云ふ風であつて、獨力以て事に當ると云ふやうな健げな獨立的精神と云ふものは、特に缺損して居るやうである。それであるから男子のやうに自信力に富み、さうして如何なる場合にも泰然として自決すると云ふやうな勇氣を有たないものである。又よしや女子は自力で以て遂行し得ることであつても、依他心の強い爲に、其將に決心する所あらんとする際、友人は之に對して何とか批判を加ふる所はなきか、世人は之に就て如何なる感想を起すであらうかと、他人の批評を恐れ、世間の評判を掛念する餘り、躊躇して決心なり斷行を敢てしないことも多いやうである。又よしや決心したとしても、兼て女子は感情的であり、又依他的である所からして、容易に初志を變化し動搖極りなく、爲に堅忍不拔と云ふやうな持續力に乏しく、到底薄志弱行たるを免れないものである。

それなら女子は全く意志を缺ぐかと云ふに、女子とても一旦かうと思ひ立た時には、仲々強固なる意力を現はし、所謂女の一心で是非其之を遂行せんとすることも、屢々見受けらるゝことである。特に病める夫を助けて家業に勵むと

か、或は寡婦が子女教育の爲に、固く節操を守て奮鬪する場合のやうに、主として犧牲的行爲に於ては、仲々男子も及ばぬ強固なる決心、斷乎たる勇氣を現はすものである。だから私は思ふに、何も女子が意力を缺いて居ると云ふことではなくして、寧ろ女子は長い間の慣習に捕はれ、境遇に餘儀なくせられ、加ふるに體質の關係もあるので、爲に意力を發揮する場合なり、必要を缺いて居るものだと認むべきものである。其故に病める夫を有つとか、寡婦になつて大なる責任を感ずるに至ると、最早他人に賴る譯にもゆかず、安閑として居ることも出來ないから、奮然として起ち、猛然として進むと云ふやうになるものである。されば責任を感ずるやうな境遇と必要さへ與へたならば、女子も強固なる意志を有ち得るに相違ないのである。

又よし斯の如く自分自身に獨立して、奮然事に當ると云ふに至らずとも、夫なり他の男子の心を動かし、或は鼓舞奬勵すると云ふやうなこともあり、或は教唆使嗾すると云ふやうなこともあつて、兎に角他人をして善かれ惡かれ、自己の意志を遂行せしむる原動力となり、表面には出ないで、裏面で畫策すると云ふやうなことは、世間に多く見受けらるゝことである。それであるから女子は往々狡猾である陰險であると見做さるゝこともあり得るものである。

又よし斯樣に直接なり間接に、進んで自己の意志を遂げんとする、勇氣なり腕前はないとするも、退いて辛抱すると云ふ、所謂忍耐心は仲々強い。男子なれば到底耐へ切れない、我慢の出來ないことでも、女子は能く辛抱して毫も不平の聲を漏さないことのあるものである。之は蓋し(一)兼て物事の斷行を躊躇する習慣があるので、自然少々の苦痛不滿は我慢して忍ぶと云ふことになるのであり、(二)又元來女子は生理的に苦痛に耐へ得るやうに出來て居る。換言すれば女子は種々な疾病や傷害に對する抵抗力の强いものであるから、自ら精神上にも影響し、さうして忍耐する性質を備ふるに至たものである。尙ほ(三)從來の女子の境遇は、常に男子の壓迫なり束縛に慣れ、爲に忍耐は女子に在りては遺傳的本能であるかのやうになつて居るからである。其故女子は積極的意志を缺ぐも、消極的意志には富んで居るやうである。之は尤より女子の短所であるが、又長所でもある次第であるから、私は世の女子たるものをして、何時迄も這般

の忍耐心を失はないて、而かも今少し果斷決行の勇氣を養はしめたいものと思つてゐます。

斯く女子は體力なり、筋力なり、又は欲望なり、更に進んては思慮なり執意なり、何れの點より見ても、意力の强固ならざるものあるは明かなる事實である。併し女子なれば必ず意志の薄弱なるものと確定せられたものではないから、私は將來の女子教育に於ては、出來るだけ女子の意力を養成し勇氣を促進するやうな、方法なり手段を採りたいものであると思ふ。それに就て最も大切なることは、第一に、女子の體育を盛んにして、其健康を增進し、さうして體力なり筋力を强固ならしめたい。第二に、元來女は弱きものなりとの謬想を放擲し、女なりとて男子と同樣に事をなし得るものであると、自任自重の精神を皷舞したい。第三に、健康なり事情の許す限り、學校でも家庭でも、なるべく多くの作業勤務を與へて、其意力を練磨するの機會を與へたい。女だと云ふので溫室内の花を取扱ふやうにしたなら、遂に意力を使用するの機會を失ひ、爲に萎縮して其用をなさいものとなるのは必然の結果である。第四、作業を與ふると共に責任の感を養成したい。苟も自己の責任なり、本分なり、義務なりとの觀念を抱くに至らば、何事に限らず之を成遂ぐるの勇氣を惹起すに違ひないと思ふ。第五、更に女子をして依他的の奴隷根性を放擲し、さうして獨立自彊の精神を鼓吹せしめたい。學生々活に於て日々の課業に對する場合のみならず、嫁して夫に事ふる場合にも同じことて、徒に夫に賴り夫に縋がり、さうして夫の從屬者附屬物を以て甘んせず、自ら相當の見識なり才能を有つて、進んて夫を補佐し、誘導し、感化するの意氣を涵養せしめたい。さうして一朝夫に別るゝが如き不幸に遭遇するも、妄りに慣れみを他人に乞ふが如きことをなさず、獨力以て一家を經營し、子女を教育し得るの元氣と膽力を與へたい。私は先頃米國女流飛行家のスチンソン孃に出逢ひ、親しく彼女が飛行術を練習するに至た動機なり精神を聞て、實に感服に堪へなかつたのてあります。ス孃は最初獨逸に留學して音樂の修業をと志したのてあるが、家貧にして學資を得るの途がなかつた爲に、遂に意を決して飛行家となり、其所得を以て學資に當てやうとしたのださうてす。それて最初は女子が飛行術を學ぶと云ふて、大に嘲笑せられたもの

ださうてすが、ス嬢は女子なりとて同じく人間なれば、同じ人間なる男子のすることに出來ないことはないと確信して、大勇猛心を起し以て短時日の間に、飛行術に熟達し其技男子を凌駕するに至たものださうです。女子も同じく人間なりとの意氣を以て事に當らば、何事か成就せざるべき。かゝる自信力、自重心あつて初めて女子の意力も涵養せらるゝことゝ思ふ。

第十二章　職業的才能に關する男女の差異

女子の體力なり意力の屈弱なること、隨て將來の教育に於ける注意は、雜と前章に述べた次第であるが、現在女子の體力なり意力の如何を實地に調査する便利な方法もないから、こゝに私は職業上女子は如何なる成績を表はして居るか、男子と比較して如何なる差異を示めして居るかと云ふことを取調べ、さうして女性的意志の特徴を知るの一端たらしめやうと思ふ。然るに之とて未だ精細なる觀察なり統計と云ふものが出來てゐない、特に男女共々に同一なる事情の下に、同一の仕事に從事してゐると云ふことも甚だ少いので、公平なる又確實なる比較を試みることは到底出來ることとてない。併し種々なる方面に於て調査したる報告もあるから、之に據て大體の差異を擧げて見やうと思ふ。

佛國のヅローネーは、曾て多くの商人に就て、親しく其觀察して居る所を問合はしたことがあるが、其答は一般に、「女は男より一層勤勉であるが、併し知慧に乏し」と云ふ點に於て一致した。其中て印刷業主の答へた所を擧げて見るな

ら、女は細かい所は綿密な注意を以て、又器械的には能く働くが、彼等は何をなしつゝあるやと云ふことを充分に了解して居らぬ。それで既に印刷してあるものを見て植字する場合には甚だ甘いが、普通の手書から植字する場合には女に及ばないとのことである。又英國のシドニー、ウェッブが、或る生は、男命保險會社の事務員に就て述べて居る所に依ると、其會社では常務を執る爲め女書記が二百人以上も雇はれて居るが、此女書記達の勤務振りは仲々甘い、男の書記よりも仕事が寧ろ上手で且つ迅速であることは疑ひない。併しながら彼等は病氣而かも何でもない微恙の爲に缺勤することが多く、男書記の約二倍以上にも及ぶとのことである。且つ又常務以上の事務になると、之を女書記に一任する譯にゆかぬ、つまり信用して執務せしめるだけの才能がないのである。其故之等の點からして云へば、女書記を使用することは、會社の不利益となる次第である。併し單に常務に就て云ふと、卽ち餘り八釜しく急き立てないで、徐々に繼續して仕事をやらせるなら、女は男に優れて居るらしいと云ふことである。

郵便局では何所でも男女の事務員を使つて居るから、郵便局に就て男女の職業的才能を比較したら面白からうと云ふので、エリスは英國の各地に於ける大郵便局へ問合はせたが、之に依りて實際の經驗から出た信用せらるべき答を得た。それで或る郵便局長の言に據ると、計算掛とか又は爲換掛貯金掛電報の發受などの如き器械的の仕事や、又は野卑や亂暴な人達に接し、之を甘く取扱ふてゆくと云ふやうな働では、女書記は男書記より優つて居る。又女書記共は帳簿を整頓し、金錢の取扱に注意深く、應對が上手で又能く忍耐すと云ふのが、一般に女書記の長所であるらしい。又英國西部の或る郵便局で、電信事務は全然女子の勢る所となつてゐるさうであるが、其仕事振りは仲々巧みであると。又或る郵便局でも、女は男と同じやうな才智と精確とを以て電信事務に從事して居るが、筆跡が拙く男のやうに上手でないし、又女は男のやうに電信に關する專門の技術的知識を研究しやうとする熱心を有たないとのことである。それから郵便事務はどうであるかと云ふに、之にも女は大なる成功を收めて居る。女の事務員の使はれて居る郵便局では、不注意だとか不親切だとか云ふて、公衆から非難せられることが少いとのことである。切手類を整理し、金錢上の取

扱は確實であると云ふやうな次第で、之を要するに、女事務員は才智と精確とを以て其任務に從事するが、普通の場合には男と同じやうに執務し得るけれども、困難な仕事特に腕力を要するやうなことになると、全然男の敵手でないと云はれて居る。同じやうな意見が他の郵便局よりも來て居るが、尙ほ或る郵便局長の報告によれば、單に計算的の事務では、女子の電信技手も立派に其職務を果すけれども、非常な場合には到底男子の技手に及ばないて、過失の割合が一般に女子の方に餘計である。又配達人の管理や訓練も、男の方が能く出來る。更に又專門の電信技術に就て、かなり忙がしい時でも、女は男と同じやうに動き得るけれども、非常に忙がしい時になると女だけでは間に合はないから、一般に男の技手をして手傳はせる必要がある。特に新聞社の通信になると、餘りに忙がしくて女子には到底應じきれないさうである。蓋し女子の手頸は迅速に通信を筆記するだけの强さを缺いて居るのも、其一原因であり、加ふるに女は一般に知識の範圍は狹く、種々なる通信事項に關し一々興味を有つて居ると云ふ譯にゆかないから、自然技術の拙劣を來たし、男子に及ばぬやうになる次第であると。又或る人の意見に依つて見ると、女は室内を歩き廻はり、長時間腰掛けないて立ちづくめにすることは困難であるから、監理者とか取締人として働くことにも適當しないとのことである。

之等の報告は、何れも大體に於て一致し、同じやうな意見を發表したものであるが、之を要するに女は訓練上男子よりも一層敎へ易く又導き易い。而して容易な仕事では男と同樣に執務し得るのみならず、或る場合には一層確實である。併し彼等は屢々輕微なる不快の爲に缺勤し、少しく烈げしい務には速かに疲勞するのみならず、普通以上の知識になると往々之を缺ぎ、又專門技術上の知識を得んとするの希望すら有たないやうである。之は尤より結婚と云ふ他に目的を抱いて居るからで、隨て止むないことではあるが、技手としては不適當なことである。

尙ほ傭主の方から考へた時に、女の俸給は比較的に安いから、例令ば英國の郵便局では、女の事務員の俸給は約二十五パーセント安いと云ふことであるから、此點からは女の事務員を採用した方が、經濟上得策であるけれども、併し

又不都合なこともあるので、俸給が安いからとて必ずしも經濟にはならぬらしい。今英國の郵便局に於ける調査に依れば、(一)女の事務員は病氣の爲缺勤が多い。(二)夜間は女の執務を要求されない、而かも夜間の方が忙がしい。(三)彼等には普通以上の餘計な仕事が出來ない。(四)晝間でも郵便局へ盜賊の襲來することもあるので、女の事務員を使つてゐる所では、盜難防禦の爲に別に男を傭はねばならぬ。(五)便所を特別に設置する必要あり、甚だ厄介であるので、地方の郵便局では女の事務員を採用せぬ所が多いと云ふことである。

啻に會社なり郵便局に於ける事務のみならず、特に婦人の任務と見做されて居る、料理や裁縫の如き仕事でも、專門の職業としては、女子は到底男子に匹敵し得べくもあらず、男子の遙に卓越せる技能を有つて居ることは何人も首肯せざるを得ないことになつて居る。

斯う云ふ次第で、職業上でも女子の體力なり筋力の孱弱なことや、意力の薄弱なこと、さては才智なり技術の淺劣なことは、充分に表はれ疑惑の餘地はない。尤より女子にも執務上多少の長所のないではないが、概觀すれば、男子の方が遙に優良なる性質を有つて居ることは明かな事實である。然らば何故女子は職業上に於ても、男子の下に立つやうになつたが、之に就ては少しく男女間に於ける職業の變遷を研究して見ねばならぬ。

第十三章　男女職業の變遷

原始的社會に於ける人々の勞働は、主として食物を獲得し又其方法を確實する爲に努力することにあつたものであるが、男女は異りたる體質を有つてゐるので、それが自然に當時の勞働に影響し、爲に彼等の間に職業上の差別を生ずるやうになつた。然らばどう云ふ風に男女は其仕事を異にしたものであるかと云ふに、大體男は活動的のものである所からして、元氣とか暴力とか又は迅速なり策略を要するやうな仕事に關係するやうになつたが、女は概して靜止的なる所からして、餘り身體を動かさないで、徐々にゆつくりと出來る仕事、又は餘り常規を逸しないで、規則正しく出來るやうなものに從事することゝなつた。そこで男は專ら手荒い仕事で、野獸を狩したり進んでは戰爭することに努力したものであるが、女は之に反して落付て出來る仕事で、主として植物を成育せしめる所の耕作に從事することゝなつたものである。狩獸や戰爭は隨分危險なものであるが、仲々勇ましい仕事であり、又其結果も直に現はれるものである。

之に反して耕作は危險のない代はり、氣長く忍耐してかゝらればならぬ、迅速に結果の現はれない固定した所の仕事である。

然るに野蠻人間に於ける女の任務は單に耕作に止らずして、之に附帶した所の種々なる勞働に從事するものである。曾てオースタラリアのクルナイ種族のものが、フイツンと云ふ人に向つて、「男は狩し魚を捕へ又戰ふものであるが、其餘は只だ坐するのみ」と語つたさうであるが、若し之に加ふるに尙ほ武器を造くることを以てしたならば、原始社會に於ける男の仕事と云ふものは悉く皆包含せしめることが出來る次第である。而して之等少數の仕事以外の在らゆる勞働は悉く皆女の從事する所であるから、女の職務と云ふものは、男の仕事の數倍にも當り、且つ仕事の性質として間斷なく働かねばならぬ、仲々多忙な骨の折れるものである。其故古い諺にも、「女は最初駄獸でそれから家畜に進み、後に奴隷となり下婢となり、最後に劣等者たるものである」と云はれて居る。之は元より極端な形容であるけれども、又以て原始時代に於て女の從事した勞働は如何に雜多であり、又如何に難儀なものであつたかを想像するに足ることであ

る。タスマニアの婦人に就て、ボンウイックの言つて居る所に依ると、婦人は子供を養育する任務の外に、袋鼠を捕へる爲に小山に登つたり、芋薯や滋養分に富んだ所の草根を採る爲に地を堀つたり、又牡蠣や魚を漁る爲に海に入ることもあり、斯くて其採取した所のものを以て種々と食物を調理するものである。然るに男は女の料理したもので滿腹し、さうして後始末も亦女に一任して顧みないと云ふことである。所が之等の野蠻人は絶へず居所を變じ、あちらこちらと移轉するので、其度毎に女は籠の中に家具を入れ、重い荷物を運ばねばならぬ。然るに男は之を手傳はないのみならず、差當り必要でない不用なる武器卽ち鎗とか棒とか云ふやうなものを其荷物の上に乘せかけ、さうしてなるべく身輕るにして行くと云ふことであるから、女の荷物は一層重くなる譯である。又オーウエンの記して居る所を見ると、アダマン人の間では、男は豚狩りの爲に藪林の中に行くが、女は飲用水や薪を用意し、網や籠を造り又糸を紡きなどし、さうして男の歸る迄に食物を調理するとのことである。又ニューカレドニアでは、小女は耕作に從事し、男兒は戰ふことを學んで居ると、ターナーは云ふて居る。又アルブーセットは亞弗利加のブシユメンに就て、次のやうなことを云ふて居る。卽ち女は蓆を織りさうして之を屋根とした隱れ家を設け、其下で家族共は風と太陽の光熱から避けるやうになつて居る。又三個の石を疊んで簡單なる爐を造り、さうして僅少なる土器を燒いて居る。斯くて住家の建設なり家具の製造を終はると、彼等は更に野原に出でゝ草の根や蝗蟲などを蒐集し來り、以て食料品に充てゝ居る。て若し他所へ移轉する場合には、女は子供は尤より蓆とか、土器とか又は駝鳥の卵殼や獸皮などを運搬するが、男は單に自己の鎗とか、弓や矢筒などを運ぶに過ぎないものであるとのことである。尙ほコトン、マーサーと云ふ人の亞米利加印度人に就て述べて居る所を見るも、同じやうな狀態である。曰く「男は憎くべき程怠惰であるが、妻たるものは耕作に從事し、收穫を小屋に貯へ、さうして穀物を臼搗き、又住居の爲小舍を建てる」と又ジョーンスも南方印度人の女子に就て云ふて居る所があるが、曰く「婦人は絶へず勞苦に使役せられ、常に從屬的の位置にあり、毎日料理に忙がしく、及土器や蓆や籠や皮靴などの製作に從事して居るのみならず、土地の耕作者であり、又子

供の養育者である。斯く婦人は始終男性の命令と慾情に服從して居る下婢である」と。さう云ふ次第であるから、原始時代に於ける女子の任務と云ふものは、實に多忙を極めたものである。併し彼等は其境遇を以て不滿に思つたのではない、喜んで其任務に從ひ勞働に堪へたのである。要するに女と云ふものは分業上特に家事に關しては、勤勉であり勞苦を厭はなんだとのことである。それで女子が怠惰になり勞働を厭ふやうになつたのは、ずつと後世のことであつて、つまり生活に餘裕を生ずるやうになつてからのことである。特に男が女の美を何時迄も保存したり、又は他の男との交際から女を遠け、之を妨害しやうと云ふ希望を抱くやうになつてからのことである。其故女子の怠惰と美と富と云ふものは、分離すべからざる關係のあるものである。然るに野蠻時代にありては、斯の樣な經濟上の餘裕と云ふものがなく、特に食物を得るの途も不確實であり、生存競爭も甚だ激烈であつたから、女の勞働に從事するは止むを得ないとであり、隨て僕婢視して顧みられないのも亦自然の勢であつたのである。所が女子は斯くも多忙で困難で、如何にも哀はれな生活をなせしにも拘らず、彼等自身は吾々が想像するやうに哀はれとは感ぜなかつたのである。彼等は男女間の自然的分業を以て甘んじ、之に依て當時の社會的生活を遂行したのである。

原始時代に於ける女性の任務は、斯くも雜多であり且つ多忙であつたが、之に對して男性の職務は僅少であり、又甚だ怠惰であつたらうかと云ふに、元より男は女の從事した樣な仕事を嫌忌して顧みなかつたものであるから、之等の仕事に對しては怠惰でもあり、否無關係であつたので、其從事した所の仕事と云ふ者は全く僅少であつた。併しながら男は其任務とした所の少數の仕事に於ても亦怠惰であつたと云ふ譯では決してない。蓋し彼等の一たび戰爭とか狩獵などに從事するや、實に生命懸けの仕事であるから、奮鬪力戰甚だ努めたものであり、隨て其精力を消盡するや莫大なものである。其故彼等は其仕事を終はるや、何時でも疲勞甚だしく困憊の極、復起つ能はざるに至るものであるから、どうしても安座の必要あり、休息するの止むを得ざるものがあるのである。之に比べると女の仕事は一時に其精力を消耗するやうな激烈なものでないからして、始終絶へ間なく働くことが出來、徐ろに長く勞働するやうになつて居るも

のである。それは兎も角男の仕事は一體に激烈であり、冒險的のものであるから、女の仕事より一層目覺ましいものであり、他人をして驚歎せしむるに足るものである。要するに女の仕事は餘り目立たない、ジミな着實なものであるが、男の仕事は冒險的であり感動的である。隨て原始時代に於ては世人の注意と尊敬とを受けたものである。一體野蠻社會に於ける最初の道德なるものは、冒險的の所業であつて、勇敢とか活潑とか、又は怜悧とか巧妙とか、云はるゝ動作、又は不屈不撓の精神、死を見て恐れざる討死の覺悟等であつたが、之等の德行は獨り男子の實現し得るもので、女子の仕事に於ては不可能なるものであつた。要する原始的道德は男性的のもので、男子の所業が第一に社會の注目する所となつたのである。女子も亦之に對して其功績を承認し、同じく感謝尊敬の意を表したものである。古代猶太の小女は奏樂を以て凱旋の勇士を迎へ、又軍歌などを唱へて敬意を表したものである。

斯くて女の仕事は、男のやうに山野を跋渉したり、野獸を逐ふて馳驅し、所定めず飛廻はるのとは異り、隨つて餘り目立たないものではあるが、一定の所に住居し固定した生活を營む所からして、種々と平和的の業務に從事することとなり、耕作は固より製造なり工業の發達を來すことゝなつた。つまり男の仕事は漂泊的であるが、之に對して女の仕事は固着的である。又男の仕事は概して破壞的であるが、女の仕事は建設的である。それで原始時代に於てこそ、女の任務は餘り稱嘆せられなつたとするも、今日の文明時代に於ける製造なり工業の起原は、實に此の目立たない女子の勞働にあつたものであるから、吾々は永く原始時代に於ける女子の功績を忘却してはならぬと思ふ。そはさて措き當時女子の從事せし業務の主なるものを列擧して見やう。

第一、家庭の創設。男が漂泊的生活をなしつゝある間に、女は一定の場所に在て住居し、其爲に住家を建設したものである。尤も住家と云つた所で、原始時代のことであるから、穴を掘つたり、大樹の洞窟を利用したり、又は塵で蔽ふて造つた小屋に過ぎなかつたものである。斯く簡單なる住家ではあるが、固定的の生活をす所の女に取ては、特に子女を生み且つ之を養育するの任務を有つてゐた女に取ては、是非共必要なものであつた。時に斯のやうな住家が男の

手に依りて建設せられたことがあつても、之を所有し之を依持して行つたものは女であつた。なぜと云ふに男は常に外部で活動し、漂泊的生活をしてゐたし、又女のやうに他性に依屬する心に乏しかつたので、勝手に飛廻はり獨居的生活を營んで左迄苦痛としなかつた爲に、一定の所に落付て住居を所有し且つ之を依持するの必要を感ぜなかつたからである。

さう云ふ譯であるから、原始時代に於て女と云ふものは、自然に一家の長となり、主人となり、所有者と見做さるゝに至つたものである。爲に家と女は離すべからざる關係を生じ、殆ど同一視せらるゝの有樣となり、隨て母權制度も起つたのである。所で男は之に對して如何なる境遇にあつたかと云ふに、戰爭なり狩獵の結了した時、折々家に歸つて休息し、妻子と共に家族的の平和なる生活を營むやうになつてゐたものである。尤も元來男は活動的であり、殺伐なことを好むので、最初は餘り住家に歸らなかつたらうが、妻子の情に惹かされ、段々家庭により多くの興味を抱くやうになり、家族的團欒の樂を喜ぶやうになり、爲に屢々家に歸り遂には落付て家族の一人ともなり、又後には妻に代つて一家を司配するやうにもなり、所謂父權制度を來たすに至つたものである。要するに、野獸的なる男子を馴化(ドメスチケート)して、平和なる家族の一員たらしむるに至つたのは、實に柔和貞淑なる女の働であり、社會進化の上に於て特筆すべき一大功績と見做さるゝものである。然るに今日の文明社會に於ても、尙ほ野獸性を發揮し、內を外にして放縱極る漂浪生活を敢てする夫も少くないので、爲に男子の貞操問題も論ぜらるゝ次第であるが、抑も斯の如き夫を馴化し、家庭化して平和なる忠實なる家族の一員たらしむる責任と云ふか、否天職は實に妻たるものゝ肩に荷はれて居ることゝ、私は深く信ずるのである。そは兎に角原始時代に於ける女の職分は數多くあつたことであるが、その家を建て家庭を形造り、さうして子を養ひ夫を馴化したと云ふことは、在らゆる職分中にて最も主要なものであり、根本的のものであつたのである。

第二、食物の蒐集。既に家庭を形造り、子女を養育するに於ては、家族を養ふ食物を蒐集するの必要があるので、女は其爲に大に努力したのである。原始時代の女は食物のこと迄男の役介になり、全然依屬的生活をしたものであると

云ふのは大なる誤謬である。固より男は專ら狩獵に從事したから、動物的の食物は主として男に依りて捕獲せられ、又出產時に在りては男に依屬せざるを得なかつたこともあらうが、平常は女も子女を養育すると共に、植物性の食物を蒐集することには仲々努力したものである。最初耕作の途を知らなかつた時には、恰も猿や豕が地中より食物を堀り出すやうに、草木の根特に芋薯の如き塊根を堀り出して食料とし、熱帶地方の野蠻人では、現に「カサバ」と稱する植物の根を採取し、それから毒汁を取り棄て、さうして殘餘の部分なる澱粉で、パンを製造して食料に供して居る。其外には植物の種子や果實を摘み取て食料としたものであるが、天然物には限りもあり、思ふやうに採集することも出來ない所からして、後には人工を以て有用なる植物を植へ付け以て耕作に從事するやうになつたものである。現に「インヂアン、コーン」なるものは元來熱帶地方に產する野生の植物であるが、之を印度人が人工的に植へ付け、以て食料を得る途を開いたものである、斯くて女は植物を馴化するやうになつた。

今食物蒐集に關する男女分業上の長短に就て考ふるに、女の從事した植物の方面に於ける勞働は、男の從事した動物の方面に於ける勞働ほど、目勇ましいものでない、花々しいものではない。鹿を捕獲したとか、熊を射殺したなどゝ云ふ方が、根を堀り出したとか、果實を摘み取つたと云ふより、餘程勇ましいことである、興味の大なるものである。併し野獸を捕獲したり、狩獵すると云ふことは、何時でも成功すると決つたものではない。何分飛び廻つたり、時には牙を振り立てゝ逆襲して來ることもある動物を相手とするのであるから、往々失敗に了り何等の獲物もないと云ふやうなこともある譯であり、爲に食物を獲る途としては多少不確實なるを免れないものである。然るに之に反して植物の方面に於て食物を採集することは、容易でもあり又危險も殆どないと云ふべきものであるから、比較的に確實なる方法である。そこで女が男の獲得した食料品に依屬せし如く、男も亦女の勞働に依屬し以て食物を獲得したものである。尙ほ動物性の食物は一層美味を呈すべきも、植物性の食物を配合する必要もあり、又不獵の場合も屢〻起り得べければ、さう云ふ折には植物性の食物にても、大に美味を感じたこともあるのである。之を要するに食物の蒐集に於て、女は

男より決して劣てゐたものでない。

第三、家畜の飼養。野獸には限りあることであるから、絶へず狩獵を營んでゐると段々に減少し遂には獸肉を味ふことの出來なくなるものである。そこで原始時代のもの共は、野獸を飼養して之を馴化し以て家畜とするの工風を講じたものである。之は最初狩獵の際幼若なる動物を連れ來り、さうして之を寵愛し人爲的に飼養した經驗に基て起つたものである。而して之は固より男の連れて來たものであるけれども、多くの家畜の中で獨り猫のみは、早くから女の連れ來つたものであるとのことである。それは何の爲であつたかと云ふに、彼等の貯蓄して居る穀類をば、野鼠の侵害から防禦する手段としてなされたのである。今日と雖も相變らず猫は生きたる捕鼠器として、珍重せられて居るが、猫を馴化した最初の功績は女に歸する次第である。そは如何にあれ、一たび幼若なる野獸の連れ來らるゝや、之を撫育し飼養したものは、主として女であり、又實際之は女に最も適した仕事であつた。なぜと云ふに、之等の動物に對する男女の感情は大に違つてゐた。即ち男は之等の動物を見て哀はれに感ずると云ふよりも、曾て自分達は如何に勇敢に狩獵に從事せしが、又は如何に巧妙に捕獲する所ありしかを追懐し、兎に角殺伐なる心を起すものであるが、女は之に反して幼若なる動物に對するも、己が子女に對するやうな、女らしい優しい心、母らしい溫い感情を以てする所からして、同じく家畜を飼養するにしても、女は男と大に其趣を異にしてゐたからである。タヒチーや、ニューブリテンでは豕を飼て居るが、女は之に哺乳するとさへ云はれて居る。尙ほマソンの記るしてゐる所に依ると、現にエスキモー人や南方印度人間では、白狐を捕獲し其皮を剝く爲に之を飼養してゐるが、其世話は女の仕事とする所であり、プエブロー人は羽毛を取る爲に鷲や鷹を飼養して居るが、之れ亦女の任務であり、又マンダン人では女が馬を飼ひ、西北カナダでは犬を育て、ハワイでは池を堀り魚を飼つて居るとのことである。其外何れの地に至るも、吾々の生活上に最も必要なる乳や毛の供給者となつて居る、牛や羊の如き動物は皆女の關係して居るものである。斯樣にして女は植物を馴化したと共に、動物を馴化することを自分の任務とするやうになつた。

第四、種々なる家事、及び家具の製作。女は食物を調理することは勿論のこと、食物を料理したり又は保存する爲に必要なる、土器とか籠とか桶の類を造り、又水を運び薪を切り、穀物を臼搗き獸皮を革めし、糸を防ぎ布を織り、さうして衣服を作るに至る迄在らゆる家事に從ひ、且つ家具の製作を以て自己の任務としたものである。此點から云ふと、女は自然物を悉く皆馴化し、さうして家族の用に供したものであると云つて差支がないのである。今舊約聖書の中にある箴言の三十一章を開いて見ると、十節以下に、「誰か賢き女を見出すことを得ん、その價は眞珠よりも貴とし、その夫の心はかれを恃み、その產業は乏しくならじ、かれが存命ふる間はその夫に善事をなして惡き事をなさず、彼は羊の毛と麻とを求め喜びて手から操き、商買の舟のごとく遠き國よりその糧を運び、夜のあけぬ先に起ててその家人に糧を與へ、その婢女に日用の分をあたふ、田畝をはかりて之を買ひ、その牛の操作をもて葡萄園を植へ、力を以て腰に帶しその手を强くす、彼はその利潤の益あるを知る、その燈火は終夜き之ず、かれ手を紡線車にのべ、その指に紡錘をとり、手を貧者にのべ、手を困苦者に舒ぶ……」と、記述してあるが、之は原始的社會に於ける婦人の如何に勤勉に家事に努めしかを知るに足るものである。

第五、種々なる社會的業務。幾多の家庭的勞働の外に、(一)原始社會の婦人は、言語の發明者であり又傳播者であつた。之はどう云ふ譯かと尋ぬるに、彼等は種々なる器具を製造したので、一々之に名稱を附ける必要を有つてゐた、又之を其子女に敎へさうして使用せしめたので、追々男子も使用することゝなつたのである。それでメキシコ人の間で、婦人は最も良き字書であると言はれて居る程である。又男子は狩獵の爲奔走するので、互に談話する遑とて餘りないが、女子は家內に在りて相會し、さうして雜談に耽けることも容易なので、自然彼等はお喋べになり話上手になつたものである。さう云ふ譯で女子は言語の傳播者ともなつた次第である。(二)又彼等は宗敎家であつた、既に宗敎的情操の所で述べた通り、原始社會に於て或は死人を祭るとか、或は葬式を司るとか、神靈に祈願するなどゝ云ふことは、主として女子の任務であつたのである。(三)宗敎と聯關して別に女子の業務としたことは、病者を治癒する醫者の仕事である。

彼等は疾病を以て惡魔の所爲と考へたので、病者を治癒するは惡魔を驅逐するにありとなし、時として暴力を加ふることさへ試みたものである。そこで彼等は魔法使を以て目せられたものであるが、併し彼等は又植物に關する多少の知識からして、藥品を發見しさうして負傷の手當をしたり、發熱を減退せしむるやうな簡易なる治療を施したものである。

原始時代に於ける婦人の任務とせし所、大略前述の通りであるが、此のやうな分業と云ふものは、何時迄も永く繼續したかと云ふに、さうではない。周圍の事情は男をして女の仕事を執らしむるやうになり、隨て女は段々に己が勞働の範圍を狹ばむることゝなつた。然るに男は之れ迄狩獵や戰爭の如き破壞的の仕事に携つて、自然に養ひ來た才智を以て女の仕事に當ることゝなつたので、男は女に代て一層巧なる勞働者たるを得るに至つた。然らば如何なる事情の下に男をして女の仕事を執らしむるに至つたかと云ふに、男は絕えず狩獵に從事したので、何れの野蠻人間でも漸次野獸の減少を見ることゝなり、爲に男は段々に未開の地方に移住したものである。併し人々の增加は迅速である所からして段々と減少してゆく所の野獸を狩獵すると云ふやうな不確實な方法では、到底充分なる食物の供給を得る譯にゆかぬから、そこで男は動物に對する態度を一變して、新に動物を飼養して所謂牧蓄に從事するのみならず、其他種々なる女の仕事に立ち入りて之を試みることゝなつたものである。

斯くて男は從來の破壞的事業を中止して、女性的なる建設的勞働に從事することゝなつたものである。然るに男は元來活動的である所からして、其活潑なる精力をば新に建設的事業に注いだのみならず、從來の事業に於て鍛錬し來れる才能、特に協同的、組織的の才能を以て之に從事することゝなつたので、單に女子の携つてゐた時よりも、一層之を發展進步せしむることが出來た。一體狩獵や戰爭に從事する場合には、他の仕事と異り特に團體を組織して協同的の作業を營む必要あり、又命令を傳達したり之を服膺する必要があるので、どうしても種々なる訓練を經なければならないものである。そこで一たび男子が女子の仕事に從事することゝなるや、此協同的精神、服從的精神、組織的才能を應用することゝなつたのである。例令ば農業にしても女子のみ之に從事せし場

合には、小規模の耕作に過ぎず個別的にやつてゐたものが、男の之に從事することゝなるや、直に勞働者の協力を圖り組織を造つて、大規模のものとなし、叢叢は開かれ水利は講ぜられ、往來は通ぜられ着々面目を新むることゝなつたのである。其上に男は長い間武器を造つた經驗があるので、之を農業にも應用して耕作用の種々なる器具を新に工風し製作することゝなつたので、農業上の進歩を來したことは著しいものである。

之を要するに、吾々の社會は牧畜時代、農業時代、商工業時代と云ふやうな順序で、今日の文明生活をなすに至つたものであるが、此間に男子は段々と女子の仕事に關係するやうになり、遂には農業なり商工業は勿論のこと、全然女子の任務たりし料理や裁縫に至る迄、男子の從事する所となり、爲に專門の料理人や裁縫師も出來、而かも其技術や遙かに優秀である所からして、之等の仕事を女子の手から奪ひ去ると云ふやうな狀態になつたのである。そこで女子の任務は漸次減少し、遂に一般には單に家庭内に在りて、家事なり育兒にのみ從事することゝなつたものである。それで長い間一般に、男は外部に出でゝ諸種の業務に從事し、女は家内に止りて家事に勤しむと云ふやうに、判然たる分業を確立するに至つたものである。然るに近世に於ける商工業の發達は、再び女子をして諸種の勞働なり職務に從事せしめることになつたが、何分其日尙ほ淺しと云ふべきであるから、女子は種々なる社會的業務に就て、未て習熟する所がない、經驗する所が少い、隨て自然體力から云ふても、才能から云ふても、技倆から云ふても、女子は仲々男子に及ばないものである。併し之は已むを得ないことで、私は寧ろ當然のことゝ思つて居る。所が若しも女子の知能は教育や境遇の改善に依て、大に發達せしめらるゝものとすれば、女子の意力なり實務的才能と云ふものも、練習により經驗により漸次發達を來たし、遂には男子と相拮抗するに足るものとなり得べきは必然のことゝ考へらるゝのである。

さう云ふ次第であるから、よしや今日女子の意力なり實務的才能と云ふものが、大に男子に劣る所ありとて、之を以て直に女子の價値を決定するは大早計のことであると私は信ずるものである。一體女子は從來の慣習や境遇の男子と異る爲に、自然體力は弱く經驗には乏しく、且つ才能の劣たるものとなつて居

るにも拘はらず、直に體力も旺んであり經驗にも富み、特に才能の優れて居る男子と同樣に取扱はれ、何等の斟酌もしないで比較せらるゝと云ふは、實に酷も亦甚だしいものであると云はなければならぬ。それであるから、私は女子をして實務に從事せしむるに當つては、女子には女子相當の取扱なり、監理なり保護を與ふべきものであると思ふ。然るを女子が實務に就たからとて、直に男子と同樣に取扱はれ、特に男子が男子の爲に設けた所の事情の下に、同樣に勤務せねばならぬと云ふは、而かも女子の男子に劣る所ありとて、種々に非難したり攻擊などするは、非常に間違つたことである。例令ば女教員にしても、教員だと云ふので直に男教員と同樣に、否男子が男教員の爲に作つた服務規律の下に執務せしめ、さうして男子と同樣の成績を擧げしめやうとし、さうして聊でも缺點があつたり、男子に及ばぬ所があると、直に女教員無能論の聲が高くなり、さては女子師範廢止の議論さへ起るに至るは、實に其當を得ないことであり、女子に對して不公平な處置を取てゐるものと思ふのである。又女子にしても單に劣等視せられ、無能者と見做さるゝばかりなら、左迄のこともなからうが、餘り過度の勤務勞働に從事する所からして、不知不識健康を害し精神力を消耗するに至りつゝあるは、眞に憂慮に堪へないことであり、識者の等閑に附すべからざるものであらうと思ふ。近來歐羅巴に於ても、商工業の發達と共に神經衰弱とか精神病に罹るものが、段々に增加しつゝあるが、其增加の割合が女子に餘計になつて居るさうである。其故エリスも今日の勞働社會に於ける四大缺點を擧げ、長時間の勞働、寡少なる勞銀、それから不規律と非衞生的境遇は、特に女性勞働者に危害を釀すことの甚だしいものであるから、どうしても女性勞働者に對しては、特別なる注意と保護を與へなければならぬことを極論して居るが、是非共さうなければならぬことゝ私も思ふのである。

之を要するに、女子には女子相應の取扱なり保護を與へたならば、彼等とても亦相當の成績を擧げ、妄に劣等視せられ無能視せらるゝこともなからうと思ふ。斯くて漸次體力を養成し、同時に業務にも慣れ經驗を積むに至らば、よしや男子と全然同じやうな狀態に達せずとも、左迄劣らない否殆ど相拮抗するに足るものとなり得ることは、毫も疑惑の餘地を存せざることである。現に米國

の婦人は諸種の業務に從事して、立派に成功しつゝあることは、誰しも能く承知して居る所である。私の曾て彼地に留學中知合となつた婦人中にも、牧師あり、醫師あり、大學校長あり、教授あり、小學校の教師あり、圖書館の書記あり、商店の會計あり、而して何れも相應に其地位を保ち、有髯の男子と相拮抗して何等遜色なき有樣であつた。又歐羅巴に於ても今次の大戰爭は、婦人の活動をして益〻旺盛ならしめ、爲に漸次從來男子の專有に歸したる諸種の職業に迄侵入し、而かも着々其功を奏し男子に比して毫も劣る所なきことを實際に證明しつゝあるやうである。思ふに將來の世界は何れの方面に於ても、益〻婦人の活動を要するに至るべければ、隨て婦人の體力なり、意力なり技倆も亦益〻進歩して止まないことであらう。婦人に教育と境遇を與へよ、然らば彼等も凡ての點に於て、男子と大差なきに至るべしとは私の持論である。

第十四章　女性と犯罪

女性の有する意志の特質なり、職業上の實際的才能に就ては、大略說明した次第であるから、更に方面を變へて稍〻變態心理に屬する、犯罪と自殺に就て男女を比較し、以て女性の有する意志の特質を穿鑿しやうと思ふ。

第一、犯罪者の數。先づ犯罪に就て、男女間の性的差異を調査しやうとするに、之は仲々容易なことでない。何故と云ふに、法律は國々に依りて異り、又其法律を勵行する寬嚴の度合も一樣でないのみならず、裁判官や警察官の處置も一々信用せられないやうなこともあるので、彼等に依て與へらるゝ材料や事實に基いて、斷言を敢てすると云ふことは、餘程大膽な話であつて自然誤りの多いことゝ思ふからである。併しながら犯罪的又は非社會的意志と云ふものは、男性に於けるより、も女性に於て微弱であると云ふことは、殆ど何等の疑念をも挾むことの出來ない事實であるやうである。ロンブローゾの著述にして、斯學の權威と認むべき「犯罪論」にも、次のやうなことが言ふてある。曰く「凡ての統計

は女性犯罪者の男性犯罪者より著しく少數なることを示めして居る。若し殺兒罪をば普通の犯罪以外に置く時は、更に其事實の顯著なるを知るべし」と。今ロンブローゾの擧げて居る犯罪者の統計を參考するならば、

地名	男（百分比例）	女（百分比例）	女一人に對する男數
伊太利	八四、一	一五、九	五、二
英吉利	七九、〇	二一、〇	三、八
丁抹、那威	八〇、〇	二〇、〇	四、〇
和蘭	八一、〇	一九、〇	四、五
白耳義	八二、〇	一八、〇	四、五
佛蘭西	八三、〇	一七、〇	四、八
墺太利	八三、〇	一七、〇	四、八
バーデン	八四、〇	一六、〇	五、八
普魯西	八五、〇	一五、〇	五、七
露西亞	九一、〇	九、〇	一〇、一
ベイノス、エイルス	九六、四	三、六	二七、一
アルゼリア	九六、二	三、八	二五、〇
ヴイクトリア	九一、七	八、三	一一、〇
ニユー、サウス、ウエールス	八五、五	一四、五	一五、八

卽ち男性犯罪者の數は、最も少い所でも女性犯罪者の四倍弱に當り、最も多い所では二十七倍强にもなつて居る。又平均して見るに、女性犯罪者は犯罪者全數の百分中一四・一に當つて居るから、男性犯罪者の數は女性犯罪者の約六倍に當ることゝなつて居るので、要するに女の犯罪者は比較上著しく少數なることが分かる次第である。然るに近年歐米に於て非常に增加しつゝある、少年犯罪者に就て男女の數を比較して見るも、やはり男兒の方が多數を占めて居るやうである。之に就ても種々なる統計が出來て居るが、今千八百九十年に於ける米國の調査を參考として擧げるならば、

犯罪の種類	總數	男兒	女兒	女兒一人に對する男兒の數
殺人	二九〇	二三二	五八	四
破廉恥	四〇六	二一三	一九三	一、一
窃盗	四八四七	四一三六	七一一	五、八
詐欺、浮浪	一五六五	一二六〇	三〇五	四、二
兩親に不從順	一三三三	一〇五五	二七八	三、八
其他	一四八	一三八	一一	一二、五

之に由て見るも不良男兒の數は、不良女兒の五倍强になつて居るので、要するに犯罪者の數は年齢の如何に拘はらず、男性に著しく多いことが證明せられる譯である。

第二、女性犯罪者の少數なる理由。然らば何故に犯罪は女子に於て少數であるかと云ふに、モリソンは其著「犯罪及び其原因」と題する書物の中に、之に就て次のやうな種々なる理由を擧げて居る。即ち、一女子は男子よりも一層道德心に富んで居る。特に母として子女を養育すると云ふことは、女の最も大切なる義務となつて居るので、爲に子女をして絶えず愛他心を旺盛ならしめ、それが遺傳的に本能のやうになつて居る所からして、自然に女子をして犯罪から遠からしめて居るものである。(二)女子は一般に腕力に乏しく體力の弱いものであるが、之も亦女子をして犯罪を減少せしむる原因となつて居る。なぜと云ふに犯罪の中でも他人を毆打することか、又は强盗に押入るなどゝ云ふことは、仲々腕力なり暴力を必要とするものであるから、到底かよわい女子の敢てし得る所でない。それで女子の犯罪と云へば、腕力なり暴力を要しない、毒殺とか子殺しとか墮胎とか云ふやうな種類のものに於て多數を占めて居るのである。(三)女子は屢々犯罪の教唆者となり煽動者となり、尤より犯罪に關係するが、單に蔭にあて尻押をするに止り、實際に之を敢行しないことの多いものであるから、自然所罰を免れて居る次第で、爲に犯罪の數も少くなつて居るのである。盗賊の仲間が協力して仕事をする場合に、女子も亦其準備的の行動に加はつたり、又は掠奪品を處分する場合には與て力あるものであるが、實際に盗賊の所業に加は

らないので、獨り男子のみが所罰せられることになつて居る。又女子が餘りに虚榮心に驅かれ、美服を裝ひ贅澤なる生活を憬がれる所からして、其夫をして犯罪を敢てせしめるやうなことにもなるので、犯罪の原因は女子にありながら、獨り男子のみをして刑罰に觸れしめることになつて居るのである。(四)女子の社會的狀態も亦與つて大に力あるものである。即ち從來女子は何れの國に於ても、主として家を治め子女を育てることを以て其任務としてゐたからして、家族以外に於て活動することの殆どなかつたもので、隨て女子をして犯罪を敢てするの機會に逢遇せしめなかつたものである。然るに近代歐羅巴の婦人は一般に經濟上の獨立を圖り、男子と同じやうに商工業に從事するもの丶益々增加する傾向を生じ、甚だしきに至ては政治運動にも關係するやうになつて來たので、自然犯罪者の數は追々と增加する有樣となつて居る。それで女性犯罪者の最も多いのは、工業の最も盛んな蘇格蘭で、其反對に最も少いのは、工業の最も微々たる希臘である。其故女子の獨立的生活と犯罪者の數とは、全く正比例をして居る次第である。以上四個の理由で略ぼ盡きて居るやうに思ふけれども、尙ほ此外にエリスの擧げて居る理由をも加へるならば、(五)女子は母としての任務を有つて居る所からして、人生に一層親しい關係を有つて居るのみならず、兼て感動性の强いものであるから、非社會的であり又尋常ならざる行爲を敢てすることは、女子に於て有機的に困難なことになつて居るのである。(六)又女子の臆病なることは、女子をして容易に犯罪を斷行せしめないものである。一體女子の臆病は生理的に、即ち神經——筋肉系統に基礎を有つて居るものであるが、其爲によし犯罪的衝動が起つたりしても、容易に之を實現するに至らしめない。特に犯罪的衝動の爲に惹起された、血管——運動系統の擾亂、動搖に依てすらも、之を實現するに困難ならしむるものである。要するに犯罪的衝動は、そが行爲となる前に情緒の中に消滅して了ふやうになつて居るのである。(七)尙ほ犯罪でも敢てしやうとする病的の婦人は、往々娼婦となつて居るものであるが、娼婦となることは必ずしも常に犯罪を伴ふと云ふ譯ではないから、自然女性の犯罪者をして少數ならしむるものである。娼婦に墮落することは女に取て悲むべきことではあるが、それが併し犯罪に陷ることを防禦することゝなつて居る次第

である。

第三、女性犯罪の種類。女性犯罪者の數の比較的に少數なる理由は、以上の說明に依て了解せられる譯であるが、更に進んで女性の犯罪は如何なる種類に於て、最も容易に起り易いものであるかと尋ぬるに、ロンブローゾの揭げて居る、伊太利で調査したレンコロニーの統計は、明確に之に答ふるものである。

犯罪	一年間平均數 男	同上 女	男百人ニ對スル女ノ數
國事犯	九、二	〇、六	六、五
僞書罪及ビ商業上ノ犯罪	三四五、八	二四、〇	六、九
浮浪罪	一一四、六	一、〇	〇、八
色慾罪	二五一、〇	一五、六	五、一六
墮胎、殺兒罪	一〇、八	（五一、六）	（四七六、八）
殺人、謀殺罪	一四四、〇	四九、二	三、四
毒殺罪	四、四	（五、四）	（一二二、七）
毆打、脅迫罪	八九九、二	三四、二	三、八
辻強盜罪	四七三、二	五、八	一、二
竊盜罪	九一〇、八	六〇、八	六、六
詐僞罪	二二、八	一、四	六、三
盜品受領罪	九二、二	（一八、六）	（二〇、二）
放火罪	四二、二	（三、八）	（八、六）

此表に據れば、女性犯罪の比較上最も多數なるは、墮胎や殺兒罪であり、之に次ぐものは毒殺や盜品受領罪、それから放火罪等である。依てロンブローゾも之等四種の犯罪をば、女子の性質に最も關係あるものと認定して居る。之に反して、浮浪罪や辻強盜や殺人罪や毆打罪などは、女性犯罪の中で最も少數なるものであつて、女子の性質には到底適當しないものである。

女子は元來愛情に富み隨て子女を愛撫するは、其本能と迄云はれて居るのになぜ墮胎や殺兒罪が女子に多いのであらうか。一般から考へたならば、幼兒を

殺すなどゝ云ふ殘忍な所業は、到底女子に出來さうに思はれない次第である。併し子女を生み且つ之を養育する直接の責任は女子の側にあるから、女子は姙娠した場合又は出產した場合に、善かれ惡かれ自分自身何とか子供を處分せねばならぬやうになつて居るものである。然るに若しも正當なる結婚に依らずして、私通野合の結果私生兒を姙娠したとか、出產したとか云ふやうな場合に、多くの女子は羞恥の餘り如何にもして其非行を蔽はんと思ふ所からして、是非を顧るの遑なく遂に此種の犯罪を實行するに至るものである。其外生活上の壓迫、子女養育の困難に加ふるに、男子の無情にして何等の救助を與へないとか、又は男子に强迫せらるゝやうな場合に、特殊の境遇は遂に女子を驅りて之等の犯罪を敢てせしめることになるものである。

尙ほ毒殺も亦女性犯罪の最も顯著なるもので、曾に近世に於て然るのみならず、遠く希臘の時代から屢々女子の試みし所である。然らば何故に毒殺は女子に多いかと云ふに、一體女子は腕力を缺いて居るので、公然腕づくで爭ふことの出來ない所からして、自然毒殺の如き陰險にして狡猾なる手段を取るに至るものであつて、明かに女性的特色を現はして居る次第である。又盜品を受領し之を賣買するのも、直接に自分自ら强盜は勿論竊盜の犯罪をも實行しないで、私かに男子の犯罪を補佐するやうなもので、狡猾な仕打であつて、之れ亦女子の性質を現はして居るものである。更に放火の如きも、直接に又公然怨を晴らす勇氣を缺ぐ所からして、他に陰險なる手段を取るものであり、又毫も腕力なり努力を用ゐないで、非常なる結果を獲得せしめんとする狡猾な方法を求める所から起るものであつて、つまり女性の特色を發揮したものである。

更に犯罪者の年齡に就て男女を比較して見るに、女子は元來男子より早熟であつて、身體も精神も早く發達するものであるけれども、犯罪では例外となり男子よりも比較的に晩成である。男性犯罪の最も多いのは、通例二十歳から二十五歳位の時で、女性犯罪の最も多いのは、三十歳から三十五歳の頃だと云はれて居る。千八百八十六年に以多利で調査せられた統計は能く此事實を證明するものである。

年齢	犯罪數の百分比例男	同上女
一四以下	一、二九	一、四一
一四—一八	六、〇四	六、〇二
一八—二一	一三、二九	一〇、〇五
二一—三五	四六、九一	三九、三八
三五—五〇	二三、二九	三〇、九四
五〇—七〇	八、四〇	一一、六三
七〇以上	〇、六八	〇、五七

女子に在りて最も犯罪の多いのは、三十歳から三十五歳の頃だとすると、之は比較上女性犯罪者の既婚者に多いことを示めすものであると、認定するの充分なる證據になるのである。然らば何故に女子に在りては、未婚者よりも既婚者に、一層多くの犯罪者を出すやうになつて居るものであるかと云ふに、何も結婚が直接に犯罪の原因となつて居る譯ではないが、女子は結婚して家庭を組織した場合に、夫婦間の衝突とか不和とか、種々事件を生じ易いので、自然さう云ふことになつて居るのではあるまいか。一體從來の女子は多く家庭にのみ立籠つて、男子のやうに社會的活動を執らないものであるから、隨て犯罪も主として家庭的のものとなり、爲に久しい前から、女子は家庭的犯罪者であると迄云はれて居る次第である。斯樣に女子は家庭的犯罪者であるとすると、その既婚者に多いのも亦偶然のことでない。尚ほ此外に女子の數は壯年期に於て最も多數を占むるから、自然犯罪者も多いのではないかとも云はれて居る。

第四、再犯の多少。再犯に就て男女を比較して見るに、之も著しく女子に少數である。之に關する佛國の統計を見るに、

年數	犯罪數の百分比例男	同上女
一八五一—五五	三六	一六
一八五六—六〇	三〇	一六
一八六一—六五	四二	一七

一八六六—七〇	四五	一七
一八七一—七六	五一	一九
一八七七—八〇	五三	二一

再犯者の數は漸次增加して居る傾向を示して居るけれども、併し女子の再犯者は著しく少數である。然るに獨逸の統計を見るに、千八百六十九年に男の再犯者は、全犯罪者の百分の七一て、女の再犯者は百分の六五てあつたものが、千八百七十五年には、男で百分の七九、女で百分の八四と云ふやうに、却て女に多數となり、爾來男女間に殆ど差別なきことになつて居る。之等の事實は如何に說明すべきものであらうか、元來女子に犯罪の少い理由は、又再犯の少い說明にもなる譯だが、女子は一度所刑てもされると、大に後悔し改心して再び犯罪的行爲を敢てしないものであり、男子程惡事をなすに大膽てないことが其原因となつて居るやうに思はれる。然るに近來女子に在りても、再犯者の數を增すやうになつたのは、如何なる理由に基くかと云ふに、ケルと云ふ人の說に據ると之は飲酒の爲らしい。なぜと云ふに、女子は概して酒に弱いから、醉ひ易ひ又醉へば狂ひ易いので、亂醉とか醉狂とか云ふことては、女子に再犯者を一層多く出す次第である。

第五、尙ほ女子の獨立的生活と犯罪との關係に就て見るに、元來女子に犯罪の少い一つの理由は、既にモリソンも擧げて居るやうに、概して家庭生活を營み經濟上の獨立を企てないことにあるのであるから、若し女子にして生活難や結婚難の爲に、會社とか工場に働き、さうして獨立的生活を計るやうになれば、自然犯罪者の數を增加するやうになるのは、當然なことて何も不思議とする所はない。同じ歐羅巴に在りても、蘇格蘭は最も多く女性の犯罪者を出して居るさうてある。一體蘇國の人民は古風な堅實な眞面目な性質て、宗敎心にも厚く風俗も至て純撲てあつたものてあるが、製造なり工業が盛んになつて、女工が增加するやうになり、而かも賃銀は安く又監督も行屆かぬと云ふ有樣てあるから、特にグラスゴーなどては、女性の犯罪者が多いとのことてある。既に揭げた所の、ロンブローゾの統計に據れば、女性犯罪者の數は平均百分の一四强て

あるが、蘇國では千八百八十年に百分の二七で、千八百八十八年には百分の三七になり、實に異數とする所であり、又漸次增加しつゝある傾向を示めして居る。そこでモリソンも、女子は職業的生活に入れば入る程、益々犯罪者の數を增すものであると斷言して居る。斯くて蘇國に次では獨逸・英吉利・白耳義・和蘭・丁抹・那威・露西亞・西班牙と云ふ順序で、希臘では最も少數である。尙ほ北米合衆國でも同樣の事實を認めることが出來る。米國で犯罪的統計の權威と稱せらるゝ、ワイン博士の調査に據ると、工業の盛んな大西洋沿岸の諸州では、他の諸州よりも著しく多數の女性犯罪者を出して居ることが分かる。卽ち新英州なり紐育州等大西洋方面の十八州では、女性犯罪者の數が百分の十二であるが、他の三十五州では僅に百分の四に過ぎないことになつて居る。さう云ふ有樣であるから、女性の體質なり精神的特質は、女子をして犯罪から遠からしめつゝあるにも拘らず、近代的生活の傾向は漸次女性犯罪者の數を增加せしめつゝある譯で、又止むを得ぬことゝは云ひながら、實に寒心すべきことゝ思ふので、吾々は適當なる社會政策を講じ、大に救濟の途を計らねばならぬことゝ思ふのである。

以上種々なる方面から女性的犯罪の特色を說明したが、多少重複の嫌はあるけれども、參考の爲ロンブローゾの下せる結論を擧げやうと思ふ。

(一)女性犯罪者の數は、男性犯罪者の四乃至五分一に當るが、若し單に重罪のみに就て云ふなら、僅に六分一にしか過ぎないものである。

(二)女性犯罪者の數は、壯年期に於て最多數を占めて居る。

(三)女性的犯罪は、餘り體力や知力を要しないものに多い。

(四)體若い時には、男女共に不意に激發する憤怒の情から犯罪を敢てし、大人になつては、豫め熟考を要するやうな犯罪を行ふものであるが、女性に在りては大人になつても、謀殺や殺人及び放火を敢てするものである。

(五)犯罪の數は、何れの國に在りても男女共に、概して固定して居るものであるが、伊太利では重罪は男性間に減少し、女性間に增加しつゝあり、又輕罪は男女何れの間にも增加しつゝあり。

(六)女性犯罪として顯著なる幼兒殺や墮胎は、開けた國程、古い習慣に依ると云ふよりも、一層餘計に羞恥心から實行せられて居るやうである。

(七)都會的生活が犯罪者を增加せしめて居ることは、女子に於て一層著しいことであるが、特に毆打・强盜・窃盜などが增加しつゝある。

(八)淫賣婦となることは、女子に在りては犯罪の代はりとなるものであるから、自然女子の犯罪をして少數ならしむるものである。所で女子の老年になりても、比較的に犯罪の多い譯は、最早淫賣婦となることが出來ないからである。

第六、最後に女性犯罪の原因・動機に就て一言しやうと思ふが、之れ亦能く女性の特色を現はして居る。今ロンブローゾの著「女性の犯罪者」に據り、女性的犯罪の主なる原因を擧げて見やうと思ふ。

(一)女子は一般に虛榮心に富み、爲に衣服なり裝飾品を欲求すること甚だ熱烈である所からして、知らず識らず現品を盜むか、又は盜品を賣却して裝飾品を購入するの資とするに至るものである。一體女は男と異り、自己の粗服なり質素な身形りを恥づること著しく、隨て美服なり裝飾品に對して堪へ難い欲望を感じ、之が女に取て强大なる誘惑となるものらしい。加ふるに女は比較的に權利とか責任とか義務などゝ云ふ觀念に乏しいものであり、自然財產と云ふ觀念にも薄い所からして、拾取物を屆出ないで、直に自己の所有とするはまだしも、屢々商店に出入して窃盜なり、所謂萬引を敢てするに至るものである。下婢が主家の物品を盜むも此の爲て、田舍から都會に出て來ると、見るもの觸はるものが、悉皆彼等の心を動かす誘惑となり、加ふるに給金も充分でないので、自力で以て其欲望を滿足させる譯にゆかないから、遂に盜心を起すに至るものである。タルノースキーの調査によると、女性窃盜の八十三「パーセント」迄は、手癖の惡い下婢の犯罪であると。然るに此種の犯罪は單に無敎育な賤しい身分の下婢にのみ限るものでない。佛國巴里で有名な大商店「ボン、マルセ」での話では、此店で萬引する女性の二十五「パーセント」は常習的に盜癖あるもので、他の二十五「パーセント」は、貧乏から起る普通の窃盜であるが、殘りの五十「パーセント」は立派な身分ある淑女の一時の出來心から起る犯罪であるとのことである。上流の淑女は何も金錢に缺乏して居ると云ふ譯ではないが、美はしい裝飾品などを見ると目も眩するばかりて、爲に抑へ難い誘惑を感じ、遂に思はず犯罪者たるに至るものである。

(二)女性は被暗示性に富んで居る所からして、其情人なる時としては親兄弟から、強迫せられ使嗾せられた場合に、嫌々ながら本心にないことを敢てするに至るものである。それで往々自分には何等必要もない物を情人の爲に盗み取るとか、又特に墮胎は其教唆に依て敢行せらるゝものである。ロンブローゾは、墮胎の多數は男の暗示に基くと云ひ、ジゲールは、墮胎は殆ど凡ての場合に於て、女のみの行爲でなく、男の之を強迫するに依ると云ふて居る程である。尚ほ情人の教唆によらずとも、女子にして其姙娠したことに氣付、而かも出產を避けたいと思ふやうな時に、其友人とか知合のものが、自己の經驗から墮胎の實行を使嗾し、其途に長けたる產婆を周旋すると云ふやうに、種々勸誘盡力するので、遂に心にもないことを敢てする場合も少くないとのことである。又以て女子の意志薄弱にして、著しく依他的なることを知るに足ることである。

(三)女性の感情的なることも其一原因である。(イ)殺兒罪は主として女子の羞恥心に基くことは、既に述べて置た通りであるが、之は私生兒に對する世人の態度に依て增減するやうである。卽ち田舍の一般に物堅い地方では、私生兒を輕蔑することの大なるものであるから、自然墮胎も多く、之に反して都會では左程に輕蔑もしないのみならず、田舍に於ける如く目立たないので、爲に墮胎も少いとのことである。ロンブローゾの擧げて居る統計に依ると、

國	年	犯罪者數田舍	同上都會
佛蘭西	一八五一—五	三二	三五
同	一八七五—八	二一	二二
以多利	一八八五	三四	一七
同	一八八六	四〇	一九
同	一八八七	三二	一八
同	一八八八	三七	二〇

(ロ)嫉妬心の女子に強いこと、少くとも嫉妬心を惹起さゞるを得ざる機會の女子に多いことは明かな事實であるが、その爲に女子をして、其夫とか又は夫の情婦を殺害せしむるに至ることも少くない。之に就てロンブローゾは次のやう

なことを言ふて居る。曰く「之等の犯罪者は元來善良な婦人であるけれども、自分の幸福は傷害せられ其爲に得たる他人の幸福を見ると、憤怒の情に堪へないで嫉妬心の烈げしい爆發を生じ、遂に犯罪を敢行するに至るものである」と。又餘りに虐待せられたり、過度に侮辱せられたやうな場合にも、平生のたしなみも打忘れ、一時に逆上して其夫を殺害するに至るのも、往々見受けらるゝことである。要するに女子に在りては、愛情—憤怒—怨恨—嫉妬の情は相連關して發生し、其極抑制し難い程の激情となり、遂に女に不似合な暴行を敢てするに至るものである。(八)又子女に對する母たるものゝ愛情も、往々婦人をして種々なる罪惡を犯すに至らしむるものである。或は家貧にして子女の學資を得る能はざる場合、又は充分なる食物を給與し難い場合に、全然子女の爲めに窃盗を犯すやうなこともあり。或は夫の他に情婦ある爲に、自分に對する愛情も自然薄らぎ、將に棄てられんとするに際し、自分の不幸は兎も角若し夫の情婦にして一たび公然後妻たるに至らば、其子女の悲境に陷るや明かなるを以て、寧ろ子女の幸福の爲に、其情婦を殺害するに至るが如きは全く母たるものゝ愛情か

ら起たものである。

(四)女子に「ヒステリー」多きこと。「ヒステリー」は從來女子に特有の疾患であるかのやうに、云はれた程女子に多いのは、今更説明を要しないことである。て「ヒステリー」に罹つたり、又は「ヒステリカル」な婦人は、如何なる精神的徴候を示めすものであるかと云ふに、其最も著しい點を擧げるなら、彼等の受感性は鋭敏となり、爲に些細なことに依りて刺戟され、以て或は喜び或は悲しむと云ふやうになり、或は一寸したことにも癇癪を起し、喧嘩爭論を敢てし、或は暴行の制止すべからざるやうにもなり、總じて禁止作用の缺乏を來たすものである。又注意の集注力を失ひ、爲に心の動搖を來し、特に氣分の變化すること迅速で或る瞬間には何事にも不平を抱き怒り易いが、次の瞬間には莞爾として笑みを呈すると云ふ有樣である。又被暗示性著しくなり、模倣的動作に富み、反射的に無意的行動を呈するに至るものである。婦人は往々斯樣な疾患に罹るものであから自然犯罪的行爲に陷り易くなるものである。特に虚言を弄したり、僞證や窃盗や殺人等も敢てし、又は色情亢進の爲に姦通をも行ふに至るは、「ヒステ

リカル」な婦人に能く見受けられることである。要するに女子は一般に、「ヒステリー」に罹り易い所からして、それが種々なる犯罪の原因にもなるものである。尙ほ婦人は月經中に、往々「ヒステリカル」な精神的徴候を呈するものであるから、能く犯罪を敢てするものである。ロンブローゾは、曾て巡査に抵抗したり、又は毆打罪の爲に拘引せられたる、八十名の婦人中僅に九名を除き他は悉皆月經期中にあつたことを發見したと云ふ位である。其故平素から「ヒステリカル」な婦人であると、月經期中には特に犯罪を敢てする傾向を有つて居るものである。ロンブローゾも斯樣な場合に、窃盗や放火は最も普通に起る犯罪であると云つて居る。

第十五章　女性と自殺

第一、自殺者の數。之は男女何れに多いかと云ふに、之れ亦犯罪者の場合と同じやうに、男の方に著しく多數である。之は佛國で有名な精神病學者なるエスキロルの夙に言明したことであるが、エリスは綿密なる統計を作つて、其事實なることを確めて居る。今參考の爲次にその統計表を掲げることにした。

地名	年	百人中男	同上女	地名	年	百人中男	同上女
佛國	一八二七—八〇	七七	二三	墺多利	一八七六—七七	八三	一七
同	一八八六	七九	二一	匈牙利	一八五一—五四	七二	二八
パリ	一八四九—五四	六八	三二	瑞西	一八七六—八三	八六	一四
ロンドン	一八五八—五九	六九	三一	白耳義	一八六五—八三	八四	一六
同	一八九一	七六	二四	和蘭	一八七五—七九	七八	二二
英吉蘭	一八五八—五九	七三	二七	丁抹	一八三五—五六	七五	二五

同	一八九一	七五	二五	同	一八六一—八六	七八	二二
愛爾蘭	一八七四—八三	七三	二七	那威	一八六六—七三	七六	二四
蘇格蘭	一八七七—八一	七〇	三〇	瑞典	一八六五—八二	七八	二二
北米合衆國	一八六〇	七九	二一	フインランド	一八七八—八三	八一	一九
ニューヨーク	一八七〇—七二	七八	二二	露西亞	一八七〇—七四	八〇	二〇
普魯西	一八五〇—五二	八二	一八	伊太利	一八六七	八一	一九
同	一八七二	八〇	二〇	同	一六七四—八三	八〇	二〇
同	一八八九	七九	二一	西班牙		七一	二九

之に據て見ると、男女の自殺者を比較して、男性自殺者の最も多いのは瑞西であつて、女性自殺者の六倍强に當つて居る。而して最も少いのは西班牙であるが、それでも二倍半に當つて居る。で平均した所三乃至四倍になつて居る。何故に西班牙の女は他國の女に比較して、斯くも多數の自殺者を出して居るかと云ふに、モルセリは其原因をは彼等の激情に歸して居る。そは兎に角女性自殺者の比較的に少數なることは、世界各國何れに於ても同樣である。

然るに少年自殺者の數は、少年犯罪者の場合と同じやうに、何れの國に於ても、近來漸次增加して居る傾向であるが、之もやはり男子の方に多數の自殺者を出して居る。今英國で千八百八十六年の頃に調査した、オーグルの統計表に據るならば、次のやうになつて居る。

年齡	女	女百人ニ對シテ男	年齡	女	女百人ニ對シテ男
一〇—一五	一〇〇	一三三	四五—五五	一〇〇	二六三
一五—二〇	一〇〇	(八七)	五五—六五	一〇〇	三三三
二〇—二五	一〇〇	一八二	六五—七五	一〇〇	三四九
二五—三五	一〇〇	二三六	七五—八五	一〇〇	三六〇
三五—四五	一〇〇	二八二	八五	一〇〇	四九一

即ち十歲から十五歲の間に於ける、所謂少年期に於ても、其他の年齡に於けると同樣に、男性自殺者は常に多數を占めて居るが、たゞ獨り十五歲から二十

歳の頃では、却て女性自殺者の方多數を呈して居る。之は何れの國に於ても認めらるゝ事實であつて、つまり女子に於ける早熟の然らしむる所と見做されて居る。蓋し女子の成熟は男子より少しく早くて、十五六歳の頃にもなると、急に著しい發達を遂げるので、自然自殺も早熟になるのである。特に此時期に於て、若氣の至りで不身持なことでもあつて、其結果姙娠などした場合に、之を恥ぢて自殺を敢てするやうな隱れた事情も、亦其原因となつてはゐないかと思はれるのである。そは兎も角此の時期は例外であつて、概觀した時には、女性自殺者の數は男性自殺者に比し、著しく少數であることを認め得る次第である。

第二、女性自殺の少き理由。然らば何故に、女性間に自殺者の數は少いのであらうか。之にも犯罪者の場合と同じやうに、何等かの理由がなければならぬ。エリスの說いて居る所に據りて、其原因と思はるゝ事情を擧げて見やう。

(一)女は生存競爭に於て男程に難儀しないと云ふこともあるし、又男よりも一層容易に如何なる生活狀態にも適合し得る性質を有つて居る。加之女は男よりも一層犧牲の念に富み、且つ如何なる悲運にも諦め易い性質を有つて居るし、又宗教心にも厚く、世間の評判をも懸念するものであり、特に又飲酒の習癖も少い所からして、自然自殺でもしなければならぬやうな有樣に陷らないものである。

(二)然るに或は思へらく、なる程女性自殺者の數は少い、之を男性自殺者の數に比べると、著しい相違を現はして居るのは事實であるが、併し女の方が所謂氣が小さく量見が狹いので、些細なる出來事からして、いつそ自殺でもしたらと云ふ心を起し易いものであるから、さう云ふ者の數迄勘定に入れたならば女性自殺者の數は大に增加することゝなり、隨て自殺者の數は男女間に大した差異は起るまい。所が何故女子は自殺しやうと思ひながら、之を斷行せぬかと云ふに、そこが女性の特色で、つまり之を實行するだけの勇氣を有たないのである。爲に眞に自殺する者の數は少いことになつて居るのである。

(三)女は單に氣が小さいとか、量見が狹いとか云ふに止らずして、キャンベルの言ふ所に據れば、女は男よりも一層多く、輕症なる憂鬱病に罹り易いものであるから、自然往々自殺しやうとする心を起し易いものであるさうだ。而かも

何故實際に自殺を決行しないかと云ふに、キ氏の說では、女が勇氣を缺いて居ると云ふよりも、寧ろ女は諦めがよいのと、義務心が強いからと云ふことになつて居る。併し私は女の如何なる悲境にも諦め易いことや、子供を思ひ家事に焦慮する、母なり妻としての義務心の強いことも承認するが、同時に自殺の如き暴行を敢てする勇氣を缺いて居ることも、明かな事實であると思ふので、之等の事情は同じやうに、女性自殺者の數を減少せしめる原因となつて居るものと思ふ。

(四)更に又女も屢々自殺せんとの意志を生じた場合に、往々實際に之を決行せんと試みることてあらうが、女は自殺の方法に就て充分なる知識なり技倆を缺いて居るし、又一般に女の取る自殺の手段、例令ば投水とか服毒の如きは、往々自殺をして不成功に了らしむるものであるから、自然女の自殺は失敗に歸することの多いもので、爲に自殺者の數を減少せしめて居るのである。其故自殺心を起したものゝ數でなくとも、若し實際自殺を試み而かも失敗した者の數だけでも勘定に入れたなら、女性自殺者の數は大分增加するてあらうとのことである。

然るに一體自殺は男女を通じて、田舍よりも都會に、又農業地よりも工業地に、一層多數であると云ふことであるが、商工業の盛んな都會では、段々に女工が殖え爲に經濟的獨立を圖る婦人も增して來るので、恰ふどさう云ふ場合に女性犯罪者の增加するやうに、女性自殺者の數も多くなつて居るとのことである。要するに之は女性が段々に男性化するからのことで、又止むを得ないことではあるが、併しなるべく之等の婦人に慰安を與へる方法を講ずるとか、又は飲酒の如き惡い習慣に染まぬやう注意して、女性自殺者の增加を防ぎたいものである。幸ひ歐羅巴では男性自殺者の增加する割合に、女性自殺者は增加して居らないとのことである。

第三、自殺の原因。女性自殺者の比較的少數なること、及び其理由に就ては既に說明した所であるから、私は更に進んで自殺の原因なり動機に就て、男女を比較しさうして何等か女性の特色は見られないものか、少しく穿鑿して見やうと思ふ。所で男女を通じて自殺の原因となる主なる事情は、肉體の苦痛、貧

困、愛情、發狂、悔改等であらうと思はれるので、之等の事情に就て、男女の自殺數を比較して見やう。

(一)肉體の苦痛、卽ち疾病とか負傷とか云ふやうな、肉體の痛苦に堪へられないて、其極自殺する者は男女何れに多いかと云ふに、モルセリは男女全體の自殺者各百人中に於ける割合を擧げて居るので、參考の爲之を次に掲げやう。

地名	男	女
獨逸(一八五二—六一)	九、六一	八、〇八
白耳義	一、三四	〇、八四
佛蘭西(一八七三—七八)	一四、三八	一三、五六
マドリット(一八八四)	三一、八一	三一、二五
普魯西(一八六九—七七)	六、〇〇	七、〇〇
ザクセン(一八七五—七八)	四、六一	六、二一
伊多利(一八六六—七七)	六、七〇	八、五〇
ウキーン(一八五一—五九)	九、二〇	一〇、〇四
同(一八六九—七八)	七、七三	一〇、三七
巴里(一八五一—五九)	一〇、二七	一一、二二

此表に據ると、獨逸や白耳義等では、男の方に割合が多くなつて居るけれども、普魯西や伊多利等では、女の方が割合に多くなつて居る。併し之は全體の自殺者百人中での割合であるから、例令ば右の表にて、最も多く女の方に割合が多くなつて居る、ウキーンの男九・二〇に對する、女の一〇・〇四、卽ち男の一に對する女の一・三四と云ふ割合に就て云ふも、全體に於ける自殺者の數は、男の方非常に多くて、常に女の三乃至四倍に當つて居るのであるから、實際身體的痛苦より自殺する者は、ウキーンでも、男の方に著しく多數である譯である。まして女の方が割合に少くなつて居る、獨逸や白耳義では、這般の自殺者が男の方に非常に多くなつて居ることは云ふを俟たないことである。

然らば何故に女性間には、身體的痛苦に基く自殺者の數が少いのであらうか

と云ふに、之れは云ふ迄もなく、女の體質が疾病や負傷に對する抵抗性を餘計に有ち、隨て容易に忍耐し得るからである。

（二）貧苦、缺乏、生活難も亦屢〻自殺の原因となるものであるが、之に就て男女を比較して見るに、やはり女の方遙かに少數である。私は既に緒論の所で、男女の有機的差異を證明する爲に、ロンブローゾの統計を擧げて置たが、あの表に據て見ても、何れの國でも、生活難から自殺する者は著しく男に多くて、女に少いことが分かる。然らば何故に這般の自殺者は女性間に少數なのであらうかと云ふに、つまる所女性は體質の關係で粗食に堪へ得られるし、貧乏生活に辛抱し易いからである。又女は兼て適應性に富んで居るので、若し一朝過つて窮乏の身となるも、能く貧乏相應の生活をなし、そのやうな境遇に適合し易いものであるから、敢て自殺するに及ばないのである。メルドーは次のやうなことを云ふて居る。曰く「公爵夫人と洗濯婦との性質上の差異は、單に表面上のものに過ぎない。と云ふのは公爵婦人と雖も萬一破產窮乏の身とならんか、能く其境遇に自己を適應せしめ、さうして容易く洗濯婦になり變はることの出來るものであるからである」と。之は尤より極端の言であらうけれども、一體に身分の良い夫人方でも、一朝夫の失敗によりて家計の傾いた場合に、隨分女中とか待女の位置に落ちぶれても、敢て厭はない態の見へるものであるが、男は仲々さう云ふ風にゆかない。一度贅澤な貴族的の生活に慣れてゐたものなら、容易に貧乏生活に甘んずる能はざるものである。其故貧苦窮乏の餘り屢〻男は自殺を敢てするに至るのである。又事業に失敗して破產を來たすと云ふやうな場合に、直接に責任を感ずるものは、男であつて、女は左程に之を感じないものであるから、男のやうに心痛しないものである。加之女は子供のことを思ひ、その前途を氣遣ふものであるから、貧の苦しみにも耐へ、容易に自殺を決行せぬ次第である。之に反して男は家計上の責任を感ずることは大いけれども、子供のことは餘り掛念しないものであるから、往々貧苦の爲に自殺を遂げることになるものである。

尙ほ婦人は男子よりも自負心なり自重心の弱い、而して依賴心の强いものであるから、餘儀ない場合に遭遇するも、若し男子なら寧ろ潔く死を選ぶであら

うに、婦人は平身低頭しても、他人の憫れみを乞はんとし、之を以て左程つらいことゝ思はないやうてある。更に斯樣な場合に、道德心の缺げてゐる婦人てあつたら、止むなく賣淫婦に迄も墮落して、生活の方便を求め、貧苦の救治策を講ずることになるのて、餘程のことてなければ、容易に自殺しないものてある。卽ち窮乏の極に達し百計盡き到底如何ともする能はざるに至り、加ふるに老衰して居るとか、又は自尊心の爲に、賣淫婦たる能はざる場合てないと、容易に自殺を敢行しないものゝやうてある。

(三)戀愛　と云ふか、痴情と云ふか、要するに愛情の爲に犯罪を敢てすることもあるが、自殺も亦愛情に起因することの少くないものてある。今此種の自殺に就て男女を比較して見やうと思ふが、ロンブローゾの揭げて居る統計によれば、全自殺者百人中に存する割合は次のやうになつて居る。

地名	男	女
獨逸(一八五二—六二)	二、三三	八、四六
ザクセン(一八七五—七八)	一、八三	五、一八
墺太利(一八六九—七八)	五、八〇	一七、四〇
ヴキーン(一八五一—五九)	五、八九	一四、一三
伊太利(一八六六—七七)	三、八〇	七、五〇
白耳義	九、五三	一二、〇八
普魯西(一八六九—七七)	一二、〇八	八、〇〇
佛蘭西(一八五六—六八)	一五、四八	一三、一六

此表に據て見ると、普魯西と佛蘭西は例外て、其外ては悉く皆女子の方に割合が多い。尤より實際の數に於ては、男女何れが多數を占めて居るか分からぬが、獨逸や墺太利ては、女の方の割合が三倍以上にもなつて居るから、愛情に基く自殺者の數は、女の方多數なるか又は少くとも男と同じ程てあらうと思はれることてある。其故要するに、全體として自殺者の少い割に、此種の自殺者は女性に於て著しく多數なることを承認し得られる次第てある。其多數に自殺

する所からして、愛情に基く犯罪卽ち殺人等は比較的に少くなつて居るものである。其故愛情に基く犯罪と自殺とは反比例になつてゐることを知ることが出來る。

然らば何故に此種の自殺は婦人間に多數であるかと云ふに、一體女は一たび戀情を催ふし、偕老の契でも結んだ場合には、其愛情は比較的に濃厚であり、熱烈な者であるから、或は失戀に陷たとか、或は情人を亡くして、其悲みに堪へられないやうな場合には、容易に死を決し得るに至るものである。尤より女なりとて、薄情なる情人に棄てられたり、又は冷遇なり虐待せられるやうな場合には、憤怒・怨恨・嫉妬の情を惹起し、遂に情人を殺害するやうな犯罪を敢てすることもなきにしもあらねど、概して女は正面男と爭ふには、力及ばざるものであるから、殘念に思ふの餘り、くやしいと感ずるの極、遂に死を決し、時としては幽靈と化して怨を晴らさうとする者もあり、爲に自ら其生命を絕つに至るものである。又若し婦人にして眞に深く其夫なり情人を愛慕して居るやうな場合には、如何なる冷遇虐待を被むるも、其罪を惡んで其人を惡まずと云ふ風て、復讐するなどゝ云ふやうな害意は夢想だに起さないが、而かも愛なき生活は其耐へ難い所からして、自ら戀愛の犧牲となり、さうして自殺するに至ることもあるやうである。況んや情人なり夫なりの死別に遭遇するやうな場合には、愛情を失ふは生命を絕つよりも一層苦しい思ひもするので、遂に自殺を斷行するに至るものである。そこで若し婦人は自殺し得ないなら、發狂するに至るもので、要するに斯樣な場合に、婦人は自殺か發狂か何れかに陷るものである。マルローの統計に據れば、戀愛の阻害せられた爲に起る發狂者の數は、女子に多數なることを示めして居る。

種々なる境遇	發狂者百人中男	同上女
失戀	一、五	二、五
欺かれたる場合	〇、三	一、七
棄てられたり又は死別	〇、六	三、二

然るに元來發狂者の數は女性に多いと云ふことであるから、右の表は單に百

分比例に於て、のみならず、實際戀愛に基く發狂者の數も、女子に於て多數なることを示めすものである。

(四)然らば發狂した場合に、男女何れに自殺者は多數なるやと云ふに、ロンブローゾの統計に據ると、女子の方に多數なることを示めして居る。

地名	發狂者百人中男	同上女
獨逸(一八五二—六一)	三〇、一七	五〇、七七
普魯西(一八六九—七七)	二三、五〇	四四、〇〇
ザクセン(一八七五—七八)	二六、五九	四八、四〇
墺太利(一八六九—七八)	八、二〇	一〇、八〇
白耳義	四一、二二	八一、九四
佛蘭西(一八五六—六八)	一五、四八	一三、一六
伊太利(一八六六—七七)	一六、三〇	二七、五〇
那威	一七、九〇	二八、四〇

何故に發狂に基く自殺者は、女性間に多數であるかと云ふに、ロ氏の說明に據ると、婦人は產褥熱とか伊太利癩病の如き、急性的の發狂を惹起す所の疾病に罹り易いからである。尙ほ女性に普通の狀態では、男性程變化性に富まないけれども、異常の狀態では、往々極端に走せ常規を逸するやうな場合も起り得るので、自然發狂者の間では自殺も多くなる次第である。

(五)不品行の結果姙娠したとか、或は何か非常に面目ないことがあつて、他人に顏を合はすことも出來ないと云ふやうな場合に、或は其罪を悔ひたり或は其過を恥ぢて、其極自殺するに至るは女性の方に多いやうに思ふ。之を數字で以て證明すべき何等の統計をも有たないから、確實なことは斷言出來ないけれども、私通の結果姙娠でもしたので、不名譽を雪ぐ爲に自殺するが如きは、全然女子にのみ起ることで、男子には絕無のことであるから、少くともそれだけでも、女子に此種の自殺は多い譯である。

第四、自殺の方法。最後に自殺の方法に就て、男女間に何等かの差異はなきやと尋ぬるに、茲にも男女の特質が現はれ、互に一樣でないことが分かる。

「男は縊首し女は水に溺れる」と云ふは、尤より例外も少なからぬことてあるけれども、大體歐羅巴の各國に適用される通則てあると、エリスは言ふて居る。それて丁抹に於ける、千八百六十一年から八十六年迄の調査に依ると、自殺者百人中縊首したものが、男て八二・九人あり、女て五六人あつたと云ふことてあるから、縊首の男に多い一例となるものてある。所が曾に大人ばかりてなく、少年自殺者の場合ても亦同樣て、男兒の多數は縊首し、少女は水に溺れて死ぬるさうてある。然るに同じ歐羅巴ても英國ては、男は武器を以て女は毒藥て以て自殺し、又女は高い所から飛び下りて死ぬることが多くて、男の二倍もあり之に反して鐵道往生を遂げることは、男の方に著しく多いとのことてある。尙ほ印度ては男女共一般に自殺に溺水の方法を取るものが多いと云ふことてあるが、それてもシュペールの言に依ると、七人の婦人中六人迄は水に溺れて死し、男は溺水するものと縊首するものと相半ばすと云ふことてある。然るにオーグルは、千八百八十五年から八十三年に至る間、英國に於ける自殺者の採りたる、種々なる方法に就て調査したが、其結果は次のやうになつて居る。

自殺の方法	自殺者千人中男	同上女
縊首及び絞殺	四一七	二四〇
溺水	一五二	二六四
斬殺又は刺殺	二〇七	一二九
毒藥	七九	一四五
銃殺	六七	二
高所より墜落	二一	三六
鐵道往生	二四	八
其他	三三	一七六

之等の事實に依て見ると、一般に男は自殺するに、縊首とか斬殺とか又は銃殺の如き能動的の方法て、同時により多く思慮を要し且つ一層見苦るしい方法を選んて居るが、女は之に反して、溺水とか服毒とか又は墜落の如き、所動的の方法て、さうして決心するに餘り困難ならざる、又一層體裁のよい方法を採、

つて居るやうである。之は男の特質が活動的であり、女の特質が所動的なるに一致するものである。然るに右の表に於て一つの例外と認むべきは、鐵道往生の場合である。一體鐵道線路を枕にして轢死するは、所動的の自殺法であるが、而かも男の方に多數で女の三倍にもなつて居る。所で何故女は所動的の方法なるにも拘らず、轢死を採ることが少いのであらうかと云ふに、之には理由があるやうだ。即ち所謂鐵道往生は尤より所動的の方法ではあるが、線路に飛び込むと云ふには大分強い決心を要することであり、又其死に態が甚だ不體裁であり、且つ公衆の前に露らさるゝことであるから、同じ死ぬるにしても不體裁な死に方はすまい、死後人に見られても恥かしからぬ態をして居りたいと思ふ女に取りては到底耐へ難いことである。そこで若し自然に苦もなく死ぬるやうな方法で、而かも如何にも體裁のいゝ方法があつたら、それこそ女子に取りて理想的の自殺法であらうと思はれる。そは兎に角オーグルの統計に據りて示されたる事實は、普魯西に於て千八百八十八年に調査せられたるものと一致して居る。普魯西では女が比較的により多く能動的の方法を採ると云はれて居るが、それ

て、も右の調査に依れば、能動的方法を採つたものが、男で百人中八十九人女で四十三人、又所動的方法を採つたものが、男で百人中僅に十一人女で五十七人と云ふことになつて居るので、一般に男は能動的な方法を選び、女は所動的方法を採ると云ふことは、確かな事實であると云ふてよろしい。

尙ほ時勢の推移と共に、男女の選ぶ自殺の方法に何等か變化は起てゐないか、と云ふことが問題になつてゐるが、エリスは變化の最も著しく現はれて居る英國に於て、千八百五十八年と千八百九十一年との自殺者を比較して、統計を作つて居るので、參考の爲之を次に掲げやう。

自殺の方法	自殺者百人中男			同上女		
	千八百五十八年	千八百九十年	千八百五十八年	千八百九十年	千八百五十八年	千八百九十年
武器	二七、九	三五、四	一九、〇	一五、五		
縊首	五二、四	三三、八	三六、〇	二一、八		
溺水	一二、二	二〇、四	二八、二	三六、八		
毒藥	七、五	一〇、四	一六、八	二五、九		

之に據りて見ると、武器を使用して自殺することは、男に於て增加し、女に於て減少して居る。而して縊首は男女共に減少し、之に反して溺水と服毒とは男女共に增加して居ることが分かる。そこで今之等四種の自殺法に就て、武器を使用するのと縊首とを合せて能動的の方法とし、溺水と毒藥を服用することを合せて所動的のものとなし、さうして之等二種の自殺法に就て比較して見ると。

自殺の方法	自殺者百人中男		同		上女	
	千八百五十八年	千八百九十一年	千八百五十八年	千八百九十一年	千八百五十八年	千八百九十一年
能動的方法	八〇、三	六九、二	五五、〇	三七、三	四五、〇	六二、七
所動的方法	一九、七	三〇、八				

斯う云ふことになるので、男の方では能動的方法に於て減少し、さうして所動的方法に於て增加して居るが、女の方でも亦能動的方法に於て減少し、さうして所動的方法に於て增加して居る譯である。して見ると女は益々女性的となり、男は稍女性的になつたのではないかとも想像される次第である。尤より單に此一例のみを以て、人心の變動を測定すべきではないが、又以て文明の人心に及ぼす影響の一端を察知するに足ると思ふのである。

結論

女性心理の特色は、以上三篇に於て大略說明したつもりであるが、要するに女性は感情的であつて、少くとも現在の狀態に在りては、知力特に概括力や、推理力では、著しく男子に劣り、又積極的の意力に於ても、男子に及ばざること遠しと言ふべきである。そこで自然男優女劣の說も起つて居るのであるが、私は茲に結論として、少しく男女優劣論を試みやうと思ふ。

第一、子供と婦人。今日吾々の能く耳にすることは、彼のスペンサーの言つたやうに、女性は發達を阻害せられたる、換言すれば不充分なる發達を遂げた所の男性であると云ふ議論である。斯く女性を以て充分に發達しない男性と見做すのであるから、つまり女性は大人となつても、子供に近いものであり、爲にトビナールの論じたやうに、男性と子供の中間に位するものとなつて居るのである。所で之は果して根據のあることであらうかと云ふに、必ずしも空想ではない、多少そのやうな事實の存することを認めらるゝ次第である。なぜと云

ふに、女性は一般に早熟であつて、男性よりも速に成長するが、其代はり早く其成長を止めるので、爲に充分に發達しない、何となく物足らぬ所があるやうであり、隨て男性程變化性に富まないものとなり、著しく異つた型のものは甚だ稀であるやうに思はれるからである。それで身體の構造なり、精神の働き方に就て云ふも、女性は餘程子供に類似して居る所のあるのは爭はれない事實である。疾病に就ても同じやうな事實があつて、エリスの云ふてゐる所に依ると、子供と男子に普通なる病氣で、婦人に稀なるものを見出すことは困難であるが、子供と男子に稀有なる病氣で、婦人に普通なるものを見出すことは更に困難である。然るに之に反して、子供と婦人に稀有なる病氣で、男子に普通なものを見出すことは容易いとのことである。さう云ふ次第であるから、男女は同一の出立點から出發したけれども、男性はずん〳〵前進し、女性は獨り後方に殘されて、遂に子供と同じやうな狀態に止つて居るものであるかのやうに思はれるのである。

米人チャンバーレインは、其の著「人類の進化に於ける兒童の研究」に於て、子

供と婦人と題する章の所で、男女を比較し、さうして其身體なり精神に於て、互に相違する點を二百八ヶ條も擧げて居るが、其中子供と共通の點が八十三ヶ條もあるやうに記して居る。依て今之を參考して婦人の男子と異り而かも子供と共通なる主なる點を擧げて見るなら、大略次のやうなことになつて居る。

身體的特徴		同上	
頭蓋骨	輕、平、柔軟、	喉頭	充分に發達せず
腦髓重量	重（體重との比較上）	手、足	小、短
後頭突起	小	骨	輕、細、多乳性
頸	比較的に短、圓、	關節	小
甲狀腺	大	皮膚	緻密
頭蓋容量	小（絶對量）	腹部	比較的に大
前頭	直立、狹隘、	股	著しく短、大
顏面	小、比較的に廣、	身長	低

體溫	高	肝臟	比較的に大
呼吸	弱	體重	少
血液	赤血球、ヘモグロビン少量、比重小	臍の位置	比較的上方
直立姿勢	不良	脈搏	高
軟骨	一層柔軟	脂肪	多
筋肉	柔軟	鬚髯	無
胴	比較的に長		

精神的特徴		同上	
受感性	鋭敏	破懷性	大
感動性	强大	被暗示性、催眠現象	多
幻覺	多	意志の持續力	弱
想像作用	盛	音聲	高、鋭
推理作用	劣	記憶作用	良

抽象作用	拙	模倣的動作	多
情緒	顯著	辨舌	流暢
動搖性	大	個性の發現	少

斯樣に種々なる點に於て、婦人は子供と能く類似して居るものであるが、特に著しく一致して居ることは、外觀上でも、頭が比較的に大きく、胴は長く而して手足の短いことである。之は普通に「兒童型」と稱えらるゝものであるが、婦人の身體も亦此型に當嵌まるものである。又精神上では、感動性強くて情緒の起り易いことや、精神の動搖甚だしくして注意集注の困難なこと、且つ推理力に乏しいと云ふことなどが、其最も著しい點であらう。

然るに精神活動に於て、男女兩性の特色なり其因て起りし原因に就ては、既に說述した所であるから、更に反復するの必要はないと思ふが、要するに、女性は體質なり身體の構造上から、比較的に男性より一層感情的であることは免れないものである。併し之は男女の生殖的分業の爲に起つたことであり、單に

已むを得ないと云ふばかりでなく、實際必要な大切な性質とも見做されるのであるから、之を以て直に男女間の優劣を論ずる根據とは致し難いものである。又女性は今日の所では、概して知能なり意力に於て男性に及ばない所があるやうに思へるが、併し之は主として敎育や境遇の然らしめた所であつて、決して本來固有の特徵と見做すべきものではない。まして女性にも亦男性の遠く及ばない直覺力なり、忍耐力のあるありて、長短相償ふことも出來るから、之を以て直に女性を劣等視する譯にはゆかない。

所が婦人は身體の發達不充分にして、大人となつて後も、依然として兒童型に留つて居ると云ふので、前にも述べたやうに、婦人を以て發達しない所の男子となし、進化上一段劣等のものであると論ずる人もあるが、之は其當を得た解釋であらうか、私は之に就て少しく研究して見やうと思ふ。尤より婦人の身體が所謂兒童型に留つて居ると云ふことは、明白な事實であつて何人も之を疑ふことは出來ないが、併し此の爲に婦人は充分に發達しないものであるとか、又は發達を阻害せられた所の男子であるとし、更に進んでは婦人を劣等視する

のは、如何がのものであらうか、之は大に攻究を要する問題であると私は考へて居る。

なる程男子は婦人に反して、兒童型より一層多く遠かり、隨て著しく變化して居るものであるけれども、併し身體の或る部分に於ては、例令ば乳とか毛髮とか骨盤とか生殖器などでは、却て女性の方により多く發達し變化して居るので、之等の點に於ては、男性は寧ろ兒童に近いものである。其故に頭とか胴とか手足の均合からして、「婦人は發達せざる男子」であると云ふならば、同一の理由で以て、乳とか毛髮とか骨盤の如何により、「男子は發達せざる婦人」であると云ひ得る譯のものである。蓋し男女を以て同一の方向に發達して居るものと見るから、女性のみが充分なる發達を遂げてゐないやうに思はれるのであるが、實はそんな譯のものでなく、男女性を異にするにつれて各々異れる方面に發達したもので、詳はしく云ふなら、男女共に出立點は同一であるけれども、それが右と左と云ふやうに、反對の方向に發展したものであるから、兩性共に充分に發達した點と、發達しない點とを具備するやうになつた次第である。其故同一の標準を以て比較さるべき性質のものではない。そこで男女の一方に於て、其發達した方面から云ふなら、他性より進歩して居る譯であるけれども、其發達してゐない方面から論ずるなら、それだけ他性より後れて居るものである。さう云ふ譯であるから、女性に於て男性程に充分なる發達を遂げてゐない點のみを見て、「女性は發達せざる男性」などゝ論ずるは、實に不公平の甚だしいものである。若しそのやうに云ふなら、よろしく男性に於ても女性程に充分なる發達を遂げてゐない點のみを擧げ、さうして「男性は發達せざる女性」なりとも論ずべきである。果して然らば「婦人は發達せざる男子」なりと云はれたからとて何も劣等者と決定さるゝ理由はない。要するに、或る點に於て充分なる發達を遂げてゐないとか、又は發達が阻害されて居るとか云ふことが、よし事實であるとするも、それで以て男女間に優劣の差別を附し得る譯のものではない。

今參考の爲此點に關する二三歐米諸學者の所說を掲げんか、伊太利の心理學者なるマンテガツツアは、其著「人相學」に於て、婦人の容貌は兒童に類似して居ることを認めて居るけれども、男女を以て各々異りたる天職を有するものとな

し、爲に互に相對立し何等優劣なきものと論じて居る。又米國の人類學者なるボアスは、曾て或る學術雜誌に次のやうなことを論じて居た。即ち女性は其身體の形狀なり各部分の均合などから云ふと、男性よりも一層兒童に類似したものである。併し斯く女性に於て早く發達の停止せられたことを以て、直に之を劣等視したり、低級型のものであると思ふは、大なる謬想と云ふべきである。若し斯樣な考を以て正當とするなら、顏面の發達は人類に於て早く停止し、猿類に於て却て著しいものがあるから、猿類を以て人類よりも一層發達したもの、高級型のものであると見做さねばならぬやうになるので、そんな馬鹿な話はない。要するに、早く發達の停止すると云ふことのみが、人類の位置を決定し得るものでなく、それよりも大切な條件はつまり發達の方向に存する譯であるから、婦人に於て早く發達を停止する所があるならとて、そは他の方面に發達を來たす譯なので、決して何等劣等視さるゝ理由は成立しないものである。尙ほ獨逸の人類學者ランケの言ふて居る所によれば、世界の各人種中にもモンゴリア人は、比較的に大なる頭と長い胴の短い手足を有つて居るので、最も多く兒童型に類似し、オーストラリア人やニグロ人種は、之と反對に最も多く兒童型から遠つたものであり、又歐羅巴人は其中間に位することになつて居るさうである。又同じ歐羅巴人に就て觀察するも、既にエリスの指摘したやうに、彼等は特に鼻に於て著しく發達して居るので、此點に於て最も多く猿類や野蠻人、さては子供の狀態から遠つて居るけれども、彼等の多毛なることは、却て人間的なることに反し、子供の狀態から進化と云ふよりも退化したものであつて、却て猿類に近いものとなつて居るのである。其故兒童型を去ることの多少なり遠近に依てのみ、人類の優劣を決定する譯にはゆかぬので、隨て婦人の體格が兒童型に近いからとて、其劣等なる證據にはならぬやうに思はれるのである。

然るに婦人の體格が兒童型に類似してゐることを以て、啻に其劣等者たる證明にしないのみならず、エリスの如きは却て之を以て男性に優りたる特質であると迄論及して居る。今エリスが其著「男と女」の結論中に述べて居る議論の大意を茲に擧げるならば、彼は尤より婦人が男子よりも、一層子供に近い狀態に留つて居ることの事實たるを承認して居るけれども、其爲に男女の優劣を決定せ

んとするには、先づ人類なり、動物間に於ける、子供の位地を明かにせねばならぬと論じ、さうして次のやうなことを述べて居る。先づ似人猿（アンスロポイド）に就て之を見るに、其幼い子猿が大猿よりも、却て餘計に人類に類似して居るので、之は何を意味するものであらうかと云ふに、幼い子猿は大猿と比べると、進化の度に於て一層高い所に居ることを示めすものであり、又雌猿は子猿型に近いので、雄猿よりも稍高い位地に在ることを示めすものである。然るに人類は猩々のやうな動物から進化して來たものであるが、雄の大猿から出立したものでなくして、幼い所の子猿から或は子猿に近い雌猿から出立して、進化し來つた者と考えらるゝ次第である。そこで子猿の人類に對する關係は、子供の未來の人類に對する關係と、全く同一であると推定することが出來る。即ち將來人類は更に進化して一層高尚なるものとなる場合に、それは今日の男子から出立するのでなく、子供又は之に近い婦人から出立するものではあるまいか。一體子供は頭の大きいことや、顏の小さなことや、毛の少いことや、骨の細いことなど、所謂人間的の特質を著しく表現して居るものであるが、稍もすると世人は其高等型のものたることに氣付かず、却て大人の男型を以て、兒童型よりも一層發達したる優良なるものであるとの誤想を抱いて居るやうである。尤も周圍に適合すると云ふ點から考えたならば、頑丈な太い骨格で、毛の荒い、且つ頭の小さい猩々は虚弱なる子猿よりも、生存上一層適當なるものであることは、爭はれないことであるけれども、進化論の立場から考えた時に、之は何も進歩と云ふことを證明するものではないと言はなければならぬ。之と同じやうに人類に在りても、幼時から段々と成長するが、それは全く周圍に適合する必要から起ることで、成長とは云ふものゝ或る範圍内では、退化であり老衰であるのである。尤より人類は成長の後猿類に迄墮落するものではないが、或る程度に於て猿類に近いものとなつて居る。又同じ人類に在りても、高等人種は下等人種よりも退化若しくは老衰の境に進行することの少いもので、何時迄も長く子供らしい活潑と元氣とを保ち得るものである。又同じく優等人種の中に在りても、其最も優秀なる所謂天才なるものに就て觀察するに、之れ亦著しく兒童型に接近して居ることを知ることが出來る。所謂天才なる人達は、平均した所短身頭大で、

又一般に顔付や氣質に於て子供らしい所があるものである。斯く進化論の立場から考えて見て、人類に於ける子供の位地と云ふものは、仲々貴重なものであり、隨て兒童型と云ふものも、決して輕侮すべきものでないとすると、婦人の位置と云ふものゝ、眞價が明瞭になる譯である。それは要するに、婦人は男子よりも一層より多く人間的特性を保つて居るので、將來の發達に於ては、男子よりも一層有望な譯になつて居る。一體女性は保守的であるから、進歩しない變化性に富まないものであると云はれるけれども、併し又一方から云ふと、より多く人間的特性を保有し、さうして退化なり老衰に陷ることの少いものであるとも考えられるので、隨て長短相償ひ得るやうになつて居るものである。斯う云ふ風にエリスは論じて居るのであるが、私も大體エリスの所說に贊成するに躊躇しないものである。併しエリスは婦人の位地を辯護するの餘り、所謂兒童型を過重視し、さうして男子の發達を輕小視する傾はないかと、私は疑ひなき能はざるものである。尤より此點に就てはエリスも單に人類學上の見地から、主として形體上の議論を試みたものに外ならぬけれども、人類の將來に於ける進化發展などゝ云ふ大問題は、單に形體上のみより論じ得られる程簡單なものではなからうと思ふので、私はエリスの議論のやうに餘り深入りしないで、單に女性は兒童型に近いからとて、決して劣等視さるべきものでないと云ふことを指摘するに止めやうと思ふ。それで私は此點に就て伊太利の人類學者なるモルセリの言ふて居る所は、實に中庸を得たもので如何にも眞理であらうと思ふ。モルセリ曰く、「婦人が兒童に類似すると云ふので之を劣等視するのも、又男子の成遂ぐる發達をば老衰視するのも、共に正しい解釋とは云はれない。蓋し男女は生物的心理的社會的に相異りたる各自の天職を果すべき任務を有つて居るものであるから、兩性の相異りたる體型は同等同價のもので、其間に何等優劣の差なし」と。

更にエリスは啻に婦人の體型を以て優等視するのみならず、男子も亦之を標的となし、さうして漸次其方に向ひつゝあるものゝやうに言ひ、其證據として男子の女性化(フエミニゼーション)を擧げて居る。エリス思へらく、今日の文明國で都會生活を營んで居る男子は、頭大・細骨・美貌と云ふやうになつて、野蠻人

よりも一層婦人型に近づいてゐる。曾に頭とか大體の骨組ばかりでなく、近世の男子は骨盤迄が婦人型に近づきつゝあるものである。それで今日の婦人の頭なり骨盤と云ふものは、益々婦人の特色を發揮するやうになつて居るが、男子も亦其後を追ふて行き、爲に之等の部分では徐々に女性化しつゝありと。男子の中でも特に學生は餘程女性化したもので、身體から云ふても、精神から云ふても、彼等は普通の男子と婦人との中間に位するやうになつて居る。要するに野蠻生活は戰爭が頻繁であるから男性的のものであるが、近世の文明生活は商工業が盛んになつたので、隨て女性的になつた次第であるから、男子の漸次女性化するのも亦當然のことであると。エリスはさう云ふ風なことを言つて居るが、抑も男子の女性化なる現象は實際に起りつゝありやと尋ねるに、そは確に事實であると私も承認するものである。併しながら近時婦人の侵入しつゝある職業的生活は、漸々婦人をして男性化せしめつゝあるのも、容易に見受けらるゝ事實であるから、エリスが單に女性化のみを力說して、同時に男性化の存することを忘却せるが如き觀あるは、公平なる觀察者の態度を失つたものであると云はなければならぬ。エリスは尤より婦人を劣等視する議論に反對で、現に此の如き議論をば絕對的に無益な愚論であると迄に謗つて居る位だから、女性を辯護するに熱心の餘り、知らず識らず一方の極端說に走つたものではないかと、私は想像せざるを得ないものである。それで私はエリスと同じやうに、女性化を以て確實なる事實であると認定するけれども、其爲に直に婦人型を以て一層優良なものであるとか、又は人類の向ふべき唯一なる標的であるかのやうに思惟することが出來ない。既に女性化と共に男性化も起りつゝあるのであるから、男女兩型は或る程度迄は、互に相近づくであらうが、而かも各其本領を保持し以て人類生活の發展を期するやうになつて居るものではあるまいか、隨て其間何等優劣の差等なきものであると、私は確信して居るものである。

第二、野蠻人と子供並に婦人。子供の野蠻人に類似して居ることは、既に多くの學者の說破したことで、今更茲に、人類の兒童期に於ける野蠻人が幾百千年の長い間に通過した進化の過程を、子供は僅に數ヶ年の間に再び經過するものであるなどゝ云ふことを詳說するの必要はあるまい。所が子供は野蠻人に類

似して居るが、婦人は子供に近いものであるから、自然婦人も亦野蠻人に類似してゐるものであると云はれ、爲に大に劣等視せらるゝこともあるので、私は進んで野蠻人の特色を述べ、さうして斯の樣な議論の可否に論及しやうと思ふ。

先づ第一に野蠻人の體格は所謂兒童型のものであるか、どうかと、尋ぬるに或は然るものもあり或は然らざるものもあるから、此點に於て野蠻人は必ずしも子供に類似して居るとは云はれない。今トビナールが、歐羅巴人に就て調査した身體各部の割合を擧げて見るなら、身長を百とした時に、次のやうになつて居る。

頭	一三	腕	一九、五	下肢	四七、五
頸と胴	三五	前腕	一四	足	一五
上肢	四五	手	一一、五	指極	一〇四、四

そこで之を他の人類に比較して見るに、各部の割合が僅に三乃至五だけの差に止り、大した違ひはないとのことである。左すれば此點に就て男女間に存する差異をば、文明人と野蠻人との間に於て見ることは出來ない、隨て雙方の間に優劣の差異を擧げる譯にもゆかない。

然るに頭の大さを比較して見ると、文明人は一體に大くて、野蠻人は小さいやうである。今デニカーの著「人種」に據て見るに、歐羅巴人の頭蓋容量は平均一五〇〇乃至一六〇〇立方糎であり、亞細亞各人種のも殆ど同樣であるが、黑人種やオセアニヤの人は、平均一四〇〇乃至一五〇〇立方糎である。而してオーストラリア人や、ブシユメンや、アダマン人などのは、更に小さくて一二五〇乃至一三五〇立方糎である。所が子供の頭蓋容量は尤より小さいものであり、婦人のも亦男子のより、平均一〇〇乃至二〇〇立方糎程少さいと云ふことであるから、若し頭蓋骨の大小を以て人間の優劣を決定し得るなら、婦人は野蠻人と同じやうに劣等者たるを免れないものである。併し頭蓋骨の容量を比較したばかりでは充分でないと云ふので、多くの人類學者は腦髓自身の大小に就て比較を試みて居る。今トビナールの調査によると、歐羅巴人で、男子の腦髓重量は平均一三六一「グラム」あり、婦人では一二九〇「グラム」あるが、黑人のは一三一

六「グラム」で、安南人のは一三四一「グラム」あることになつて居る。尤も之等野蠻人種の腦髓を獲ることは容易でないから、比較研究の資料と云ふものが甚だ少數であつたので、そが平均重量と云ふものも餘り確實なものではないけれども、要するに野蠻人の腦髓重量は多少輕いやうである。其故若し腦髓重量の多少を以て、人間の優劣を測定する標準とするならば、婦人は野蠻人と同じやうに到底劣等者たるを免れないものである。併し身長や體重は人種なり男女によりて一樣でないから、單に腦髓重量の絶對量のみを以て、雙方を比較すると云ふことは其當を得たものでない、よろしく身長や體重の割合から比較すべきである。然るに各人種に就て體重の比較的調査を試みたものがないから、單に身長のみに就て云ふと、デニカーの擧げて居る、各人種身長平均比較表に據れば、歐羅巴人中でも身長の低いものがないではない、例令ば猶太人(一六一二糎)葡萄芽人(一六三七糎)伊太利人(一六四五糎)等もあるけれども概して身長高く特に瑞典人(一七〇五糎)英人(一七一二)諾威人(一七二〇)等は其最も高いものであるが、就中蘇格蘭で或る地方の農民(一七九二糎)は世界中で最高の身長を有して居るものである。

然るに野蠻人に在りても、オセアニア人は一七二一糎、黑人種は一六八一糎の身長を有するものであるから、仲々高い方であるけれども、オースタラリア人は一六六七糎、ブシユメンは一五二九糎、アダマン人は一四八五糎、安南人は一五七一糎と云ふやうな最も低い身長を有するものである。左すれば、野蠻人の腦髓は小さいとするも、身長も亦低いのであるから、其割合を取て計算したなら、何も特に歐羅巴人の腦髓のみが大きいと云はれるべきものではない。果して然らば腦髓の大小を以て、文明人と野蠻人との間に優劣の差別を置くと云ふことは間違つた話である。

之と同じやうに、婦人の腦髓も亦小さいと云はれて居るけれども、身長なり體重との割合から比較したならば、男女間に何等優劣の差別を認められないことゝなるものである。今ボイドやビショッフなどの調査に依れば、男子の腦髓重量を一〇〇とした時に、婦人の腦髓重量は九〇しかないものである。然るに英佛兩國に於ける男女身長の割合は、男の一〇〇に對する女の九三に當つて居ると云ふことであるから、若し身長の割合を以て比較したなら、男女腦髓重量